今日のソ連邦

1978
17
9.1



特集 学校教育の問題点

ユーラシア大陸東北端 チュクチ自治管区の人々

地震予知をめざして

今日のソ連邦

第17号　1978年9月1日

本誌の材料はノーボスチ通信社の提供によるものです。

本誌を入手するには

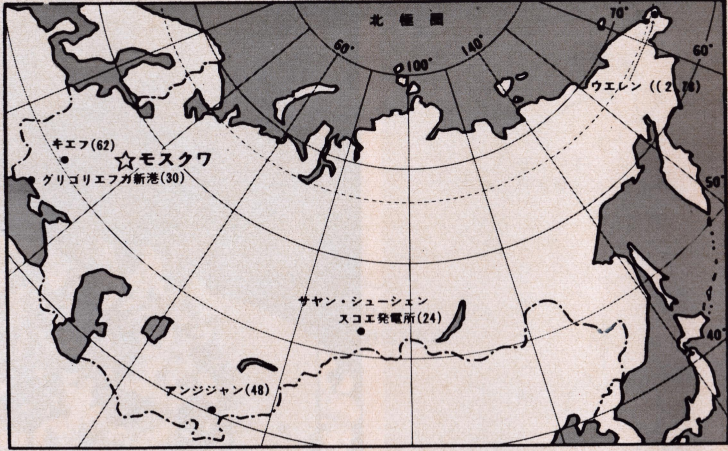
下記送料を添えて広報部にお申込み下さい（誌代無料）。（送金には振替または切手を御利用下さい）

半年分送料……1200円

1年分送料……2100円

同時一括送りの部数か多くなれば、送料も割安になりますから、広報部にお問合わせ下さい。

★数字は関連記事のページ



ソビエト社会主義共和国連邦大使館

東京都港区麻布台2－1－1　電話(583)4224

（本誌についてのお問合せは広報部へ）

広報部　東京都品川区東五反田3－9－13

郵便番号141　電話(03)447－3536(代表)

振替口座東京9－122358（加入者名＝ソ連大使館広報部）

1　チュクチ民族アンサンブルのソリスト、ナージャ・シブルスカヤは、この地の〝太陽〟。
2　チュコトカの海岸は索漠として人影もない。



2



1

ユーラシア大陸東北端
チュクチ自治管区の人々

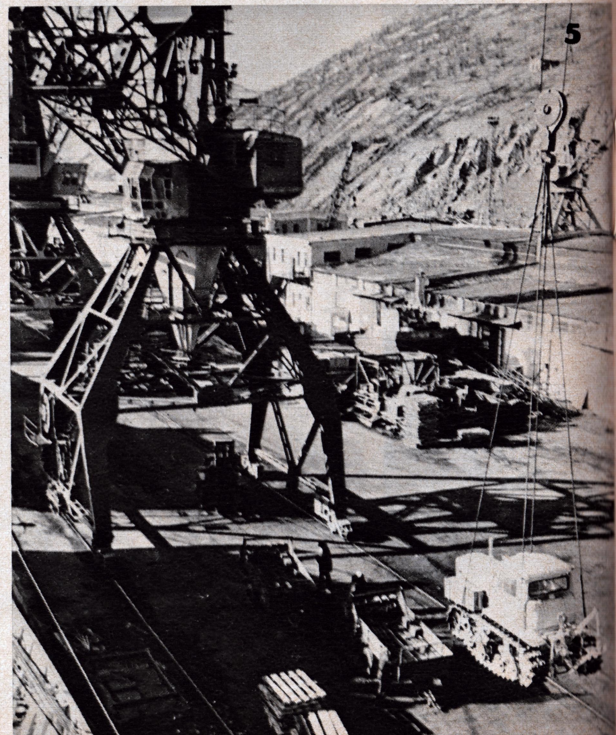

6


3


7


4


8


5

チュクチ自治管区――数字と事実

チュクチ自治管区（チュコトカ）は1930年に創設された。管区の現地権力機関（人民代議員ソビエト）の代議員の51％は、原住諸民族の出身である。チュクチ人はソ連最高会議（国会）に自民族の代議員を送っている。

※　※　※

ソ連では1959年と1970年に国勢調査が実施されたが、この1959年から1970年までの間に、ソ連のチュクチ人の数は1万1727人から1万4000人にふえ、チュクチ自治管区の人口は同じ期間に4万6689人から12万7000人にふえた。

※　※　※

第9次5カ年計画期間中に管区の国民経済の商品生産高は、第8次5カ年計画期に比べて3分の1近くふえた。とくに大きく発展したのは、ボルフラム鉱、スズ、水銀、石炭などの採鉱業。チュコトカの経済の主な伝統産業であるトナカイ飼育業の食肉生産高は過去20年間に4倍にふえ、またトナカイの頭数は最適レベルに近い52万4000頭に達した。

※　※　※

チュコトカのトナカイ飼養者の平均月収は1958年が112ルーブル（1ルーブルは320円）、1975年が362ルーブル（主要消費物資の物価はここでも安定している）。

※　※　※

チュクチ民族管区の原住民は事実上全部、本建築の住宅を与えられており、遊牧生活はツンドラでトナカイを飼っている班の中に一部残っているだけ。

3　ウエレンのソフホーズの党組織書記テルキテギンさん

4　チュコトカとヤクーチアを結ぶコリマ自動車道路

5　チュコトカのナガエボ港

6　チュコトカのツンドラで石油、ガスの鉱床を探査する地質技師やボーリング係には、ヘリコプターは欠かせない交通機関。

7　自宅でくつろぐチュコトカのソフホーズの電気溶接工ボリス・ソボリコフと長女のマリーナ。

8　ウランゲル島で白クマの頭数調査を行う狩猟学者

ラブレンチャ町（シベリア東北端マガダン州チュクチ自治管区チュクチ地区の中心地）の党地区会議から帰る途中のウエレン町（同じチュクチ地区）のソフホーズの党組織書記テルキテギンは「どうです。きのうを見たいですか？」という。

そのときわれわれはヘリコプターの明かり窓に額をおしつけ、ユーラシア大陸の最東端のデジネフ岬が眼下にくるのを見守っていた。この人のよい党書記をがっかりさせないために、彼が何を言っているのかわかったようなふりをしたので、勢いをえたテルキテギンは満足げに説明して始めた。

「島が2つ見えるでしょう？　あれがディオミダ諸島で、西のラトマノフ島がソ連領。その並びの島が米国領。2つの島の間を日付変更線が通っているから、ソ連領のほうはもう今日で、向こうはまだきのうというわけです」

こんなぐあいに私はチュクチ自治管区（チュコトカ）とそこの住民を知ることになった。チュクチ人は少数民族で、その数たったの一万四〇〇〇人（一九七〇年の国勢調査による）。チュクチ人1人当たりの自治管区の面積は約60平方kmである。

チュクチ人の歴史は一種独特だ。いま50歳以上のチュクチ人の多くは、〝骨の時代〟が支配し、ほとんどすべての労働用具や生活用具が海獣の骨から作られていた時代を覚えている。そして〝骨の時代〟からチュクチ人はいっきょに現在にいたったのである。

こうした僻遠の地の人々の生活（あらゆる分野での）レベルが工業中心地並みのレベルにたちまち追い付いたことに、ソ連ではおそらくだれも驚かないだろう。チュコトカにかんする別項の若干の数字や事実を見れば、読者の皆さんもきっと同じ結論に達するにちがいない。だからもはやどこにも見られない現地の独特な生活が、チュコトカの旅で何よりも興味をひくのは当然で、そうした珍しい地方色について私もふれておきたい。

セイウチ猟

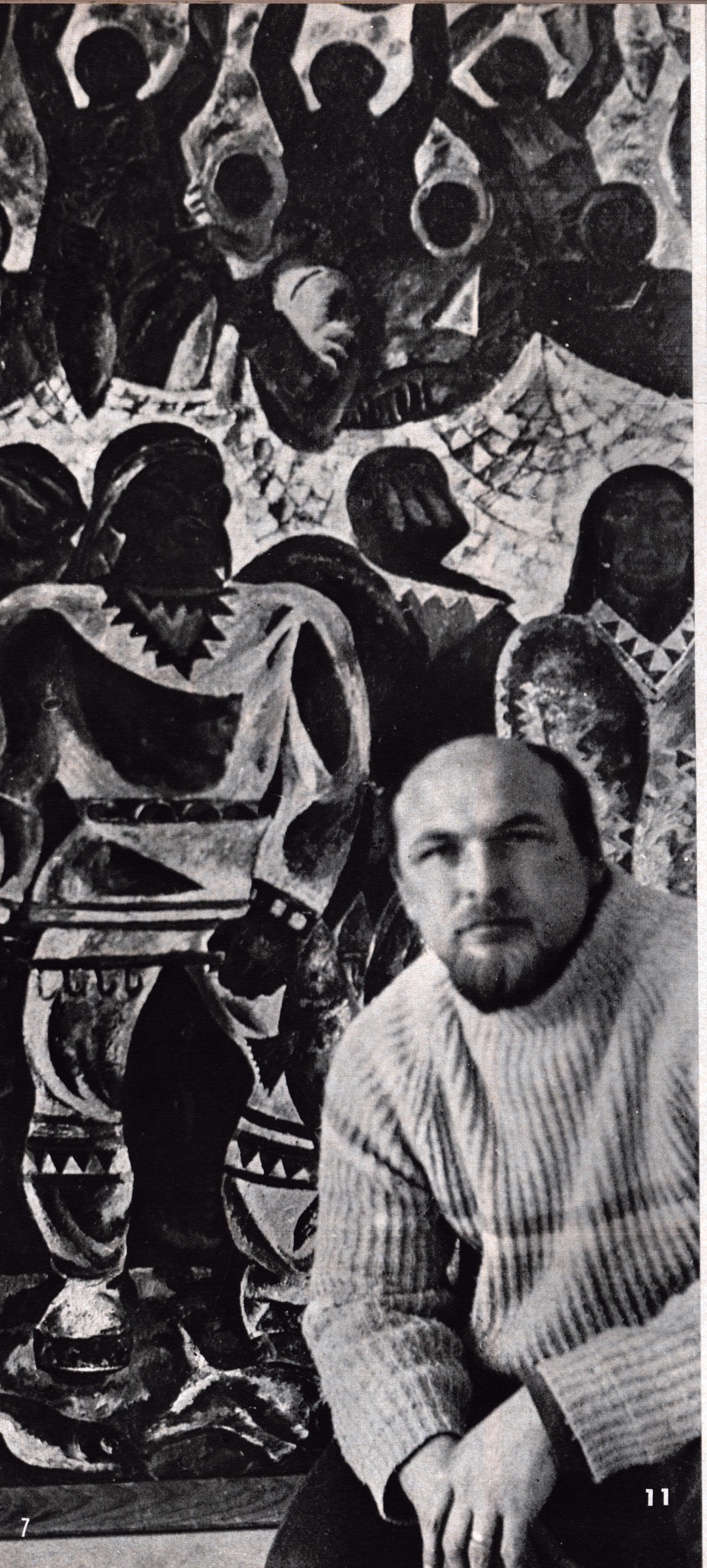
さて、われわれのヘリコプターは、太平洋の上空を目に見えない日付変更線ぞいに進み、無事デジネフ岬の断がいを通過して西に針路を変え、北極海の上空に出た。眼下に数kmもの長いれき岩の突き出た洲とその洲の中にきちんと並んだ明るい色の家の列が見える。

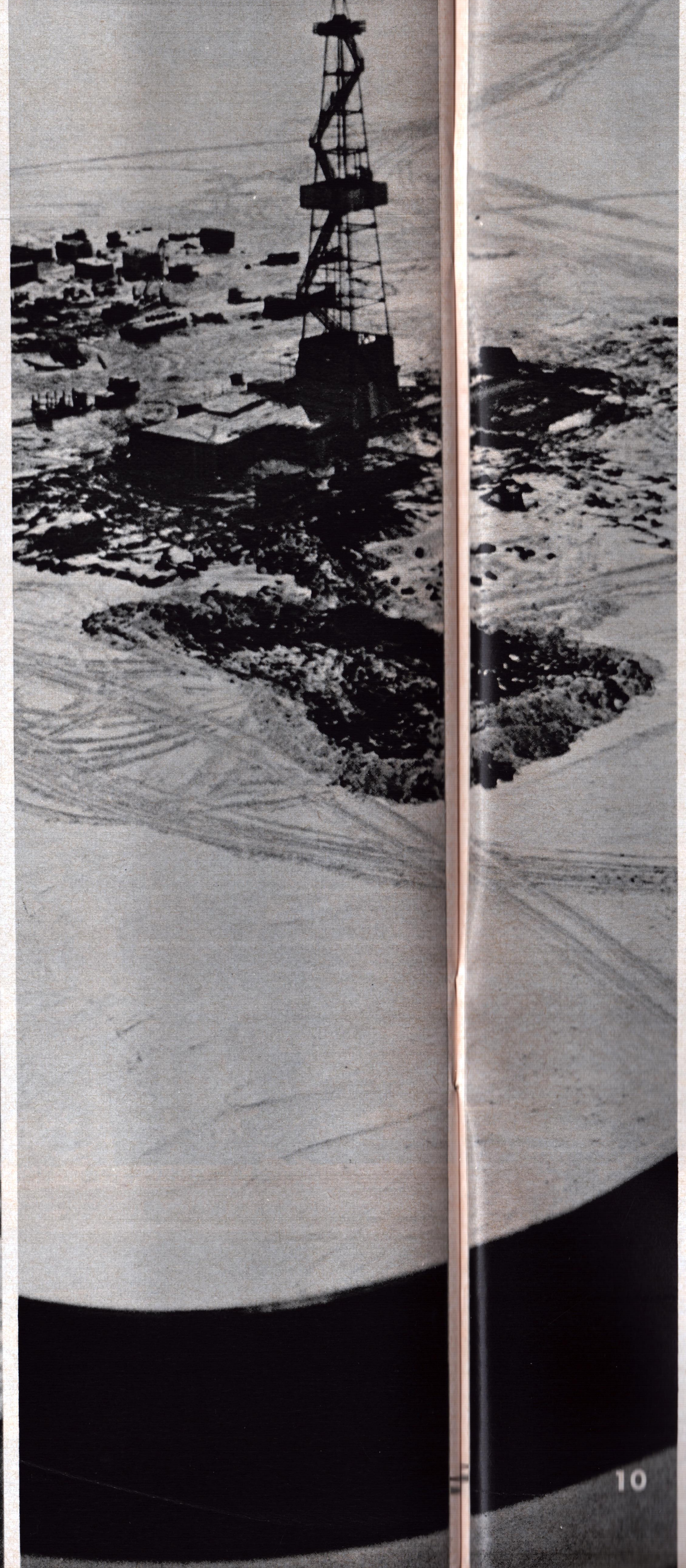
「あれがウエレンです」とテルキテギンがいい、そこでわれわれは着陸した。

ちっぽけな村の宿に落ち着くと、テルキテギンは明日セイウチを撃ちに行こうと誘った。

……明るいが、ほんの少し霧のある朝が、きょうに大きな期待をもたせながら、窓から訪れる。5時ちょうどキャッチャー・ボートでウエレンを出る。まっすぐ進むとインチョウン岬がかすかに見えてきた。ボートの8人のうち、二人はモータわきの船尾に、4人は漕ぎ手の席に（カイはいまのところ船側に横にしてある）、一人は船首にいる。この私は舵手の近くに、毛皮裏の防水

9　ビリビノ原子力発電所の制御室
10　チュコトカで石油が発見された。
11　画家のイワン・ワシリエフと作品『チュコトカの漁民』







服とゴム長靴をつけて座りこんでいる。
　期待にわくわくして高ぶっていた神経もやがて落ち着いたが、テルキテギンが貸してくれた8倍の双眼鏡をのぞいても、あたり一面船影さえ見えない。
　突然、ボートの人々の胸の鼓動が高まったように感じた。セイウチだ！それもかなり近いところにいた。その黒光りする背が、巨大な海蛇が泳いでいるかのように、リズミカルに水上に現れては消えた。私はボートの舷のかげにしゃがみこんだ船首係から目を離さない。その手は銛（もり）を握っている。何か大きなものがボートの近くに浮き上がったかに見えたとたん、船首係はぱっと立ち上がった。銛のとぎすました刃先がぴかりと光る……
　何かが舷の下に沈み、ボートはひどく揺れる。海水が赤く染まる。そしてすっかり静まり返る。船首係の顔に浮かんだ緊張の余りのかすかな笑みとその手の長い銛だけが私の目に見えた。もう一度何かあるなと思ったとたん、ボートは逆立ち、私は下のほうに投げ出された。気がつくとボートが転覆しないように漕ぎ手たちがボートをささえ、上になった舷のほうへけんめいに身体をおしつけているのが見えた。船首係のほうはフウフウいいながら、舷の向こう側にいる何かを銛でなぐっていた。
　やっと元の席にしがみついて、まわりを見て、万事が終わったことを知った。漕ぎ手たちはセイウチを舷の外に手早くしばりつけた。……そのあと銃でまた一頭捕えた。
　セイウチは長さ3、4m、体重は1t以上もあった。
　首尾よい戦果に気を好くしたボートの連中は、すっかりおしゃべりになった。「われわれのおじいさんたちがどうやって海獣猟をやったかを、あなたに見せたんです。頑丈な男にしかやれない危険な仕事ですよ」とテルキテギンは私の肩をたたいた。
　そして私はセイウチの牙の1本をもらった。それは太さが腕ほどで、長さは腕よりもわずかに短かった。

古いものと新しいもの

　われわれがインチョウン岬付近で猟をしているとき、公海から捕鯨船がとったばかりの鯨をウエレンに運んできた。
　「お祝いをしなくてはなるまいて」とテルキテギンはいう。
　夜（といってもここは一晩中白夜で明るい）テルキテギンの家の一番広い部屋の低いテーブルを囲んで客たちが集まり、煮たセイウチの肉となまの鯨の脂身（皮もいっしょに刻んである）を食べた。ほかに煮魚、ジャガイモ、かん詰め、パンも出た。そのあと同じ部屋の普通のテーブルでお茶を飲んだ。
　お茶を飲んでからテルキテギンは「これからクラブに行って祝おう」と腰を上げた。だが私たちは岸辺のまわり道をとったようだ。その途中でテルキテギンは「ここに私の先祖の家があった」と指さしたが、別にそこには何もないようだった。テルキテギンにいわれて

チュクチ自治管区――数字と事実

今トナカイ飼養者の仕事を交替の当直制に移す課題が解決されている。村全体が電化され、ラジオが全戸に普及している。モスクワ、マガダン、アナディリ（自治管区の中心地）のテレビ放送を中継するテレビ網も発達している。

※　※　※

チュクチ文字はソビエト政権後はじめてつくられた。管区では文盲は完全に一掃された。普通教育の寄宿学校（すべてが無料）では原住民族の子供4000人以上が学んでいる。普通中等（10年制）教育への移行も進行中である。小学校の授業は民族語で行われている。これまでの年と同じく、約50人の中学校卒業生（チュコトカの原住諸民族の出身）が推薦入学（無試験）でモスクワ、レニングラード、ハバロフスクその他の大都市の大学に入った。

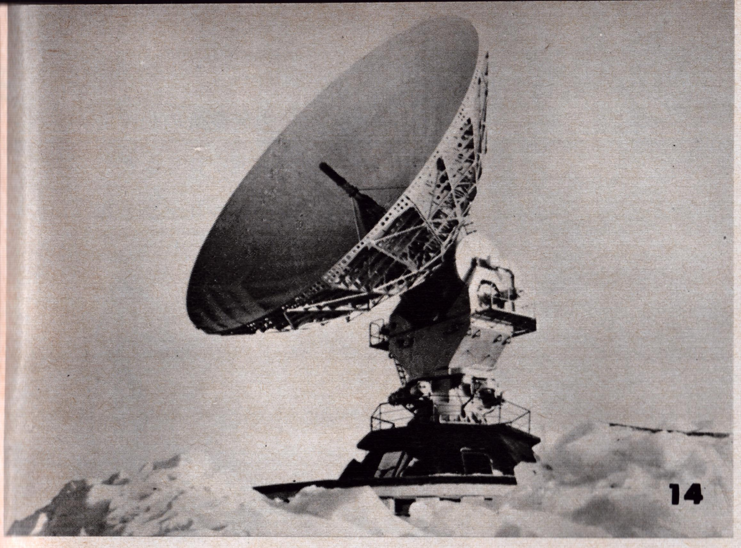
いま管区のさまざまの国民経済部門で、高等、中等教育修了の500人以上の原住民族出の専門家が働いている。

※　※　※

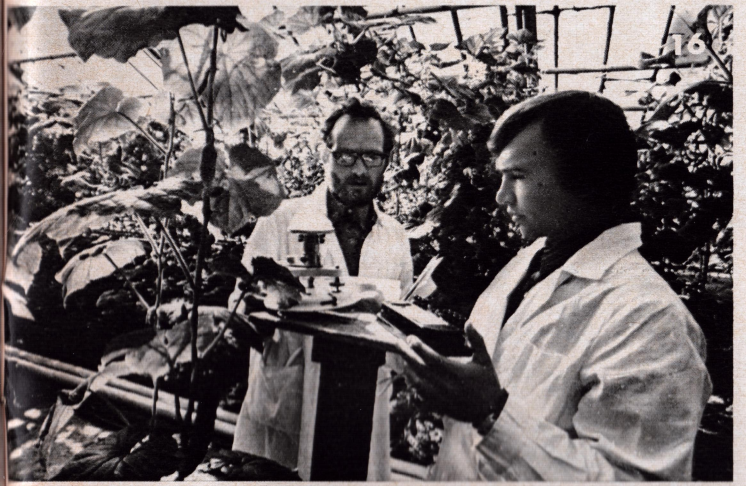
チュコトカには115のクラブ、74の公衆図書館（蔵書総数約700万部）、162の常設映写設備がある。さまざまのアマチュア・グループのほか、プロのチュクチ・エスキモー歌舞アンサンブル『エルゲロン』（夜明け）がコンサートを開いている。このアンサンブルの内外の評判はよい。

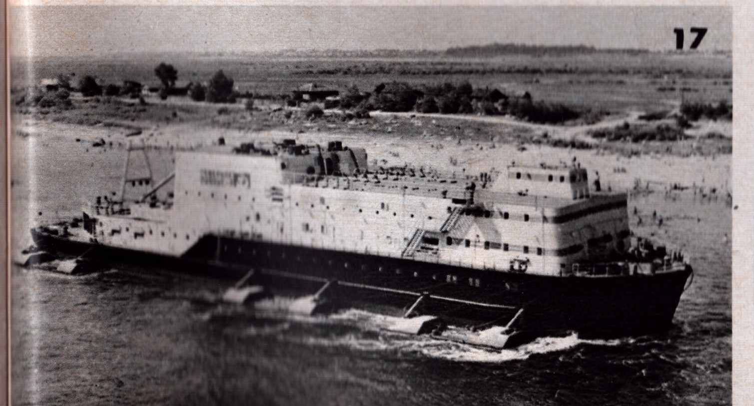
管区の新聞は週4回チュクチ語で出ている。1958年から1970年までに190点のチュクチ語の図書が出版された。

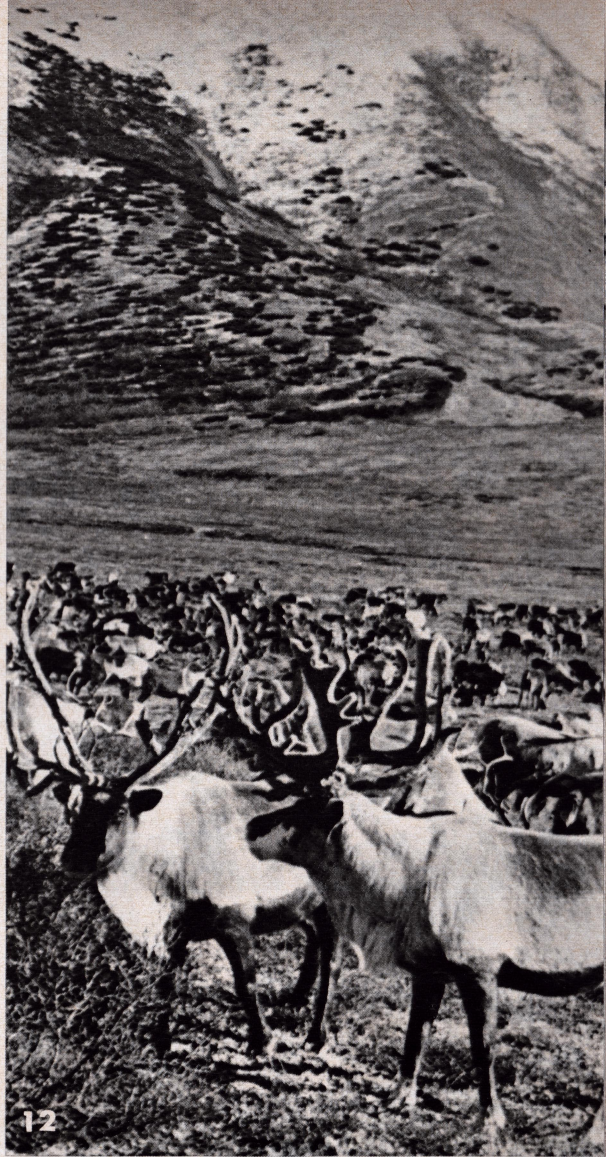
12　トナカイの放牧場
13　チュコトカ沿岸で漁労中のトロール船
14　チュコトカのアナディリ町にあるオルビタ・テレビ宇宙中継受信局
15　ソ連北極地方の東北海域のセイウチ猟は禁止されているが、原住民にかぎり一定数のセイウチを獲ることが許可されている。
16　チュコトカではいろいろな野菜が温室栽培されている。
17　チュコトカの企業に電力を供給する発電船『北極光』

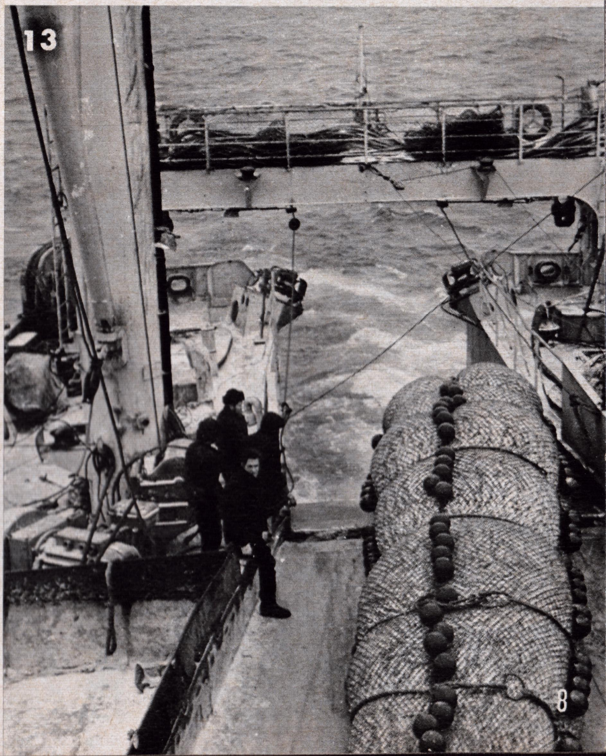














18



19

18　ウエレンのまち

19　アマチュア民族アンサンブル『ウエレン』

20　狩猟に出かけるウエレンの住民



20

よく見ると、底の浅い穴にススだらけの土小屋があった。今世紀の初めに沿岸のチュクチ人はこんな小屋で暮らしていたという。いまのウエレンにはそんな面影は見られない。

村のクラブのホールではコンサートが開かれていて、民族衣装をつけたアマチュアの踊り手がウエレンの踊りをやっていた。これらの踊りは現地の人の間で評判がよいだけでなく、昨年のモスクワの全ソ・コンクールでも好評を博した。どの踊りも、ちゃんと筋のある小パントマイムで、たとえば古い『ツル』という踊りは、人がツンドラで見るものをテーマにしたものだ。『ペトレンコは着陸した』は、この地に初めて極地飛行家ペトレンコ操縦の飛行機が到着した時の物語の断片である。『レーニンの電灯』はここの農村発電所が稼動した話である。

※　※　※

ソ連最東端の町ウエレンの住民は、この地上で最初に新しい1日を迎える。そしてここの住民はひじょうに速く現代的生活水準に到達したことを誇りにしている。また自分たちの独自性を当然ながら誇りに思っている。

☆　☆　☆

（78ページにも関連記事があります）

日本の白内障患者にも光

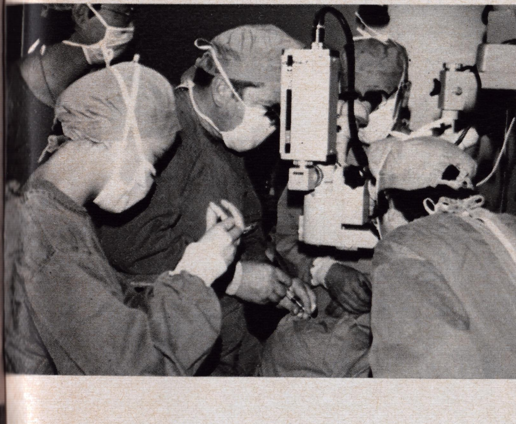
――フョードロフ教授の人工水晶体

V・タラネンコ

本誌の一九七八年第14号で、ソ連のすぐれた眼科医で人工水晶体の考案者フョードロフ教授の来日について紹介した。日本のいくつかの病院で、フョードロフ教授の立ち合いのもとに何件かの白内障の手術が行われ、患者にはソ連製の人工水晶体が移植された。

以来、2ヵ月がすぎた。8月8日、私は岐阜と名古屋を訪れ、これらの手術を行った日本の有名な眼科医、早野三郎・岐阜大学医学部眼外科教授、三宅謙作・三宅眼科病院院長、患者たちと会った。

8月9日、早野教授はこの日何件かの手術があったにもかかわらず、私のインタビューに快く応じ、よろこんで質問に答えてくれた。



早野教授の手術（右）を手伝うフョードロフ教授（6月）

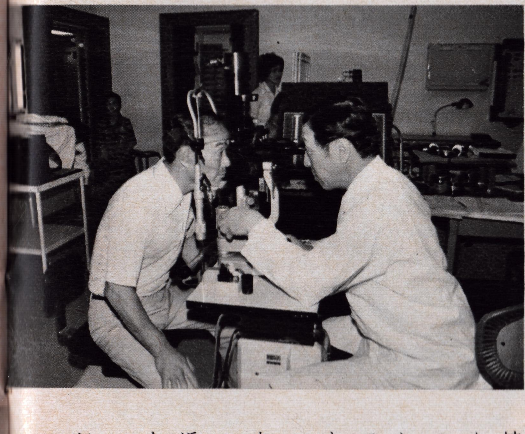
「フョードロフ教授の方法があることをどうやって知ったのですか？」

「私がフョードロフ教授の仕事について初めて知ったのは一九六三年、ブダペストの国際眼科医シンポジウムでの報告を読んでからです。残念ながら日本では、ソ連の医学にかんする詳細な情報が、実質上なく、しかも私はロシア語が分かりません。しかし、乏しいながらもこの情報は、ソ連のこの眼科医の仕事をもっと詳しく知ろうという気を私に起こさせました。

一九七三年に私はソ連へ行き、フョードロフ教授の病院を訪れました。このとき私はメドエクスポルト（全ソ医薬品輸出公団）を通じてソ連製の人工水晶体を50個購入しようと思いましたが、さまざまな理由で実現しませんでした」

「あなたは人工水晶体の移植手術を一五〇例以上なさっているそうですが、フョードロフ教授の人工水晶体について」

「ユニークで、特殊な方法だと思います。フョードロフ教授の水晶体には、一つの重要な長所があります。定着性がいいのです。将来の見通しについて言えば、最良品の部類に入るでしょう。



早野教授の診察を受ける河原さん

もちろん、医者として私は、この方法が絶対的だと言うことはできません。そう言えるためには、もっと経験が必要です。他方、ほかにもいくつか方法があるので、よく比較しなければ結論は出せません」

「フョードロフ教授が立ち合った手術は、どのように行われたのですか？」

「原則的には、フョードロフ教授の方法による手術はむずかしいものではありません。教授は自分の道具を日本へ持参して来ました。初めは不慣れでうまく行きませんでしたが、教授の指導のもとに、手術は首尾よく行われました。私が行っている方法とフョードロフ教授の方法のちがいは、人工水晶体を目に固定するやり方にあります」

「いまフョードロフ教授の人工水晶体をお持ちですか？」

「持っています。二つもらったのです。近いうちに適当な患者がいれば、手術をやるつもりです」

「この方法の日本での普及について、どうお考えですか？」

「人工水晶体移植法は日本では今のところそれほど普及していません。一九七五年に日本の眼科医のあいだに新しい白内障治療法を普及することを目的とした団体が設立されました。その新方法の中にはフョードロフ教授の方法も含まれていました。フョードロフ教授の来日によって日本の医師たちがソ連製の水晶体とその移植法を知ることができたということは大きな意味を持っています。

早野教授は私を診察室に連れて行った。そこには男女二人の患者が待っていた。教授の仕事を邪魔しないようにしながら、私は教授と患者たちの会話に耳を傾けた。顔の表情からも、回復が順調に進行していることが分かった。

「ご覧になって、二人の患者さんの状態はどうですか？」

「この二人の患者には人工水晶体の移植手術が行われました。婦人の患者の右目にはフョードロフ教授の水晶体、左目には私が設計した水晶体が入っています。手術前の視力は0・1でしたが、現在は0・6です。男性の患者にはフョードロフ教授の水晶体が使われていて、視力は0・8まで回復しました。これは眼鏡をかけなくても、自動車の運転ができるということです。水晶体はうまく収まっており、どちらの患者にも炎症はなく、回復は順調に進んでいます。あと1カ月もすれば、患者たちの視力はもっとよくなると思います」



樹下さんの視力も順調に回復している。

早野教授は私を患者たちに紹介した。その一人は岐阜県各務原市に住む河原友助さんだった。

「お年とご職業は？」

「自動車用電気装置の修理と販売をする会社に勤めています。51歳です」

「目が見えなくなったのは、いつですか？」

「3、4カ月ほど前です。最初は物が二重に見えるようになり、それから視力がほとんど完全に無くなりました。医師に勧められて手術を受けました」

「あなたの目の中にフョードロフ教授考案の水晶体が入っていることはご存知ですか？」

「知っています。この水晶体については手術の後、新聞で詳しく知りました。手術の前に知っていたのは、ソ連の外科医が立ち合って下さるということと、この先生が優秀な方だということでした」

「手術はどうでした？」

「手術中は何も感じませんでした。手術の時間は20分でした」

「現在の目の具合は？」

「かなりよく見えます。手術の結果には満足しています。視力はかなり急速に回復しています。10日前には0・5でしたが、きょうは0・8です。眼鏡はかけないつもりです。フョードロフ教授によろしくお伝え下さい」

河原さんと話しながら、私はもう一人の婦人の患者の様子に気をとられた。何か心配しているように見えたのだ。私は婦人のところへ行って、名乗った。彼女は私の名刺を手に取って、名前を読んだ。この婦人は愛知県狩谷市の樹下静枝さん（73歳）だった。

何かご心配なことでも、という私の問いに、樹下さんは答えた。

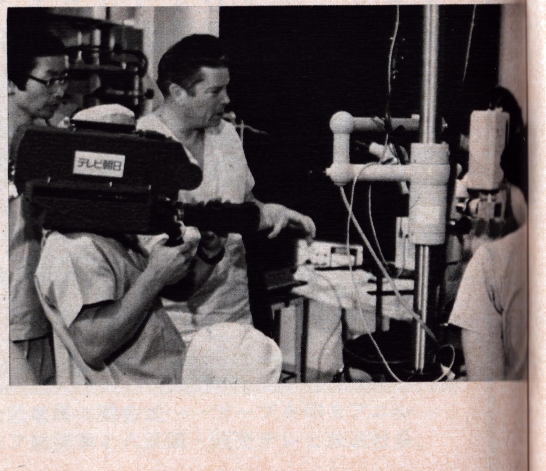
「目が見えるようになったのですが、テレビが見えるかどうか心配なのです」

私は早野教授を呼んで、テレビが近くにないかとたずねた。私たちは3人で隣の部屋へ行き、教授がテレビのスイッチを入れた。

「見えます。見えます」と、樹下さんはうれしそうに叫んだ。

「ソ連製の水晶体が入っているんですよ。どんな感じですか？」

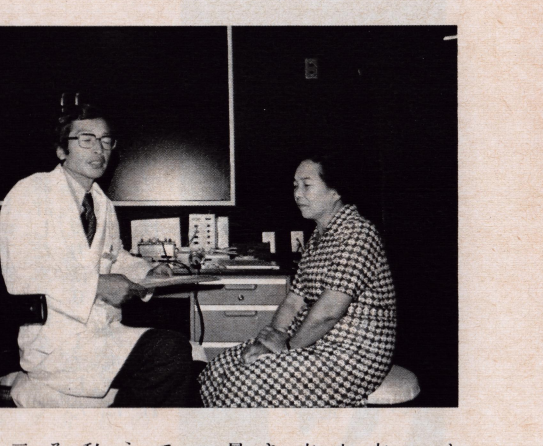
「理論的なことは知りませんが、よく見えます。生まれ変わったようです。



三宅博士（左端）の病院での手術の模様はテレビ朝日で紹介された（6月）

まだすべての人がこのような治療を受けられるわけではないので、親戚や近所の人は私は運が良かったと考えています。私はこのような手術に同意したことを喜んでいます。フョードロフ教授は非常に優秀な専門家だと思います。教授は善良な人で、応待でも飾らず、なんとなくすぐに引き付けられます。教授によろしくお伝えください」

客好きな主人――早野教授にあいさつして、私は病院を出た。名古屋へ行かなければならなかったからだ。岐阜から名古屋までは、車で40分かかる。座席に体を横たえて、しばし休息したかった。しかし運転手は非常に快活な人だったので、この時間ずっと、まるまる一冊の小説ができ上がるほど現地の事情について話してくれた。こうし



眼鏡をかけずに新聞を読めるまでに回復した水野さんと三宅博士

て話に気をとられていた私は、三宅謙作博士の病院に着いたのに気がつかなかった。

「フョードロフ教授と会われた印象はどうですか？」

「医学の文献で人工水晶体が問題になっている時、フョードロフという名前がかなりしばしば出ていました。彼が開発したレンズはフョードロフ教授が日本に滞在している時に見ましたが、それについては以前から知っていました。私は以前からソ連のこの医師の方法に関心を持っていましたが、まだそれを使う気にはなれませんでした。資料があまりにも少なかったからです」

「彼の水晶体をどのように評価されますか？」

「彼の指導のもとで手術すれば、その方法はかなり簡単だとわかりました。十分なトレーニングを積めば、手術は立派に、正確に、安全に行うことができます。簡単で速いことが彼の方法の最も重要な長所の一つです。水晶体についていえば、それは形状では個性的であり、機能では特徴的です。このような水晶体は将来性があると思います。私は一〇〇例以上の手術をしました。そのうちフョードロフ教授の方法では二例です。その結果は最も成功した例のうちに入ります。

しかし、一連の長所にもかかわらず、フョードロフ教授の方法への移行には困難があります。第一に、日本ではわずか10人たらずしかこのような手術を受けていないこと、第二に、人工水晶体の移植という方法そのものが――主にオランダ型による方法ですが――かなりゆっくりとしか導入されていないこと、第三に、われわれはまだ十分な経験を持っておらず、フョードロフ教授の方法をよく研究してないことです。さらに、彼の水晶体が日本にはありません。

フョードロフ教授の病院で日本の眼科医の研修を行ったらよいと思います」

三宅博士の患者の一人、豊川市の岩月政重さん（73歳）はインタビューに答えて次のように語った。

「手術中はソ連の外科医が立ち合うと聞いていました。新しい水晶体の性質と特徴を説明されました。フョードロフ教授は非常に有名な専門家で、たくさんの手術の成功例を持っていることを知っていました。失敗はありえないと思っていました。

手術後、テレビで手術の模様を見ていた隣近所の人たちがみんな私におめでとうを言い、あなたは幸せな人だと言ってくれました」

「あなたは、自分の視力をどうお考えですか？」

「私はよく見えます。以前は湯のみに自分でお茶を注ぐことができませんでした。ものが二重に見えて手もとが狂ったからです。いまは、平気で酒をさかずきに注いでいますよ。これは成功と言っていいのではないでしょうか？近くも遠くも同じようによく見えます。いまでも、フョードロフ教授にお礼を言わなかったのが、なんだか心残りです。大いに感謝したいと思ったのですが、ロシア語が話せなかったもので。私の熱い握手が気持ちを伝えてくれたと思っています。フョードロフ教授によろしくお伝え下さい」



フョードロフ教授に十分お礼を言えなかったのが心残りだという岩月さん

もう一人の患者、愛知県西春町の水野以止子さん（63歳）は次のように話している。

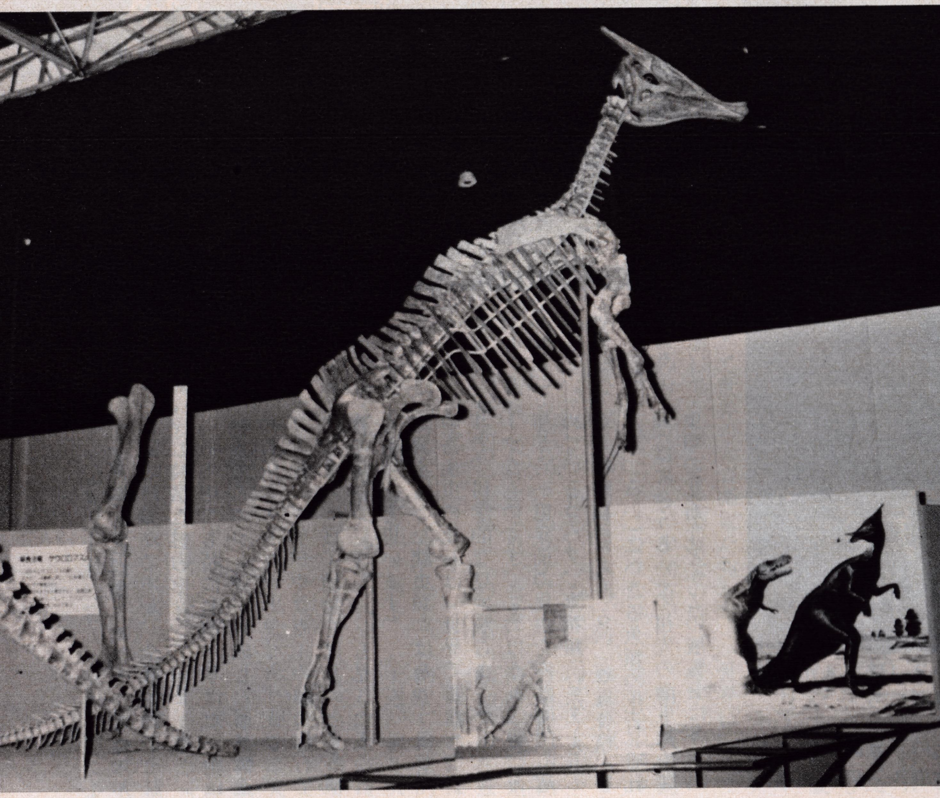
「数年前から目の調子が急に悪くなり始めました。普通の治療では役に立ちませんでした。しだいに見えなくなりました。時計が見えず、歩くのもおぼつかなく、新聞も読めませんでした。6月に医師に相談したところ、当時名古屋におられたフョードロフ教授に診ていただくようすすめられました。もちろん、手術の前はいささか不安でした。しかし眼帯がとれたとき、私の喜びは限りないものでした。フョードロフ教授の水晶体による視力は現在0・9です。眼鏡をかけなくても新聞を読むことができます。私は率直で愛想のよい、このソ連のお医者さんに感謝しています」

このように結果は上々である。イスクラ産業がその拡大に努力しているソ日協力は実際の成果をもたらし、患者を重い疾患から救っているのである。

化石で見る太古の地球

"失われた生物――大恐竜展" 開く

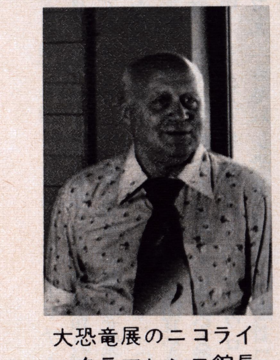
A・ゾーリン



恐竜時代の終わり（八〇〇〇万年前から六五〇〇万年前）に生息していた最大級の草食恐竜サウロロフス（体高6・5m）

7月19日、大阪の万国博記念公園エキスポランドでソ連科学アカデミー・古生物コレクションの展覧会"失われた生物たち――大恐竜展"の開会式が行われ、読売テレビ放送の八反田角一郎社長とS・アニシモフ駐大阪ソ連総領事がテープカットを行った。この大恐竜展は読売新聞大阪本社、読売テレビ放送、日本対外文化協会の主催で7月20日から8月31日までエキスポランドで開催されたあと、9月23日から11月26日まで名古屋市で、また来年の1月から北九州市で開催される。

この展覧会は入場者に強烈な印象を与えている。会場に入ると、さながら地球の太古の世界に身を置くことができるからだ。二三億年前のラン藻類の生命活動の痕跡から人類の祖先と同時代に生きた赤ちゃんマンモスのレプリカ（押し型）にいたる展示物を見ながら、われわれは地上で起こった進化の過程のいわば目撃者、参加者になれるのである。



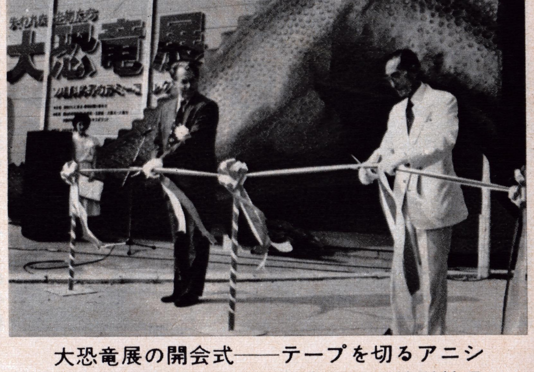
大恐竜展のニコライ・クラマレンコ館長

大恐竜展のニコライ・クラマレンコ館長（57歳、一九六六年から一九七五年までソ連科学アカデミー古生物学研究所所長を務めた）は次のように語った。

「科学的な展覧会をはじめとしていろいろな展覧会の交流は、ソ日両国間の相互理解や善隣関係の強化を促す上で重要な役目を担っています。その意味で日本の多くの団体のご協力を得て日本で開かれているこの大恐竜展は、大きな成果をあげることでしょう。今回大阪では、読売テレビ放送、読売新聞大阪本社、日本対外文化協会その他の団体のご協力を得ました」

大恐竜展について詳しく。

「一五〇〇平方mの展示会場に14点の恐竜の骨格をはじめ二五〇点余りの化



大恐竜展の開会式――テープを切るアニシモフ総領事と八反田・読売テレビ放送社長。

石類が展示されています。大阪の新聞は、この展覧会が大きな博物館なみの水準だと書いています。展示物の数ではなく、内容の点から言えば、その通りです。展示物の多くは、世界でも唯一のもので、今回日本で展示するまでは国外に持ち出したことがないものがほとんどです。展示物の中には、それらの植物、昆虫、魚類、動物が化石で初めて発見されたときのもの——いわゆる〝標準〟的な化石がたくさんあります。大半の展示物が複製ではなく現物です。古生物の復元図も大恐竜展の特徴です。専門家が指摘するとおり、科学的水準の高さがこの展覧会の特色ですが、展覧会が専門家ばかりでなく、広く一般観衆を対象にしている点を強調したいと思います」

日本の参観者に一番関心のもたれている展示物は？

「全部門にソ連古生物学の誇る標本があるのは確かですが、全展示物がそれぞれ特徴と魅力をもっています。

その中でも特に名前を挙げたいのは、世界最古のラン藻が形成した層状構造の石灰岩ストロマトライト、先カンブリア紀のクラゲやゴカイの類の化石です。また、被子植物をはじめとする植物の化石コレクションも見ごたえのあるものだと思います。

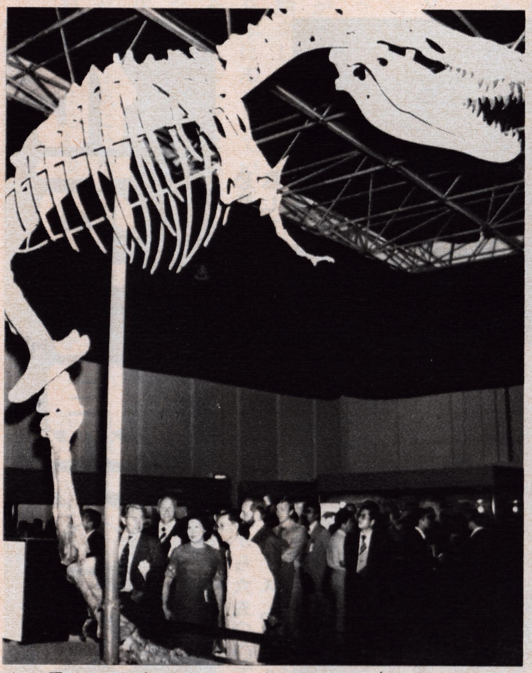
翼をもった爬虫類（はちゅうるい）の寄生虫の化石は、世界でこれ一つきりで、科学的な見地からまったくユニークなものです。このほか五〇〇〇万年から一億年前の昆虫を内部に閉じ込めているコハク、無顎類（むがくるい）から総鰭類（そうきるい）や真骨類（しんこつるい）にいたる魚類の化石、哺乳類（ほにゅうるい）の祖先の両生類や爬虫類の化石などがこの展覧会に多数出品されています。おそらく、爬虫類の化石のコレクションは世界で最も充実したものでしょう」

大きさ、強さという点では肉食や草食の恐竜の骨格が人目を引いている。中でも人気を集めているのがサウロロフス（カモハシ恐竜、体高6.5m）。この恐竜は大恐竜展の独特のシンボルとなり、広告のビラやパンフレットの表紙にその復元図が描かれている。

展覧会のしんがりは哺乳類。最古の哺乳動物やヤマアラシの類にはじまり、象やマンモスが展示されている。

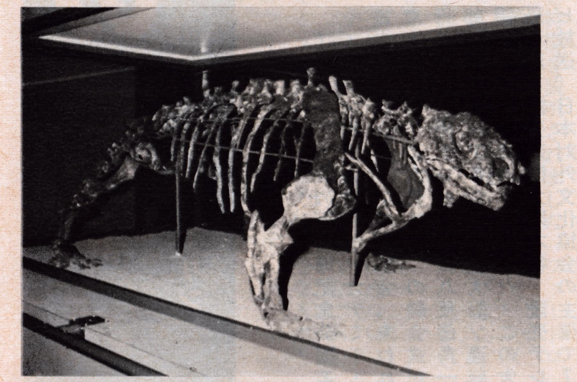
バラエティーに富む展示物の全部についてここで説明することはもちろんできないが、本誌の読者で機会のある方にはぜひ大恐竜展をご覧になっていただきたい。百聞は一見にしかず。太古の地球への旅をおすすめする。

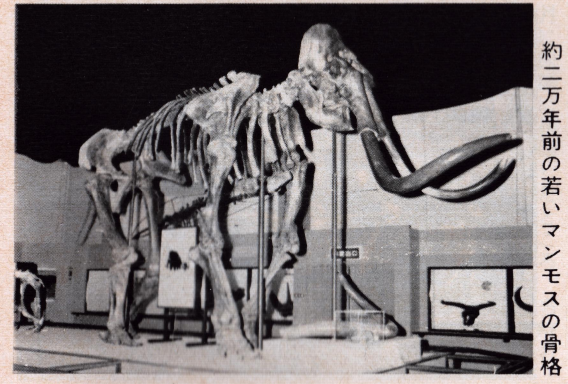
（写真＝読売テレビ放送提供）



地上最大の肉食恐竜タルボサウルス（体高４ｍ、体長12ｍ）の骨格を見る最初の観覧者たち

2億3000万年くらい前のペルム紀の草食爬虫類パレイアサウルスの骨格。パレイアサウルスの化石は、南アフリカをはじめソ連で発見されている。







昨年の6月マガダン州で発見された赤ちゃんマンモスの遺体のレプリカ（押し型）

約二万年前の若いマンモスの骨格

第6回チャイコフスキー・コンクールをふり返って

——審査員は語る

カメラ　O・マカロフ

一九七八年の6月9日から7月7日まで、世界の音楽ファンの注意は第6回P・I・チャイコフスキー記念国際音楽コンクールに向けられた。このコンクールのために、世界37カ国から二八〇人の若手音楽家がモスクワに集まり、自慢の技を披露した。もちろんその中には、日本の音楽家たちの姿も見られた。

チャイコフスキー・コンクールは、世界でもっとも権威ある、もっともむずかしいコンクールの一つとしての定評をかちとっている。このような定評は、何よりもまず、コンクールの20年の歴史にわたって世界の大音楽家たちが参加してきた、審査委員会の権威のおかげである。参加者が三段階にわたってこなさなければならないプログラムも、ひじょうにむずかしい。当然のことながら、このコンクールで入賞したり賞を取った者には、世界の一流舞台への道が開かれる。

今回のコンクールがどのような新しい面を開き、どのような新人を発掘したかについて、審査員たちに語ってもらおう。

チェロ部門

スルハン・ツィンツァーゼ（トビリシ音楽院院長）——今回のコンクールの規模は驚くばかりです。50人以上もの若い、ときには幼いとさえ言えるチェロ奏者が、腕だめしにモスクワへ集まったのです。何よりもまず注目すべきは、参加者の演奏水準が大いに高まったことです。最初の何人かの演奏を聴いただけで、審査員一同は、この楽器にたいする関心が世界的に、測り知れないほど高まったということを納得しました。このチャイコフスキー・コンクールもそれに一役買っていることは疑いありません。ここの入賞者たちが、もっとも代表的でもっとも権威がある、もっともむずかしいコンクールとして、このコンクールの名声を世界に広めてくれているからです。

第1次予選から、米国のナサニエル・ローゼン、日本の藤原真理、チェコスロバキアのダニエル・ベイスが、その音楽性と円熟した輝き、演奏曲の本質に迫る深い理解で、私たちの注意を引きました。

藤原さんは円熟した、間接的な、情緒的な演奏で第1次予選、第2次予選を勝ち進みましたが、たんに演奏しているというのではなく、音楽と一体になっています。これはひじょうに大切なことです。

こうして彼女は第3段階までトップで進み、決勝ではドボルザークの『チェロ協奏曲』をみごとに演奏しましたが、チャイコフスキーの『ロココ風の主題による変奏曲』の解釈では、多くの点で不成功でした。これにたいしてナサニエル・ローゼンは、チャイコフスキーのこの作品を、まるで一つのすばらしいメロディのように演奏しました。こうして私たちは、彼に金メダルと1位を与えたのです。藤原さんとダニエル・ベイスは2位で、銀メダルでした。

ダニール・シャフラン（チェロ部門審査委員長、ソ連邦人民芸術家）——藤原真理さんの才能は疑いありません。演奏家としての大きな将来が期待できます。

バイオリン部門

ボリス・グトニコフ（レニングラード音楽院教授）——私がチャイコフスキー・コンクールの審査員をつとめるのはこれが2度目ですが、前回と比較すると、前回の一九七四年にも私たちはまったく興味深い新人たちを発掘したのに、今回の参加者はさらに粒よりだということを認めないわけにはいきません。加えて、演奏の民族的流派も多彩になりました。私たちは、ひじょうに鮮やかな個性に出会いました。

参加者の演奏を聴きながら、審査員たちは同じ考え——アメリカとソ連が二つの主要な流派になっているという考えを抱きました。1位の金メダルはソ連のイリヤ・グルベルトとアメリカのエルマー・オリビエイラが分け合いました。しかしこれは、他の国にすぐれた奏者がいなかったということではありません。たとえば、ルーマニアのミハエラ・マルチンは、2位に入りました。また日本の清水高師さんの演奏は聴衆や審査員を満足させ、5位に入賞しましたが、これは今回のように盛大でむずかしいコンクールでは、きわめて名誉なことです。

ピアノ部門

レフ・ブラセンコ（モスクワ音楽院教授）——ピアノ部門は、鮮やかな演奏個性の競い合いでした。また、一次予選の参加者が73人という盛況ぶりで、このような大勢の参加者は、チャイコフスキー・コンクールのような大規模なコンクールにあっても、記録的でした。

1位の金メダルを獲得したのは、ソ連のミハイル・プレトニョフですが、これほど才能にめぐまれた人もめずらしいでしょう。この人は音楽の中にまったく思いがけない、感動的な表現を見出しています。このコンクールではまた、フランス勢も健闘しました。そのもっとも鮮明な代表ともいうべきパスカル・ドボワイヨンは、カナダのアンドレ・ラプラントとともに2位に入賞しました。特別賞を受けた



エルマー・オリヒエイラ（米国、ハイオリン部門１位）



リュトミラ・シェムチュク（ソ連、声楽部門１位）



ナサニエル・ローセン（米国、チェロ部門１位）



イリヤ・クルヘルト（ソ連、ハイオリン部門１位）



ミハイル・ブレトニョフ（ソ連、ピアノ部門１位）



第６回チャイコフスキー記念国際音楽コンクールが開かれたモスクワ音楽院の大ホール。

日本の村上弦一郎さんの高度な技術も指摘しておきたいと思います。

ユージン・リスト（ピアノ部門副審査委員長、ニューヨーク大学音楽教授）――チャイコフスキー・コンクールには毎回、さまざまな国の新しい才能が参加します。このコンクールは、文句なく、世界的な意義を持っています。ふん囲気そのものが快適です。世界中の音楽家がここへ集まって来て、ここで互いに知り合うからです。このコンクールの社会的な面について言えば、ここで私が目にした真に人間的で友好的なコミュニケーションは、平和と諸民族の相互理解のためにもこのようなコンクールが必要なことを物語っています。コンクールの審査員団にみなぎっていたようなハーモニーが世界中にあれば、私たちは相互の尊敬のふん囲気の中で協力できるし、世界にはいかなる困難もなくなるでしょう。

声楽部門

ガリーナ・コワリョワ（キーロフ記念レニングラード・オペラ・バレエ劇場ソリスト、ソ連邦人民芸術家）――私はこのコンクールの主要な特徴として、このコンクールが歌い手を全面的に、つまり、たんに歌手としてばかりでなく、アーチストとして評価することを指摘したいと思います。

女性の歌い手の中では、ソ連勢の優位が感じられました。1位を獲得したソ連のリュドミラ・シェムチュクはよく修業ができており、大きくて力強い声を持っています。彼女は3次の予選すべてで安定した歌いぶりを示し、決勝でもずば抜けた歌手、すばらしいアーチストであることを見せてくれました。彼女はボリショイ・オペラですでに歌っていますが、そのうちに新しい役を演じて観衆をよろこばせてくれるだろうと確信しています。2位のリュドミラ・ナムも多くの魅力を持っています。その声の豊かな音色、すばらしい舞台マナーは、この高い賞にふさわしいものです。

男性では、1位の該当者はいませんでした。2位は、ソ連のニキータ・ストロジェフとワレンチン・ピボワロフが分け合いました。ともに美しい声の持ち主です。

日本の参加者は、いい成績をあげることができませんでした。とはいえ、このコンクールは、彼らのよい勉強の場になったことでしょう。審査委員たちは彼らとよく話し合って、具体的な助言をしたり、成長を励ましたりしました。


バイオリン部門の審査員たち。中央が部門審査委員長レオニード・コーガン。


ピアノ部門で特別賞を受けた村上弦一郎さん


バイオリン部門で5位に入賞の清水高師さん


モスクワ音楽院のチャイコフスキー像まえて記念撮影するコンクール参加者たち


声楽部門の審査員、小野光子さん。


チェロ部門で2位に入賞した藤原真理さん



ソ連の視点

ウィーン交渉打開の道——社会主義諸国の新提案

歴史学博士 ワシリー・クリシ

ウィーンの中欧兵力・軍備相互削減交渉が始まってからもう5年になる。疑いもなく、欧州での軍事衝突の防止は、核時代のいま、欧州の人々だけでなく、世界のすべての人々が、首尾よい解決を願っている問題である。しかしすでに二〇〇回近く全体会議が開かれているにもかかわらず、〝ウィーン・マラソン〟は実際の成果をあげていないといい切れよう。

ソ連の有名な学者ワシリー・クリシ歴史学博士は、ウィーン交渉をめぐる情勢を次のように分析している。

交渉は続けられ、外交官たちは努力を払っているが、欧州の軍事的対立の現実は、あいかわらず人類を不安に陥れている。このところ、社会主義諸国は交渉打開に全力をつくしているが、事態はいぜんのままだ。では社会主義諸国の努力とはどのようなものか？

新しい提案

社会主義諸国は、東西交渉の結末は軍事的緊張の緩和をはかる実際措置の達成という、交渉本来の目的にふさわしいものでなければならないことを理解するとともに、他国の利益と希望に注意深く対処している。たとえば、一九七五—七六年の相互提案審議の第2段階ですでに、社会主義諸国は合理的妥協の用意のあることを表明した。しかし西側は、同じような態度を示さなかった。当時、交渉が前向きに急転しなかったのは、他ならぬそのためであり、こんにちの第3段階の交渉が必要となったのもそのためである。

さる4月19日、西側諸国は3度目の提案を出した。この提案の長所は、西側が社会主義諸国の立場をある程度考慮する態度を示したことだ。一方欠点は、双方の兵力・軍備の不平等削減という原則を棄てようとしていないことである。なるほどいままでは西側は、ソ連の戦車軍の兵力削減に固執してはいないが、ソ連の5個戦車師団の中欧からの撤去という非現実的な提案（西側のみの利益を考慮し、西側に疑いのない優位を確保するものだから）にいぜん固執している。このような要求が、まともな均衡のとれた協定の土台になりえないのは当然である。

さる6月8日、ソ連、ドイツ民主共和国、ポーランド人民共和国、チェコスロバキア社会主義共和国も三度目の提案を出した。

この提案の眼目は、中欧におけるNATO（北大西洋条約機構）とワルシャワ条約機構の兵力数をそれぞれどちらも平等に九〇万人（うち七〇万が地上兵力）とすることに、東側が同意していることだ。社会主義諸国は、兵力の縮小を地上部隊だけに制限し、兵器装備、まず第1に交渉の西側参加国が指定した型の兵器装備の選択的縮小と制限を実施する用意のあることを表明した。社会主義諸国は、ソ連と米国が第1段階で、その地上部隊を同率、つまり均衡をとりながら、その数を縮小するよう提案した。そのさいソ連は、縮小の対象地域から、戦車約一〇〇〇台を含むソ連の3個師団を1年以内に撤退させる用意のあることを表明した。社会主義諸国はまた、兵力と軍備の縮小には、米国とソ連だけでなく、交渉の直接参加国すべてが参加し、これらの国の兵力と軍備の縮小は、その国の軍事力に応じて行うよう提案している。

新しい展望

兵力、まず第1に両軍事・政治同盟の地上部隊の兵力を、同数に減らす問題を出すということ自体、正当なことだろうか？ それは無条件に正しい。交渉の場で公式に発表された資料によると、一九七六年の中欧の兵力数（海軍を除く）は、西側が九八万一〇〇〇人（うち地上兵力七九万一〇〇〇人）、社会主義諸国のそれが九八万七三〇〇人（うち地上兵力八〇万五〇〇〇人）であった。双方が、中欧の兵力総数をそれぞれ九〇万人に、また地上部隊の兵力を七〇万人に削減すれば、兵力を同数に縮小するという問題は姿を消し、また削減で相手よりも軍事的優位に立とうとか、優位をたもとうということもなくなる。

さきにあげたとおり、社会主義諸国が、地上部隊を主体にした兵力の削減を実施し、また西側諸国自体が指定した型の兵器装備の選択的縮小と制限を実施する用意を示したことも、欧州での対立のレベルを下げるのに大きく役立つ。社会主義諸国のこのような態度は、ワルシャワ条約機構とNATOの兵力の間のかなり大きな構造上の開きを幾分でも均等にするし、相互が非難し合う原因を取り除く見通しを開くものである。

ソ連と米国が第1段階で兵力の同率縮小を行う（以前に提案されたような同数の縮小ではない）という提案も、注目に値しよう。こうすれば、米国その他の西側諸国の希望をさらに十分に考慮し、この地域の力関係を破壊することなく、軍事的対立を弱めることができよう（双方の評価によると、この力関係はほぼつり合っている）。交渉の直接参加国すべてが、兵力と兵器装備の削減に参加するという社会主義諸国の提案が採択されれば、各国兵力の均衡状態は維持され、同時にNATOとワルシャワ条約機構の全般的均衡も破壊されずにすむだろう。

社会主義諸国が提案している兵力と兵器装備の削減が実現すれば、欧州安全保障は著しく強まるだろう。またこのような削減が実現すれば、それは、全欧会議の全参加国による核兵器の先制不使用の義務の受諾、現存の軍事・政治同盟への新しい国の加入を認めている北大西洋条約、ワルシャワ条約の関係条項の効力の停止、国際関係での武力不行使世界条約の締結とならんで、緊張緩和を実際に進展、強化させよう。

さて西側には、欧州ならびに世界の他の地域での軍事衝突と戦争を防ぐ保証づくりに実際に着手する用意がほんとうにあるのだろうか？

モスクワ放送〝宇宙クイズ〟優勝者に賞品

8月8日、モスクワ放送〝宇宙クイズ〟優勝者（14号で既報）の賞品授与式が東京のソ連大使館で行われた。

このクイズで優勝したのは、京都・同志社大学の学生、吉田 尚さん。当日は、ジノビエフ・駐日ソ連臨時代理大使から吉田さんに96日間宇宙飛行をしたモスクワ放送のペナントが贈られた。このペナントにはサリュート6号の飛行に参加した6人の宇宙飛行士のサインがある。

本誌の定期読者でもある吉田さんは次のように語った。

「私は、ソ連について以前から非常に関心をもっていて、モスクワ放送の日本語放送を聴いたり、『今日のソ連邦』を読んでいます。だからソ連の人々が幸福に暮らしていることがよく分かるし、ソ連が国際舞台で平和を目差していることもよく理解できます。

今度のクイズに応募したのも、私が前から宇宙開発に興味をもっていたからです。私が優勝するとは思ってもいませんでした。宇宙飛行をしたペナントをいただいて、サリュート6号の飛行が、私にとっても非常に記念すべきものとなりました。

ソ連が着実に人類のために宇宙開発を続けていることは、非常に有益なことだと思います。モスクワ放送などで、宇宙開発が地下資源の開発や気象観測に役立っていることを知りました。また通信衛星で日ソ間のテレビの生中継が行われています。人類に宇宙開発がもたらす利益は非常に大きいと思います」



ジノビエフ臨時代理大使から賞品を受け取る吉田さん。左は篠原・日ソ友の会（モスクワ放送リスナーズクラブ）会長



アントニナ・カリーニナ班長の指揮のもと、きょうもサヤン・シューシェンスコエ水力発電所の建設現場では発破の音がとどろく。



発破の班長は紅一点

ジャン・カーツェル　カメラ M・アリペルト

サヤン（東シベリア）の山あいでは、毎日のように発破の音がとどろきわたっている。大河エニセイの両岸の岩壁を利用して、世界最大のサヤン・シューシェンスコエ水力発電所のダムが建設されているが、このためには岩壁を崩し、〝余分なもの〟を取り払い、磨きをかけねばならない。この仕事にたずさわっている発破作業班員一六〇人のうち一五九人が男、1人が女性である。その女性が専門家から発破の名人と呼ばれている班長のアントニナ・カリーニナだ。

一九六三年にカリーニナは、クラスノヤルスク水力発電所の建設場で、精確無比の作業をやってのけ、人工の川床の水路を開いた。世界のほとんど全部のテレビに放映されたクラスノヤルスク水力発電所のあの有名な発破のときの3倍の威力（爆発物の重さ22・5t）の発破を目にした時、私は狙撃手を思わせるカリーニナの計算の正確さをしかと確認できた。巨大な〝きのこ〟が川の上にまいあがり、あとには計画どおりの〝穴〟が残った。やがてここに、この水



力発電所の二四二mのダムの〝どてっ腹〟がはめこまれるのだ。

……カリーニナが、発破作業の専門家を養成する中等職業学校を卒業したとき、友だちから「発破の現場作業を選ぶなんて、あんた気でも狂ったんじゃない。いますぐ頭を冷やして、もっと楽な仕事を見つけなよ」と言われたものだ。しかしアントニナは、楽な仕事をしたいとは思わなかった。就職先の割り当てのとき（当時住まいはモスクワ近郊だった）、女ではあるし、気候の良い所へというので、カフカズかモスクワ近くはどうかとすすめられたが、彼女はわざと苦労の多いシベリアを選んだ。カリーニナはシベリアにきてオビ川のノボシビルスク、エニセイ川のクラスノヤルスク両水力発電所の建設に参加した。そして現在は3番目のサヤン・シューシェンスコエ水力発電所を建設している。

このサヤンで、カリーニナは〝建設〟のための発破に加えて〝大理石採取〟のための発破作業もやっている。水力発電所の並びに大理石の最大級の鉱床があるからだ。大理石を採取するには細心の注意を払って表層だけを剥離し、肝心の鉱床を〝刺激〟しないようにしなければならない。

建設局長で、彼女の直接の上司であるニコライ・モルグーノフは、カリーニナのことをこう話す——「15年間、あの人といっしょに仕事をしている。あとにひかない気質で、自分の意見はあくまでも曲げない。だからいっしょに仕事をすると衝突することもあるが、といってあの人がいなければ困る。しっかりした人間で、から騒ぎがきらいだ」

アントニナ・カリーニナの家を訪ねて、私はこの話の通りであることをあらためて確認した。彼女がしっかりものであることがすべてにうかが



家族そろってエニセイ川のほとりを散歩

発破の班長は紅一点

えた——自分の子供（2人の息子があって、いずれも小学生）から聞かれたことにたいする彼女の答え方にも、食事の支度の仕方（われわれにボルシチとシベリアぎょうざをご馳走してくれた）にも、また助言を求めて彼女の家におしかけて来る仲間にたいする親切な物腰にも、それがうかがえた。

彼女の夫で機械技師のビタリーの奥さん評——「アントニナの仕事がとくに緊張と精神力の集中を必要としていることはもちろんですが、発破のことだけを心にかけていると思ったらまちがいです。彼女はりっぱな主婦でもあり、家のまわりの庭や畑は彼女が思い立ってつくったものです。いまここにシベリアりんごを植えようと思っています。われわれはカメラにこったが、それも彼女がまず始めたことだし、旅行を計画したのも彼女です。彼女は歌もうまく、いつもアマチュア・コンサートに出ています。それになかなか面倒見のよい母親ですよ」

——じゃ、どちらが家庭のあるじなんですか？

「二人ともあるじで、同権のデュエットというところです。とくにいまはそうです。私がビタリーにとついだとき、ビタリーは運転手をしていて、中等職業学校に入ったばかりでした。そんなわけで、私はビタリーの数学の勉強を手伝ってやり、かれは家計を助けてくれました。いま仕事、教育、家事では完全に〝釣合い〟がとれています。家には2人の技師と2人の主婦がいるってことです」

——カリーニナさん、あなたを手本にしている女性がいますか？

「いるにはいますが少数です。しかし肝心なのは、そうした人の数ではなくて、自分の希望と好みにしたがって職業を選べることだと思います。たとえば私の場合、もっと上のポストを提供されたこともありましたが、ことわりました。そのポストだと、出張が余りにも多くなり、子供の養育に支障をきたすからです」

——建設場が変わるたびに移転し、住みなれた土地や家を棄て、そのたびに一からやり直すのは、もうんざりじゃありませんか？

「いいえ、私にはそれが当然のことだし、興味のあることでもあるのです」

▶アントニナ・カリーニナの一家が住む建設者の町チェリョームシキ



発破作業についての真剣な打ち合わせ…

イデオロギー問題

社会主義と自由

——『若きコムニスト』誌の座談会から

社会主義社会における人間の権利と自由をテーマとした座談会が雑誌『若きコムニスト』の主催で開かれた。出席者は哲学博士S・コワリョフ教授、G・マリツェフ法律学博士候補、D・ケリモフ・ソ連科学アカデミー準会員の3氏で、以下は座談会における発言の要旨。

コワリョフ　まずあげておきたいのは、フランスの優れた空想的社会主義者フーリエが、はやくも前世紀初めに、社会的平等について語っていることです。まずかれは、貧乏人、プロレタリアにとって、いつも困窮し、毎日、自分の手を、自分の労働を主人に売らねばならない人間にとって、自由とはいったい何なのだろうか、とたずね、それに答えてこう言っています——貧乏人にあらゆる政治的自由を与え、発言権、選挙権、被選挙権を与えてみても、事態はいっこうに変わらないし、少しも自由にはなれない、と。こんなことをしても、やはり貧乏人はパンをかせぐために、自分の主人を探さねばならないのです。基本的生産手段が個人の手に握られている以上、どんな真の権利、人民のどんな現実的自由もとうてい考えられません。

社会的平等が前提

マリツェフ　西側の一部の著述家たちは、マルクス・レーニン主義から見た人権とは非常に独得なものだから、そのような人権の概念と、西側の文化のわく内でつくられた伝統的な人権の概念の間に共通項を探してみても無駄だと主張しているが、これは正しくありません。

人権の伝統的概念といえば、この概念を貫く多くの進歩的思想——個人的自由の尊重、社会的平等その他——は、社会主義社会の実際の生活のなかにしっかりとけ込んでいます。しかし社会主義は全人類の理想を実現するという点では、他の社会体制よりも多くの点で進んでいます。社会主義は、狭い階層の自由と平等から、性、民族、人種、社会的出身、教育、宗教などのいかんを問わぬ市民の普遍的平等へと大きく飛躍しました。

ケリモフ　もちろん社会主義の条件のもとでも、ある人がほかの人よりもより多くのものを社会から受け取ることはあり得ます。能力と天分の当然の違いとか、分業や職務の違いで、社会主義社会の成員のすべてが同等に社会の動きとか、国政や社会の運営に影響を及ぼし得るとはかぎりません。

社会主義のもとでも、たとえば個人所得の水準に差異があります。しかしこの場合でも、格差は大きくはありません。所得の低水準と高水準のひどい開きは認めない、というのが、労働量と消費量にたいする社会的、国家的管理体制の主要目的の一つなのです。

社会主義の大きな特徴を見失わないことが重要です。つまり社会主義のもとでは、人より収入が多いとか、あるいは人より社会的地位が高いからということで、自分のふところをこやしたり、自分の威信を高めるために他人の労働を利用することは実際上出来ないようになっています。このようなことは生産手段にたいする社会の全成員の平等な関係が確立されて初めて可能であり、これこそ、多くの世代の人々が夢見てきた実際の社会的平等の前提です。

マリツェフ　ある人が、他人あるいは社会全体を犠牲にして自分の幸福を築くことが許されるかどうか、という根本問題にたいする答えの違いが、人権の社会主義的解釈と資本主義的解釈の違いです。社会主義の答えは「ノー」です。社会主義は、他人を搾取し、他人の利益を圧迫する〝自由〟を阻止します。

権利の保障と人権

ケリモフ　ここで指摘しておきたいのは、社会主義が物質的幸福にたいする人間の権利を少しも否定していないことです。しかしその権利は、その人の社会的労働への参加、社会的富へのその人の個人的貢献、という尺度で評価されます。

マリツェフ　社会主義社会では、社会的・経済的権利と呼ばれている諸権利が主導的意義をもっています。これは、労働、教育、社会保障、無料の医療、休息などの権利です。ソ連の新憲法では、これらの権利の法的保障が大幅に拡大され、ソビエト市民の政治的権利と個人の自由が、これまでよりもはるかに完全なものになっています。

社会的・経済的権利の保障は、人権という概念の発展にたいする社会主義の最も重要な寄与でした。

ケリモフ　社会主義国家は、他のそれぞれの国家と同じように、市民にたいして、許可、禁止、奨励、処罰、要求、命令、強制などをする権力を与えられています。この国家がほかならぬ勤労者の権力であるとしても、各個人あるいは少数者が、全人民の利益を代表する国家の要求に従わねばならないのはもちろんです。

市民としての義務

社会主義の条件のもとでも、社会と個人との間に一定の矛盾が生ずる可能性はあります。これらの矛盾が、個人あるいは少数市民の利己的気分から出たものであるときや、社会主義の社会秩序と法律にたいする故意の侵害である場合には、社会主義国家はこれらの市民にたいして、個々の矛盾の解決方法として強制手段を用います。

新ソ連憲法では、ソビエト市民の基本的義務が次のように列挙されています——まじめに良心的に働くこと、祖国を防衛すること、ソビエト国家の利益を擁護すること、公共の秩序の維持に協力すること、自然を大切にし、その富をまもること、文化財の保存について配慮すること……

マリツェフ　社会から取るが、社会へは何も与えなくてよいとか、ある一個人に好都合で有利なことはなんでもやれるとかいうことを、民主主義や自由だとする一方的な考えに、社会主義社会は我慢できません。何人も、社会にたいする自分の本分と義務を無視することはできません。

＊トピックス

バミューダ海域でのソ米共同観測

バハマ諸島、バミューダ諸島、フロリダ半島を結ぶいわゆるバミューダ三角地帯で1977年6月以来実施中のソ米共同観測が最終段階を迎えた。主な観測対象は1970年にソ連科学アカデミーのシルショフ海洋学研究所のスタッフが発見した海水の巨大なうず。直径200kmに及ぶこれらのうずは、大気中の低気圧や高気圧に似た構造を持っていて、1500m以上の深さまで海水を巻き込み、その形を変えながら1昼夜に約10kmの速度で移動していく。大量の温水や冷水が動くので、これらのうずは気象に大きく影響するし、その中心部ではプランクトンの多い深層の冷水が表層に持ち上げられ、海洋の生物生産量にも影響する。

ソ連側からはアカデミク・クルチャートフ号ほか10隻の調査船が観測に参加し、多くの興味深い現象を研究した。もっとも、これらのうずは船舶の航行にとってなんら危険なものではなく、バミューダ三角地帯をめぐるセンセーショナルな俗説はまったく根拠のないもので、この水域での海難事故も他の水域より多いわけではないというのが、ソ連の学者の結論。

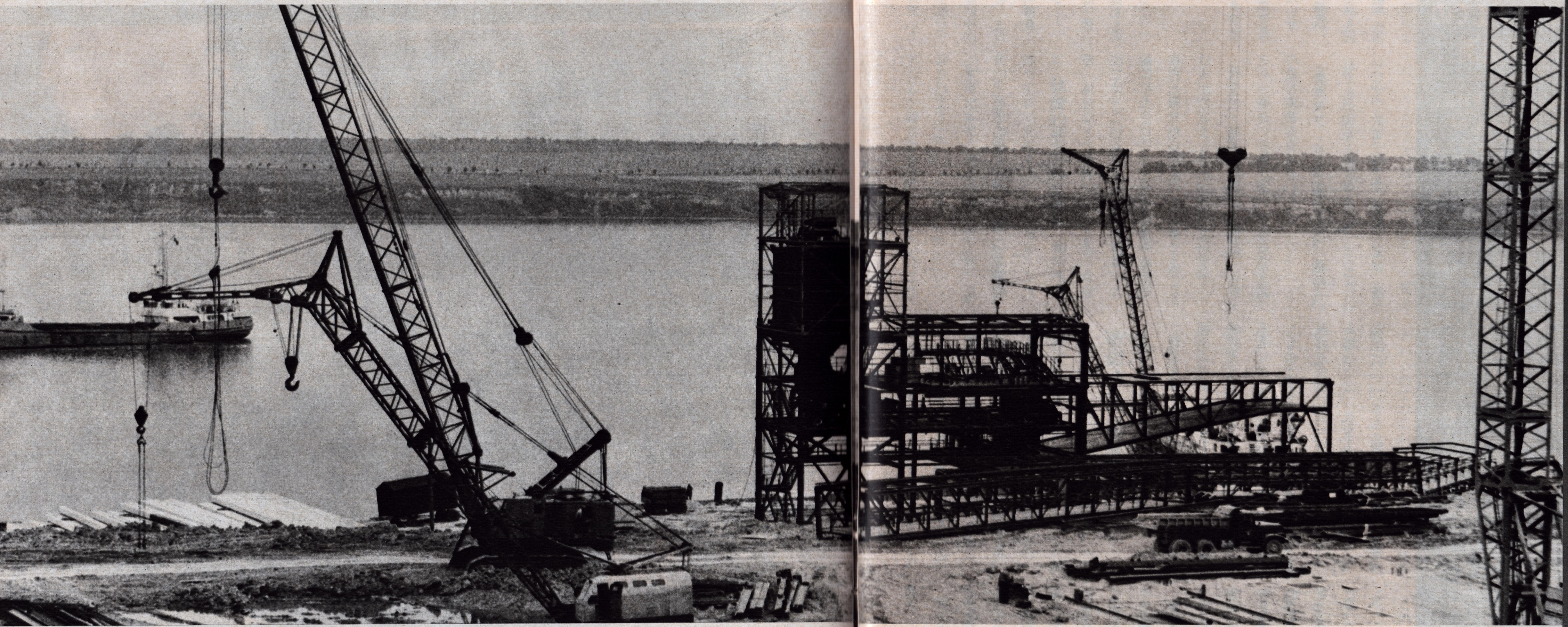
オデッサ近郊

グリゴリエフカ新港工事を見る

ヨシフ・ピカレビチ
カメラ V・シュストフ



建設作業の采配ぶりがよいという評判の米国オキシデンタル石油のロスチ・バートン主任技師（右）



▼3kmも水域の広がったグリゴリエフカ港

オデッサとウクライナ南部を長年結んできた道路が、いまその役目を終えようとしている。ところはオデッサから30km、片方が黒海に、もう一方がアジャルイクスキー入江にはさまれた地峡である。この一帯に建設中のグリゴリエフカ新港工業地帯の建設現場を見るため、私はこの地峡にやってきた。

地峡の道路を封鎖した交通整理係が小旗を一振りするといままでの車の流れは変わり、その流れは、のろのろと入江をう回する新しい道路に向かう。ちょうどその時、しゅんせつ船が近づいてきてバケットをさっきの地峡の土にもぐり込ませると、その地面は溶けるように沈みはじめ、割れて海水が入りこむ。

「いま、あのしゅんせつ船が入江の岸に建設中の新港に通ずる船の通路をつくっているんです」と連れの黒海海路管理局のバグラト・ザハリャン局長が説明する。アジャルイクスキー入江の岸にその新しい港は建設されているのだ。

オデッサ港とイリイチョフスク港というわが国南部の二大港がそばにありながら、なぜもう一つの港が必要になったのか?

一九七四年6月28日、ソ連外国貿易省は、米国のオキシデンタル石油会社と長期契約を結んだ。これは、最も大型の国際契約の一つであり、この契約によってソ連の貿易公団は、米国にアンモニア、尿素、塩素カリを輸出し、その見返りとして過リン酸と技術設備を輸入する。オキシデンタル石油のアーマンド・ハマー会長が当時の記者会見で語ったように、契約は二〇〇億ドルで、米国の参加をえてソ連に一連の工場や港湾施設を建設するというもの。この協定は、ソ米両国間の年間取引高一五億ドルにさらに一〇億ドルを上乗せする。

その船積み契約の相互取引を実施するために、オデッサ近郊に新しい工業・港湾総合施設の建設が決定された。ソ連の化学製品は、この港からも他の諸国に輸出されよう。

第一期工事は完成間近い。今年は、コンペンセーション協定に基づき、米国、フランス、西独の会社が参加して建設されてきた化学企業群全部と港湾施設、積み換え施設が操業を開始する年だ。

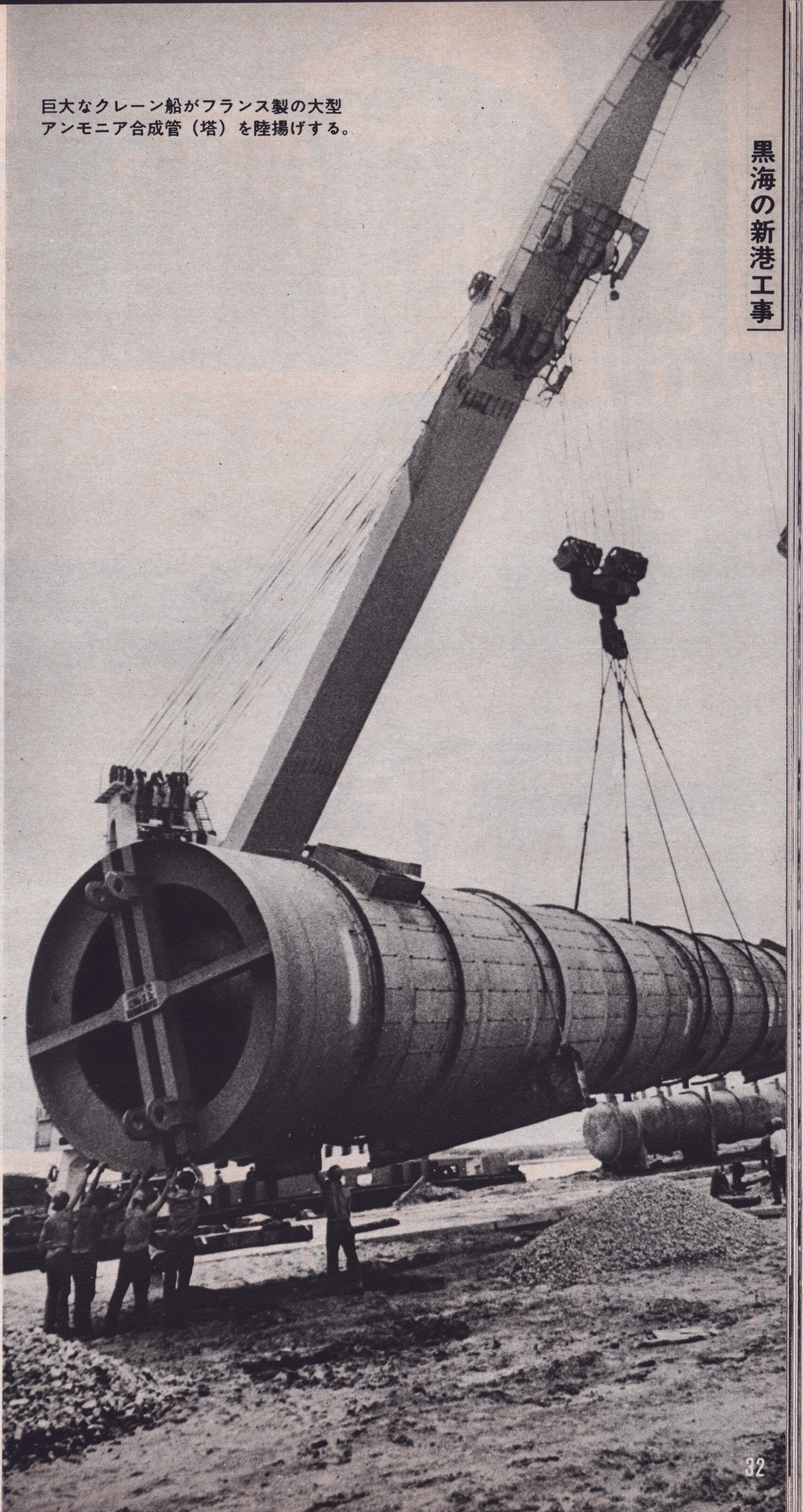
いまアジャルイクスキー入江の岸はまるで宇宙船の発射基地のようだ。高くそびえるアンモニア合成管（塔）は、発射準備を完了したロケットそっくり。この管はアンモニア生産工場全体の根幹で、この根幹によって40余りの装置類が稼動する。

2基の合成管（塔）がこのアンモニア工場にできる。その年間最高生産高は一〇〇万tの予定。契約出荷量は四〇〇万tで、あと三〇〇万tは、ボルガ沿岸の工場から新設のパイプラインで輸送される。このパイプラインの延長は二〇〇〇km以上。すでにパイプの敷設工事が開始された。

アンモニアは、新港の貯蔵タンクに送られ、ここから専用船に積み込まれる。アンモニアの積み換え施設はひじょうに複雑だ。アンモニアは低温液状で保管しなければならないし、漏れなどがあってはならないからだ。

これにおとらず複雑なのが、米国から運ばれてくる過リン酸のタンカーからの積み換えやタンクへの注入の技術である。この貨物は、プラス60度Cが必要である。過リン酸は、埠頭の新設鉄道の引き込み線から特別保温タンク車で需要先に運ばれる。

工業・港湾総合施設の中の大型施設の一つは、尿素の積み換え基地である。尿素は、たいへん濃い肥料で、46％の窒素を含んでいる。肥料として使用する前に粒状にする必要があるので、積み換え基地ですぐさま造粒される。さらに粒状尿素は自動装置で厳重に選別される。次の段階の尿素の計量と包装は、西独のポ



巨大なクレーン船がフランス製の大型アンモニア合成管（塔）を陸揚げする。

リグ・ヘッケル・ブレイハルト社製の完全自動機械で行われる。ブレイハルト社のハインツ・ベルトホルド重役は、同社創立以来一〇〇余年間に、これだけ大きな取り引きはやったことがなかったと語った。

尿素コンプレクスの中には、尿素包装用ポリエチレン袋の製造工場があるが、年間三〇〇〇万袋の生産が要求されている。尿素の入ったポリエチレン袋は、高いブリッジづたいにバースに運ばれ、西独向けの船に積まれる。

オデッサ近郊の黒海沿岸の巨大な建設場を見て、この非常に複雑で、多岐にわたっている生産施設が製品の生産と運搬の全過程で、まったく大気を汚染しないことが分かりはじめた。強力なガス・じんあい捕集装置が作動するし、排水と工業用水の微生物浄化施設が建設されているからだ。この建設に八〇〇万ルーブル余りが支出されている。

新しい工業・港湾総合施設は、まだどの地図にものっていないが、水路図には、もう新港のバースまでの水路が記載された。新港入口の岸には灯台も建てられた。

新港建設現場からの帰途、私は、けさ地峡が入江と黒海とを隔てていたところに立ち寄った。朝までは道があって、自動車が走っていた場所は、いまはただ波がざわめいているだけだった。新鮮な海水が入江の静かな水と交じり合っていた。まるで新しい水路を手探りするかのように、そこをゆっくりと建設資材を積んだ船が通過して行った。

未来の都市の劇場街

『今日のソ連邦』記者
マリーナ・ルイクリナ

未来の世代の人々が余暇を過ごす劇場や文化センターは、どんな建物になるだろうか？

この問題について記者がインタビューしたボリス・バルヒン（建築学教授）、ユーリー・バルヒン（建築学博士候補）父子は、ソ連の若い建築家たちが設計した未来のモスクワの劇場街の図面を出して次のように語った。

まずボリス・バルヒン教授――

「このモスクワの劇場街の図面を見ると、長さ1・5kmの道路網ぞいにボリショイ劇場、児童劇場、オペレッタ劇場（これらはいまのまま残る）など12の劇場がならんでいる。12の劇場は1本の通路で結ばれ、街路へ出なくても全部の出し物が見られる。劇場街の広場は祭日、フェスチ



フェスチバルやカーニバルの時は劇場街の上空に色とりどりの風船、空気入りの人形や蛇があげられ、下からライトが照らす。

バル、カーニバルなどに使われる。ここの野外の小舞台では歌手や音楽グループが出演する。この図面は、一九七七年にパリで開かれた〝未来の世代の劇場〟国際建築コンクールに出された5点の設計図の一つである。

コンクールの課題は、舞台が観客席からよく見え、音響効果がすばらしく、劇場空間のすべての必要な部分が可動する四〇〇〇人収容の劇場を設計することだったが、ソ連の学生たちは1等（全部で4名）に2名、2等（6名）に3名が入賞した。

プロの建築家の目で見ると、入賞した設計はどれもなかなか工夫がこらしてあり、目新しい処理の仕方もあって感心した。

どの設計者もできるだけたくさんの人を芸術の世界にひきこもうと考えているせいか、観客収容数の大きな劇場センターを設計した。若い建築家の作品には未来学の影響が見られるとはいえ、それらの設計は実のところ現代の社会・文化的諸問題を反映したものであり、またこれらの問題を未来に投影したものといえる。

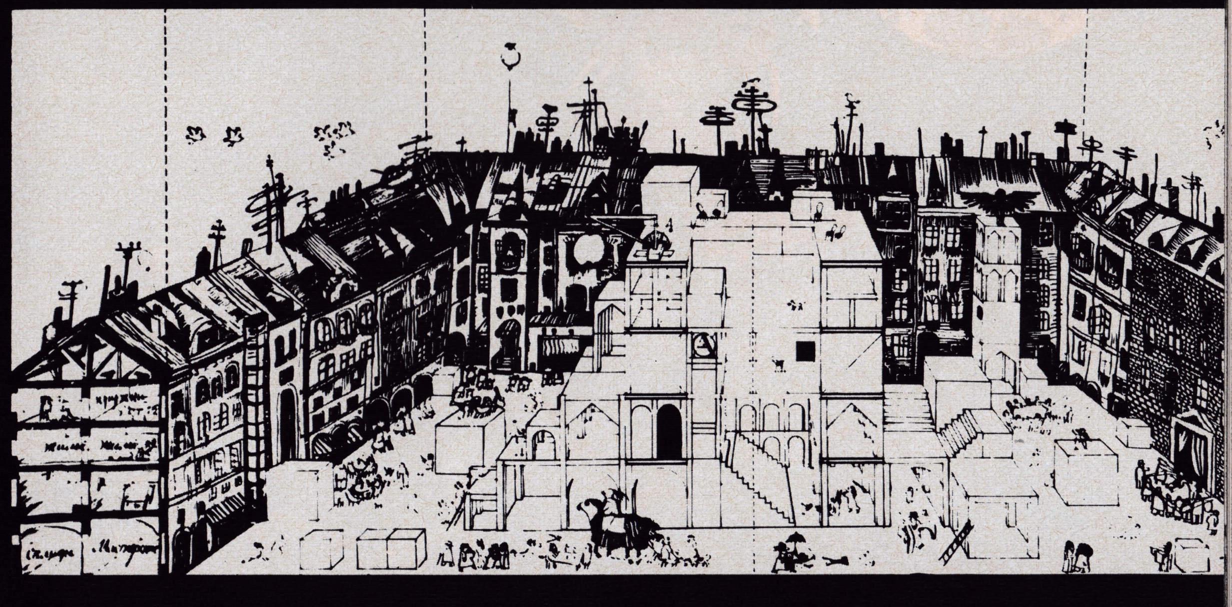
学生たちが設計した劇場センターは、芸術をひろく大衆のものにし、大衆とじかに結びつけるという社会的機能を果たすことになる。だれでも随時舞台装置係の仕事や舞台衣装製作場をのぞいたり、リハーサルのもようを見物でき、演劇づくりのいわば協力者になることができる。

また劇場をまったく新しい場所に建てるのではなく、歴史的な建物のアンサンブルのなかに劇場をつくって、このアンサンブルの不滅の美と価値をひき立たせるというやり方をとっている。たとえば17世紀の元ピョートル大帝修道院の建物の間とか、18世紀末—19世紀初めの貴族の邸宅とブリバール環状道路との間とかいうぐあいに。演劇の性格やジャンルに応じて、劇場がそれぞれ別の入口を使うということもやっている。

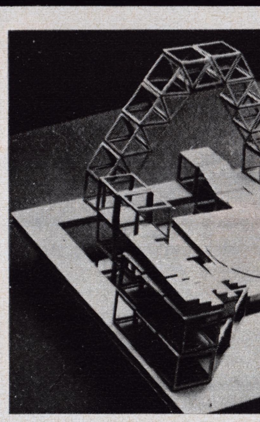
次にユーリー・バルヒンの話——

「どの設計者も考えたように、劇場とは始終変化しつつある生体のようなものだ。出し物に応じて劇場の外観や内部も変わり、また劇場の周辺の家や街路、中庭が舞台の役割をする。いろいろな装置を使ってごく短時間にあらゆる形の舞台や観客席がつくられ、ある時は舞台が客席に、逆に客席が舞台になる。だから将来はロシア、イタリア、日本の古風な劇場のふん囲気も味えるし、現代的な演劇も味わうことができよう。

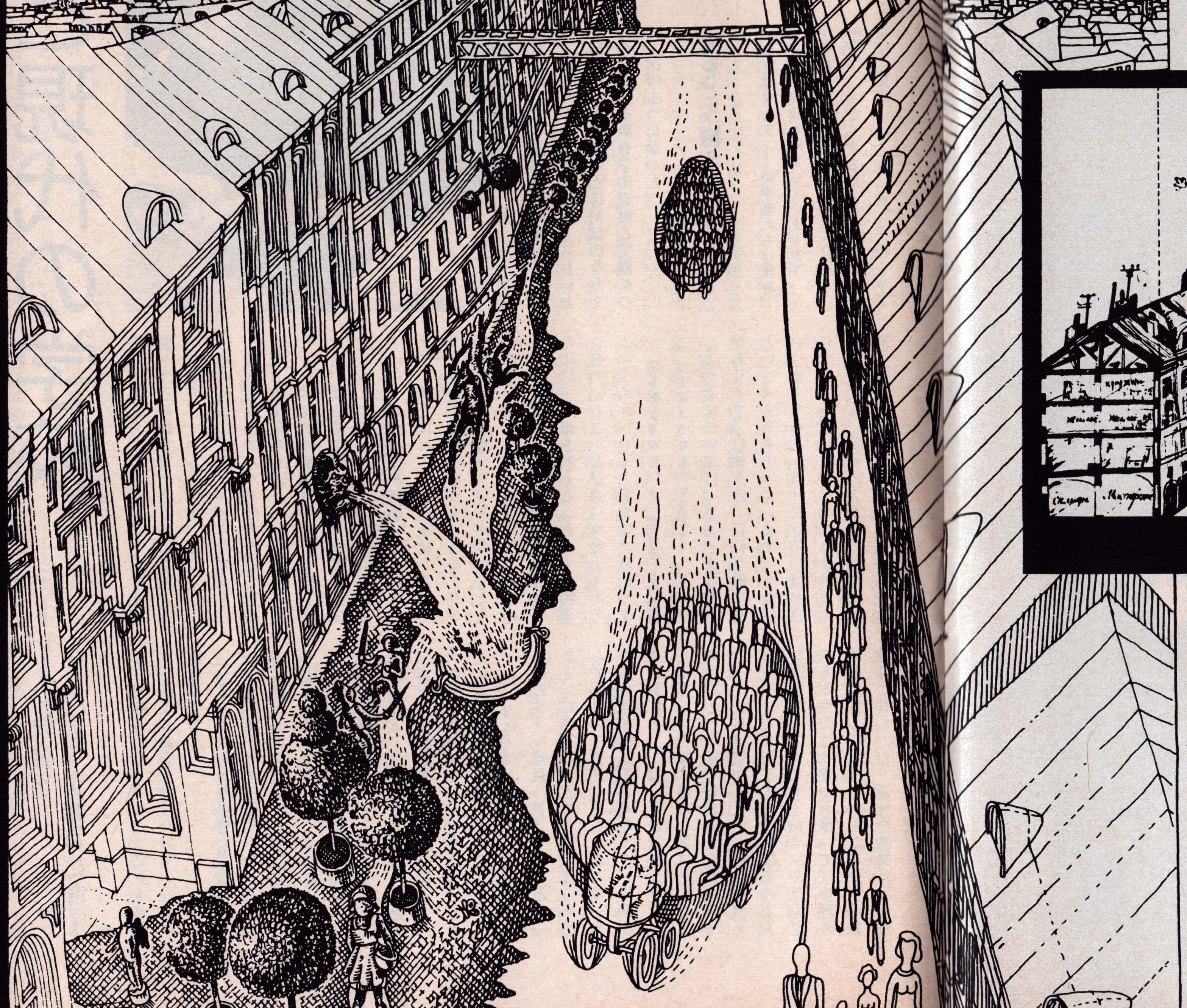
われわれは伝統的な劇場といまの外観をけっして否定はしない。いろいろな形態の劇場の共存に賛成である。未来の劇場センターの設計図はこの共存にも役立とう」



モスクワのクズネツキー・モストとプーシェチナヤ街の間の外庭に建てることを想定した未来の劇場



小劇場の設計の一つ

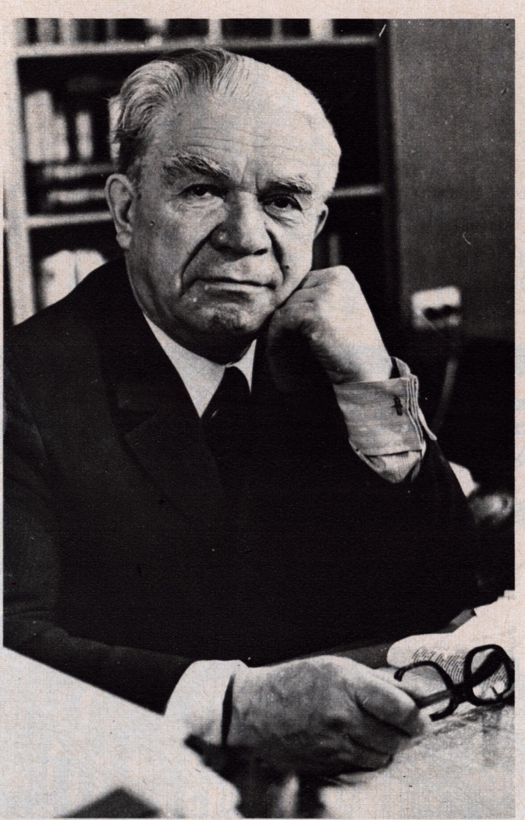


観光客はオープンカーで劇場街を回り、30分以内で全部の劇場の出し物を一応知る。

特集　学校教育の問題点

教育学と現代の学校

――ストレトフ教育学アカデミー総裁に聞く



ソ連の普通教育学校では毎年9月1日に新学年が始まる。四〇〇〇万人以上の生徒が新学年を迎えるが、うち四〇〇万人は7歳児の新入生である。

毎年、新学年ともなれば、これまでの未解決の問題のほか、新しい問題も出てくる。こうした新しい問題のいくつかを取り上げてみよう。

＊　＊　＊

ソ連教育学アカデミーは、教育学分野の最もすぐれた学者たちを擁する最高の学術機関である。アカデミーの19の研究所が、子供たちの学習＝教授と教育にかんする諸問題を研究している。同アカデミーのフセボロド・ストレトフ総裁は、本誌記者との対談のなかで、ソ連における教育学の発展と実践について次のように語った。

何をどう教えるか?

教育学アカデミーの学者たちは現在、どんな問題を研究していますか？

それらの問題を数えあげるだけで、読者はうんざりするだろうと思います。しかし簡単にいえば、現在学校を卒業する生徒たちに、21世紀にかれらが必要とする知識をどのようにして教えるかを研究しているのです。

その時代に人間が、どんな知識をどれほど必要とするかを今の時点で正確に言い切れる人は恐らくないでしょう。そこで学校での教授のために、科学、技術、物質的生産、芸術の基礎が選び出されます。この点で、ソビエト教育学には2つの根本課題が与えられています。第1には、人類が蓄積した無尽蔵の精神的富のなかから、生徒の科学的世界観の基盤の形成を可能にするものを選び出すこと。第2には、独学のための基盤をつくり、知識欲を伸ばすために、知識を教えることです。物事に打ち込むことが認識の原動力である、というのがソビエト教育学の原則です。

何を教えるかという、選び出しの原則はどのようなものですか？

この点については、さまざまな観点があります。私個人は、百科全般主義という考え方をとっています。これはいうまでもなく「多ければ多いほど良い」ことを意味するものではまったくありません。周知のとおり、科学、技術、芸術の各部門間には関連があります。それぞれの卒業生は、これらの関連の基本知識をも身につけていなければなりません。

しかし、百科全般主義の原則のなかには、人間がディレッタント（しろうと学者）になりかねないという危険があるのではないでしょうか？　学校では、それぞれの生徒が、自分がより好きなことを勉強するのが、いっそう良いことだ、という意見があります。たとえば、精密科学が不得手なものには、人文系学科のコースだけをとらせ、またこれと反対の場合には逆に……といったように。

そのような意見は正しくないと思います。おさないころの専門化は、かならず個性の一面的発達をもたらす一方、他の素質を抑圧するものです。未開発の素質にとっては、これは破滅です。しかも、少年期の好み、興味というものは時として後で変わることがあります。それらは突如として、ぱっと燃えあがることがあります。私はそのような例を知っています。レニングラードのある生徒は物理が大嫌いで、物理の成績は良くなかった。ところがその後教師が替わった。新任の教師は、物理学を非常におもしろく教え、多くの生徒の心を引きつけた。例の少年もその一人でした。少年は卒業後大学の物理学部に入り、その後、この分野のすぐれた学者となり、いまは現代科学の最も複雑な諸問題の研究で成功をおさめています。

能力を引き出す教育

なるほど、かれはたまたま、才能のある人間だったのでしょう……

才能はすべての子供にあります。私はそう確信しています。才能に欠けているということは、すでに異常なのです。子供の能力を引き出し、伸ばすために最も良い条件をつくり出すことも、教育学の課題です。そのため、設備のよい特別教室があり、新しい教育機器が使われ、学校やピオネール会館付属のサークルなどがあるのです。

学習にたいして生徒に興味をもたせることは、それほど簡単なものではありますまい？

そのとおりです。ソ連では、学ぶ可能性、無料で学ぶ可能性がすべての人に与えられ、また学ぶことが義務となっています。このことは、ちょっと言いにくいのですが、時には学習の意欲を弱めることがあります。帝政ロシアでは、すべての子供が学校教育を受けるなどということは思いもよらないことでした。当時は学ぶことは最大のしあわせであるという理解をもつのに、何ら外の力はいりませんでしたが、いまはどのようにして子供の知識欲と打ち込む気持ちを伸ばすかという外の力が課題になっています。この問題を別の形で言いかえると、子供の自主的思考力をどう伸ばすか？　子供の創造の芽をどう育てるか？　ということになります。ソ連の優秀な教育者たちが、この課題に取り組んできたし、いまも取り組んでいます。たとえばソ連の有名な教育学者ワシリー・スホムリンスキーは、自然のなかでの思考力の開発という独得のやり方を取り入れました。子供たちを草地や林のなかに連れ出して、観察させ、考えさせ、記録させるのです。ここで、知的労働の強い感情的刺激――驚きと感嘆がはたらき、これが生活と知識にたいする関心を生み出しました。

抽象的思考力を開発

教育者――教育の実践家とその研究者たちが、子供の思考力を伸ばす多くの手段と方法を創造しました。学者たちが証明しているとおり、7―8歳ではやくも、抽象的思考が芽生え、知識にたいする理論的態度と対象の本質を見分ける能力を伸ばすことができます。数学とロシア語の実験教授では、いきなり総論的なことから教え始め、各論的なことは後回しにするように授業を組み立てました。その結果、低学年の子供たちに抽象的思考の特徴が現われました。これはもちろん、生徒たちのこんごの知的発展にとっても好都合な可能性をつくり出すものです。そして最も重要なことは、生徒たちが夢中になって学習にはげんでいることです。

生徒が一定量の情報を入手できるようにするだけでなく、大量の知識の流れのなかで、自主的に必要なものを見分ける生徒の能力を発達させる効果的な手段を見つけること――これが最も重要な教育課題の一つだとわれわれは見ています。

人文系学科の比重

こんにちわれわれは、これまでにも増して、人間の個性を形成する教育について語るようになっていますが、これに関連して、人文科学系の学科の役割が大きくなっているのではないでしょうか？

これについては、もっと正確に言い表わしたいと思います。つまり学校教育の自然科学・数学部分と人文科学部分との調和にもっと配慮しなければならないということです。ここでわれわれはまず第一に、文学、歴史、社会科の教育法を改善することを研究しています。もちろん、教師の個性に依存するところも多いのです。生徒の市民的感情をりっぱに育て上げるには、それぞれの生徒の内部の世界に入り込むことができなければなりません――生徒が自分の心を開くのは、同じ意見をもつ友人としての教師にたいしてだけなんですから……

労働教育の重要性

ソ連政府はさきごろ、学校の労働教育の改善にかんする決定を採択しました。カリキュラムと生徒の労働教育とはどのように結びつくのでしょうか？

物質的生産における生産労働ほど、若者が自分の生活の道を見出すのに役立つものは、他にありません。肉体労働は、生活に必要な技能を身につけさせるだけでなく、人間を教育し、人間の思考力を伸ばす――この真理は幾世紀にもわたり、幾百回となく確かめられ、検証されてきました。労働教育は、生徒にとって世界を積極的に知る手だてなのです。

「知識は労働をつうじて」という原則は、複雑な、多くの点で新しい課題をわれわれに課しています。それは、生徒たちの学習、労働活動、社会活動を一つの体系にまとめることです。教育学アカデミーの学者たちは現在、この問題の研究に取り組んでいます。

愛を育てる文学教育

文学教師　リジア・セメイキナ

モスクワのある普通教育学校の文学教師リジア・セメイキナは、心のやさしさや公正と社会的積極性をめざす意欲を育てることについて、次のような意見を述べている。



教師にとって最も大切なことは、その教え子たちがどんな人間になるかということである。恥しらずとかエゴイストに出くわせば、本当にかれがこの学校の卒業者であり、『エブゲニー・オネーギン』（プーシキン）のページをめくり、トルストイやドストエフスキーの名をとなえた人間か、とつい思うだろう……　私たちの仕事のなかで最もできの悪い者といえば、知識で武装した恥しらずである。基礎的なことは知らないで、ボードレールから引用した文章や、後期印象派の名前をあげて、話し相手を圧倒しようとする連中に出会うことがよくある。

ある若者は「われわれは実生活のなかで、やろうと思えばいつでもりっぱな行動をとることができるのだ」と書いた。そこで私はこの若者にこう言った──それはごりっぱだが、書いてあるだけでは三文の値打ちもない。自分の行為をりっぱなものだと称するために、あなたはどんなことをやって、そのことを証明できるのか!?と。

8年級の最初の授業を始めるとき、私は生徒たちに言うのである──「覚えておいてほしいが、もしあなたたちが、ある作品が書かれた年を忘れてもかまわないし（あとで学んで答えればよい）、偉大な作家の生死の日付けが混乱してもかまわない（もっと勉強して、他の日付けと混乱しないようにしよう）。しかしあなたたちが口ではヒューマニズムを語り、実生活では反人間的振る舞いをすることだけは断じて許さない」と。

※　※　※

精神的心棒をなくした若者が、自分のアパートの庭では、激しくて陽気だが、行き場のない力を発散させながら、それでいて自信にみちた子供らしい夢と衝動を実現させることでは少しも成功していない場合を私たちは知っている。若者は、いわゆる〃音響障壁〃なるもので、大人の世界から自分をまもり、ポップミュージックの録音テープを入れたテープレコーダのボリュームをいっぱいにあげて、その音で自分自身の困惑の声がきこえないようにするのである。だれがこれを止めることができるだろうか。それは文学の教師である。この教師は、道徳的お説教をすることなく、成長期の世代にたいして、善の本質的意義とその美との関連を明らかにし、人間の長所と自尊心の利益がときにはまったく反対のものになることがあるということを感じさせ、やがてこのことを理解させることができる。文学の教師は、良心がどのようにして精神を腐敗からまもるのかの理解をたすける。かれは自らを尊敬するためには、どんな生き方をすればよいかをそれとなく教える。

数学、音楽、スポーツ、チェスのレッスンには最適年齢のあることはよく知られている。文学の教師は、道徳教育に最適の年齢はいつか、どのような影響手段がどのような年齢に最適であり、最も有効かを知っていなければならない。

※　※　※

初めて農村の学校へ行ったとき、子供たちが十分な情報に恵まれていないのではないかと心配したことを私は覚えている。蔵書のあるすべての家庭の名簿をつくり、自分に必要な本、レコードをチェックした……

いまはあらゆる機会を利用して、自分が受け持っている都会の子供たちを市外に連れ出している。授業中、窓ぎわへ行き、その瞬間、外がなんだか特別に明るかったり、雪が舞っている時などは、めったにない精神の高まりのようなものを感じ、私は子供たちに言うのである──「ご覧なさい、なんてすばらしいんでしょう……なんて美しいんでしょう！」

自然そのものが子供に植えつけた純粋で深く、直接的なものは保持されねばならない。率直であることを教えねばならない。子供のころから自分の感じ、疑い、期待、うらみを率直に話すことのできる人々は、他人を理解し、最も理解しやすく受け入れやすい人間になる、より大きな機会にめぐまれている。

※　※　※

5年級では、「自分の両親の職業について、どんなことを知っているか」というテーマを与えている。自分の両親を見る時、両親がどんな仕事をし、何を考え、家の外で何をつくり出しているかを理解している。このように子供は、自分に近い普通の人間のことを複合的に理解しているのであるから、非常に単純であるとは言えない。

4年級のロシア語の授業で、紙を封筒に入れてくばり、テーマは「呼びかけ」、つまり望む相手に手紙を書きなさい、と私は言った。ある女子生徒はこんなことを書いた──「愛する古代ギリシャ、あなたたちの英雄の栄光が私を感動させました。いま私はエジプトにかんする本を読んでいます。栄えあるギリシャよ、ギリシャにはなにか不足しているものがあるように思えます……多分、それは自由でしょう。私はいま10歳ですが、大きくなったら、きっとあなたを見つけにゆきます……」

ここでは、あらゆる障壁をこえて、あたかも生き物に呼びかけるがごとく、いきなり古代ギリシャに呼びかけ、同時に隣の者との連帯を感ずるのである。そしてその隣の者とは、15分前の休み時間に消しゴムのことから〃つかみ合い〃をしていたのである！……

※　※　※

私が教えている8年級の生徒はみんな、プーシキンの少なくとも11の詩を暗誦できなければならない。これは臨時試験で、授業後に行われ、同時にテープレコーダの録音が行われる。朗読は非常に熱心に、繰り返し行われる。

生徒たちは、ずっと以前から詩の朗読が好きだった。新年の前夜、6年のクラスでみんなが一緒に盛大に、しかも静かに朗読したことを全員が覚えている。低い声で一斉に読み上げられるプーシキンの詩が、ろうそくのあかりのもとで実にすばらしく響きわたる。愛の詩である。子供たちは、すぐれたユーモア感を持っている。子供たちはいつでも一斉に大きな笑い声で授業の静けさを破ることだってやりかねない。しかし笑い声や微笑が子供たちに場ちがいに思える場合もある。それは何よりも、笑いが知覚の素朴さ、そのなかにやどされた無教養の影を示しているときである。このような反応は賞められるものではないこと、この種の笑いは愚鈍の現れであり、無学者と野蛮人の反応であることを子供たちはよく知っている……

場ちがいなのは嘲笑的態度とうわすべりの皮肉だけではない。気取り、身構え、冷淡もまた場ちがいなものである。

プーシキンは子供たちに非常に多くのものをひらいて見せている。かれは各人独自の創造の芽に刺激を与えるのを助けている。詩の『やまいにかかっている』人々は、いつかはあふれるほどの詩を書き、それらをそらで読み、最高のすばらしい詩の世界で生活し、完ぺきの極致がどんなものかを感ずるのである。このことは、その人の人生の助けとなる。

※　※　※

15歳を目前にして、人間の本性について考えることは有益である。このことは、人間の使命を考える基盤を準備する。8年級（14歳）と9年級（15歳）の間には、純粋に年齢的な大きな境界がある。9年級では毎年、ロシアの民話に出てくるイワーヌシカのような奇跡が起こる。イワーヌシカは熱湯のたぎる釜のなかにとび込み、やがてまったくの別人になって釜から出てくる。私たちの前にいる生徒たちは、イワーヌシカのようにこんご変わる人々だ。

9年級では、トルストイ、次いでドストエフスキーの学習が始まる。道徳的自己完成の問題は、人格形成期の各人にとってきわめて重要である。この問題は、道徳的諸原則を最終的につくり出し、その原則を守るのに役立つ。これはあなた方が自分で行動の計画を立てることができないとか、それが困難な場合に、そのような苦境から脱する現実的方法となる──私は9年級の生徒たちに率直にこのように聞くのである。こんにちの私は何か、そして明日は何に（何に、であって、だれにではない）なれるのか？　このためには、現在、明日、一年後に私は何をしなければならないのか？　思想、言葉、行為がしかるべく統一されるのである。

※　※　※

男の子が書く。女の子が書く。早朝の第1時限の課業で、ある子供は次のように書いた。

「私は、どういうわけか、プーシキンが特別に好きになった。プーシキンの詩を読みながら、なんども泣いた。うれし泣きに泣いた。

これらの詩のなかでは、愛が音楽のように、すばらしい、明るく広大な、心のなかに滲み込むメロディーのように、すべてをおのずから覆いながら鳴り響いている。プーシキンの愛の詩を読みながら、人々を心から愛することを学ぶよう、私は心から望みたい」

私の教え子たちの声が、このように響きわたっている……

☆　☆　☆

学校を楽しくするには

──モスクワ第710学校の実験

アレクサンドル・ニリン
カメラ O・イワノフ B・カバシキン



3年生の算数の時間──リュドミラ・ファジェーエワ先生の授業は生徒たちを退屈させない。



学校の歯科治療室にも、楽しい学校のふんい気がただよう。



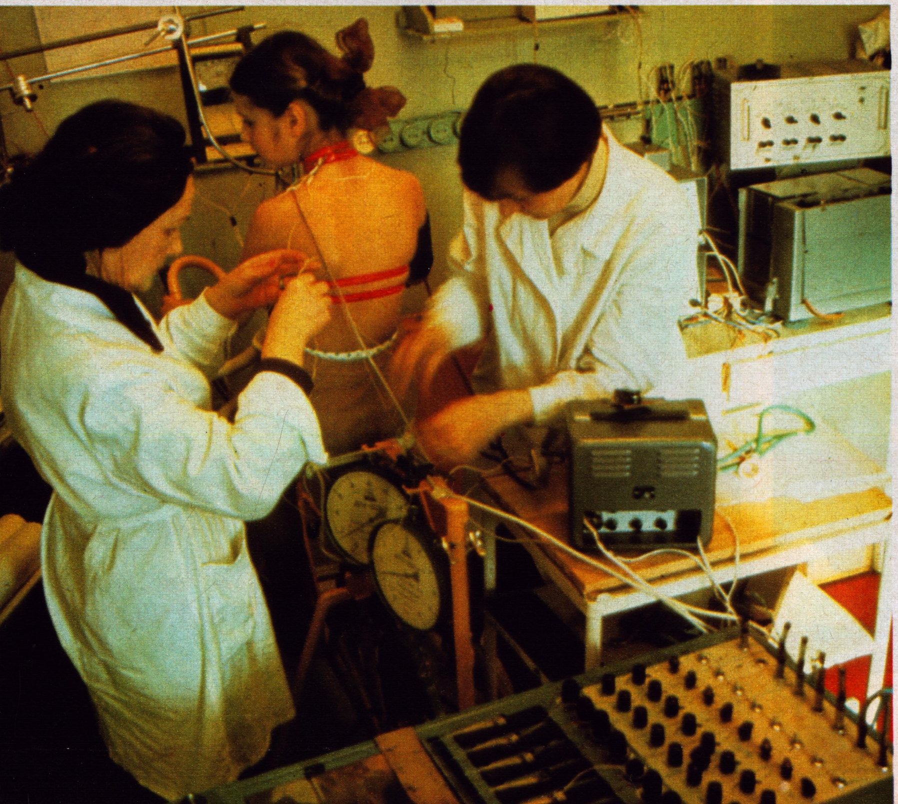
◀ モスクワ第710学校4年生のエレーナ・マスロワちゃん

4年生のユーラ・ブイチコフ君は「ぼくは月曜日はなかなか早起きできなくて、とてもつらい……」とこぼす。

事実ユーラは月曜日の朝、学校の階段をため息まじりであがる。だがユーラにはもともと学校は楽しくて面白い所だから、もう火曜日には学校が好きでたまらなくなる。

最適のリズムの探求

ユーラが通っているモスクワの第七

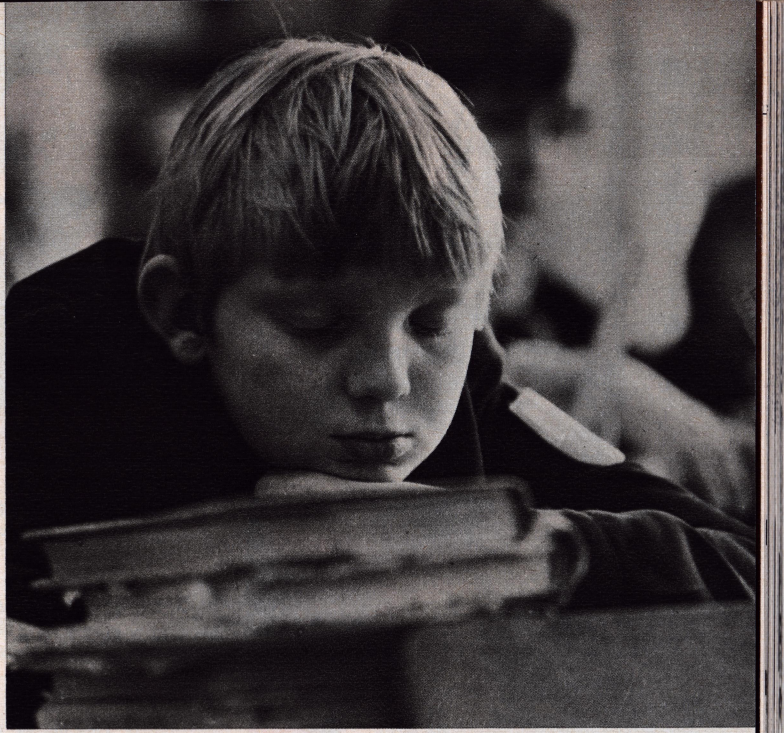


◀ 学校内の教育学アカデミー研究所の実験室。子供たちが〝宇宙飛行士ごっこ〟と呼んでいる子供の身体への負荷の調査。

一〇中学校で行われていることは、ソ連の二〇万の都市や農村のどの学校とも直接かかわりがある。*どの学校もカリキュラムは同じで、必修となっているからだ。ついでながら生理学者たちの意見によると、学童に一番つらい日は木曜日だという。子供たちから見ると日曜日までまだ数日もあり、疲れが一番出る。ところで勉学には毎日、新鮮な力と健康なズバリ知覚する力が必要である。

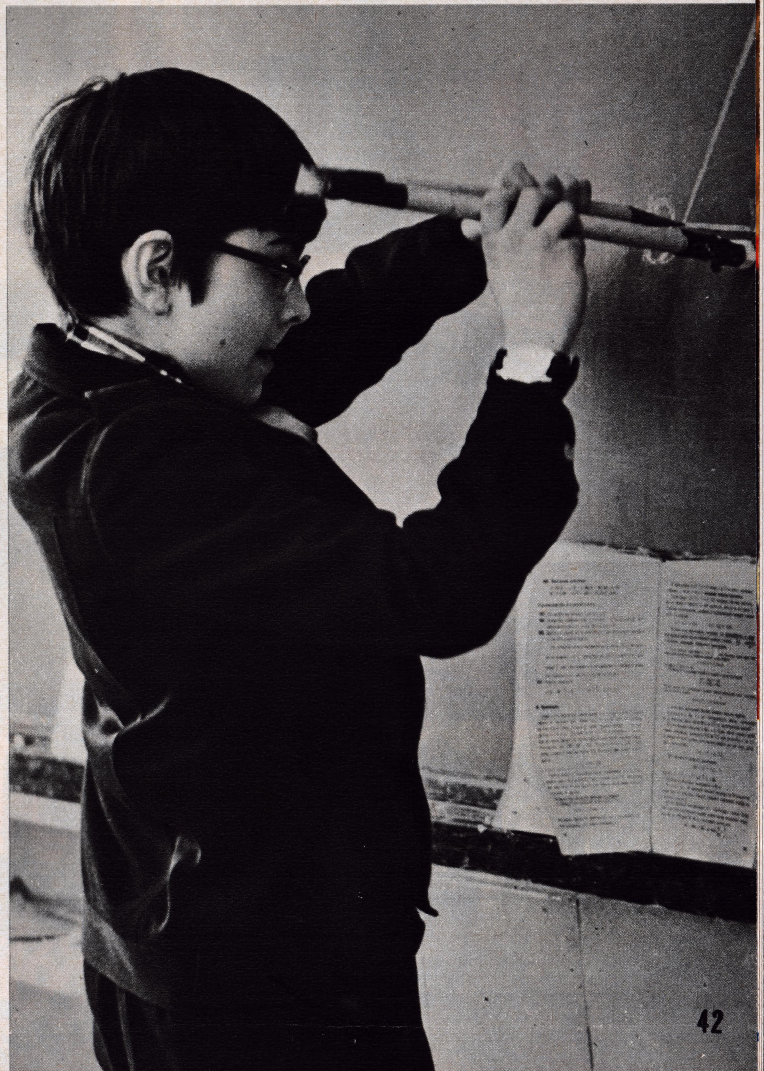
*ソ連の学校は日本のように小、中、高校に分かれておらず、10年制。

ここで取り上げる第七一〇学校には、ほかの学校と違うものがただ一つある。



4年生のユーラ・ブイチコフ君──「月曜日はなかなか早起きできなくて……」

幾何もらくじゃないよ……



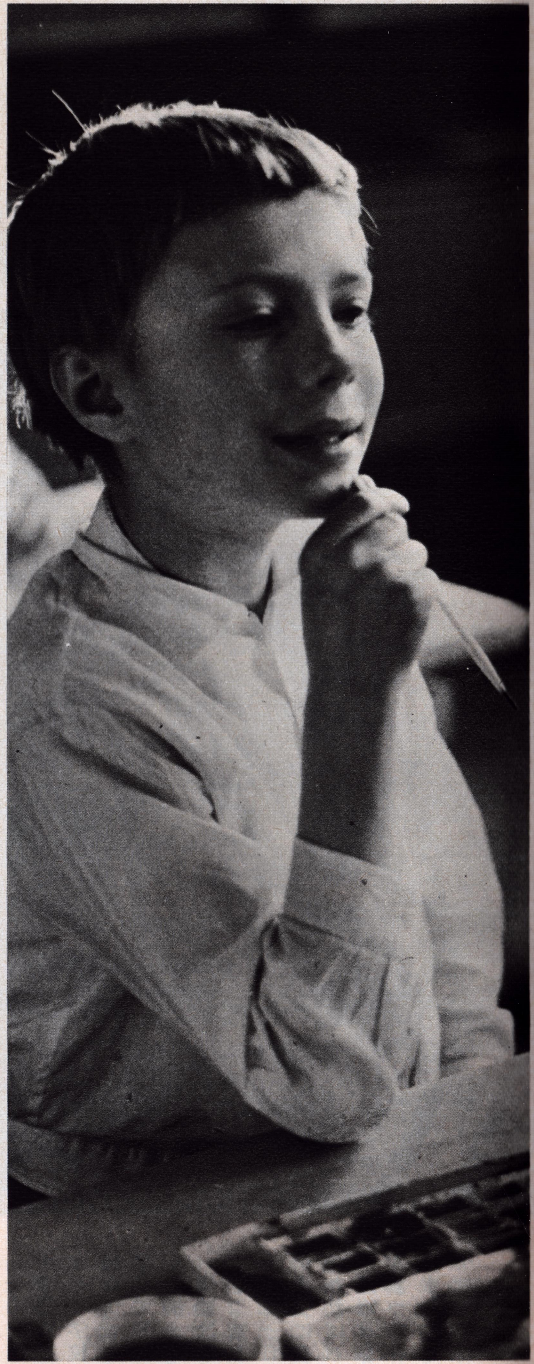


▶「これ白鳥よ。似てなくてもいいの。一生けんめいつくったんだから」

それは学校に生理学者、医者、生物学者がいることだ。学校の教室の隣にソ連教育学アカデミーの研究所の実験室があって、学者たちは通常の授業時間中にいろいろな実験をやっている。それというのも、カリキュラムが年々複雑になり、内容が詰まり、必ずしも子供たちに消化できるとは限らなくなっているからだ。だから新しいカリキュラムと子供の体力との調整をはかり、勉学の最適リズムをつくるのが、学者の課題である。

リズミカルに学習をする体制は、この学校の時間割に現れている。ワジム・ジュドフ学校長は「一日のうち学童の作業能力には12時と15時の2回ピークがある。だからうちの学校ではこの2回のピーク時に必ずむずかしい学科を割り当てており、また授業─休み時間─授業という順序を必ず守ることにしている。授業時間はほかの学校は45

●学校を楽しくするには



絵画の時間の3年生イーゴリ・バラノフ君。秋という題を出されて、さて……



先生にとって一番うれしいのは、生徒の答えにイニシアチブ、自主的思考、学習の満足感が見られること。





音楽の時間。この歌を知っている人はいますか？

分だが、うちは35分。休み時間は10分ないし20分。毎日体育の時間は2、3時間あり、このほかに体育の時間の特別授業がある……」と説明する。

この学校に足を入れてすぐ目につくのは、子供たちが始終動き回っていることだ。スポーツ用具を備えた広い校庭を走り回っているし、階段も駆け足だ。休み時間も動きまわる遊びばかり。万事自然にそういうふうになったかのようだが、もちろん違う。一定の考えにもとづいてやっていることなのだ。そういう動きを称して動的休けいといっているが、それは休み時間だけとは限らない。教師は学者を通じて生徒の思考や情緒の疲れをとらえ、授業が生徒に重荷としか感じられなくなれば、休けいをする。一年生は上級生と違って休けいのときとんだり、はねたり……するが、どのクラスも必ず休けいをとらねばならないことに変わりはない。

そもそも学校の課題は、一定のカリキュラムの知識を生徒に与えるだけでなく、学校を出てからもずっと勉学を続けて行こうという気持ち、たえず独学して知識を身につけたいという気持ちを植えつけることにある。

学校は学ぶこと、楽しく、打ち込んで学ぶことを教えなければならない。そこで一日の授業の最適リズムの探求が必要になるが、その最適リズムが見つかれば、学校は楽しいものとなろう。

月曜日をどうするかはまだはっきりきまっていないが、おそらく登校時間をずらすことになろう。木曜日についてはすでにあらゆる点が考慮された。

木曜日には学校は活動範囲を広げ、見学の日にして、劇場、工場、絵画館、史跡や名所をまわる。

この木曜日に身につけたものは、ほかの残りの日になんらかの形でカリキュラムに反映されよう。生徒が目にしたものは、ロシア語や文学の時間の作文にも現れるし、絵画の授業では想像力を伸ばすのに役立ち、数学の時間には論理的思考の習慣をつけるのに役立とう。こうして木曜日のつらい日という汚名はなくなろう。

先生と生徒の結合

学校には必要な設備を備えた主要科目の特別教室がある。学校は人文科学と精密科学との間の大きな違いを認めないどころか、その類似性を強調するようつとめている。たとえばリュドミラ・ファジェーエワ先生の算数の授業はけっしてアカデミックとはいえない。きょうの授業は分数。ハサミと色紙をもった数人の2年生が1列に並ぶ。「1枚が1ですよ。さあその1／4を切りなさい」……思考の論理ははっきりしており、典型的だ。

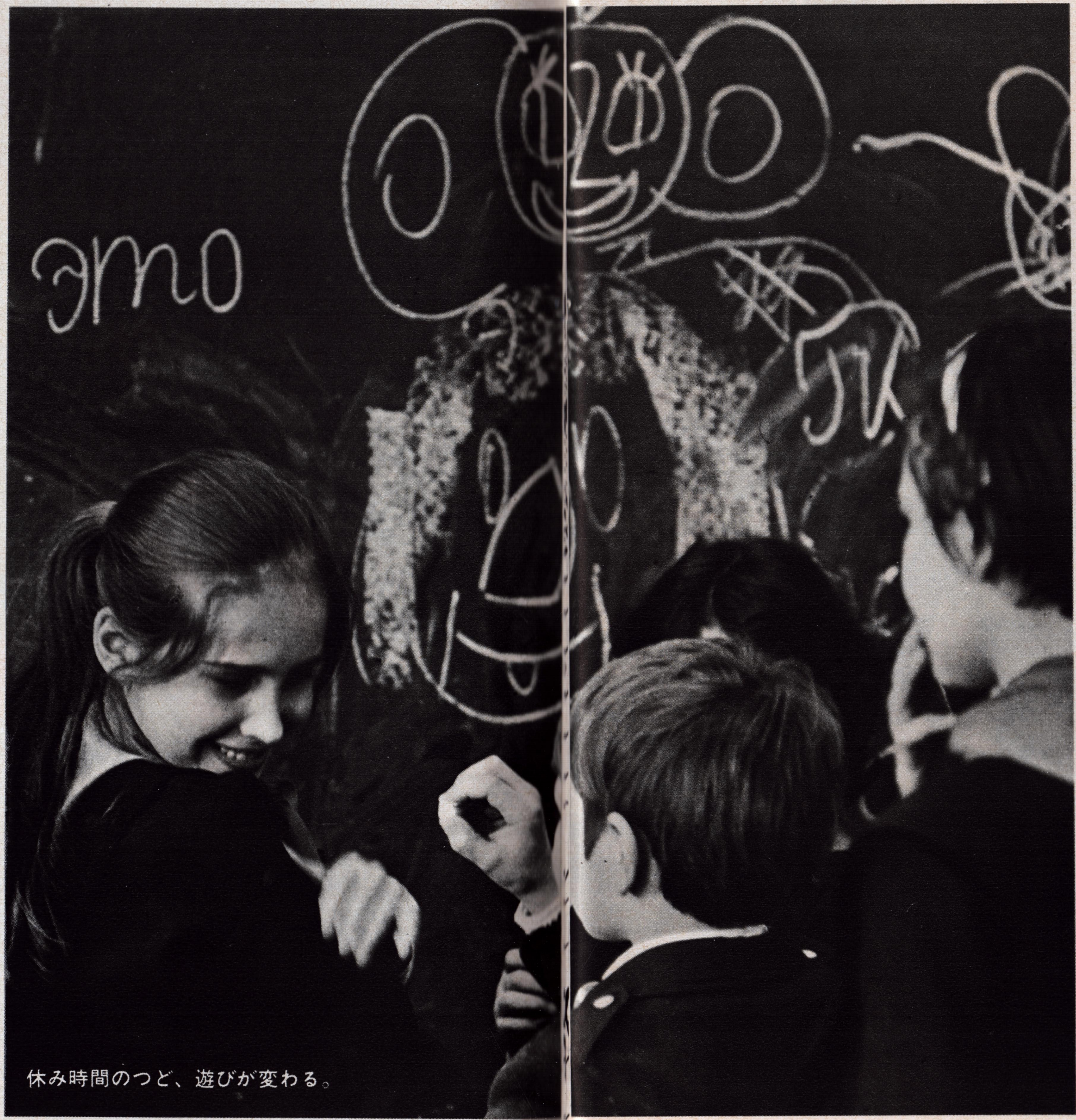
リュドミラ先生もこの第七一〇学校の出身で、ここから教育大学へ進んだ。リュドミラ先生といっしょに、この学校からほかに28人が教育大学へ入った。うち7人がいま母校の第七一〇学校で教えている。そのうち一人がロシア語の先生のユリア・イワノワである。

ロシア語のカリキュラムでは、すべてが正字法の基礎一点張りのように見



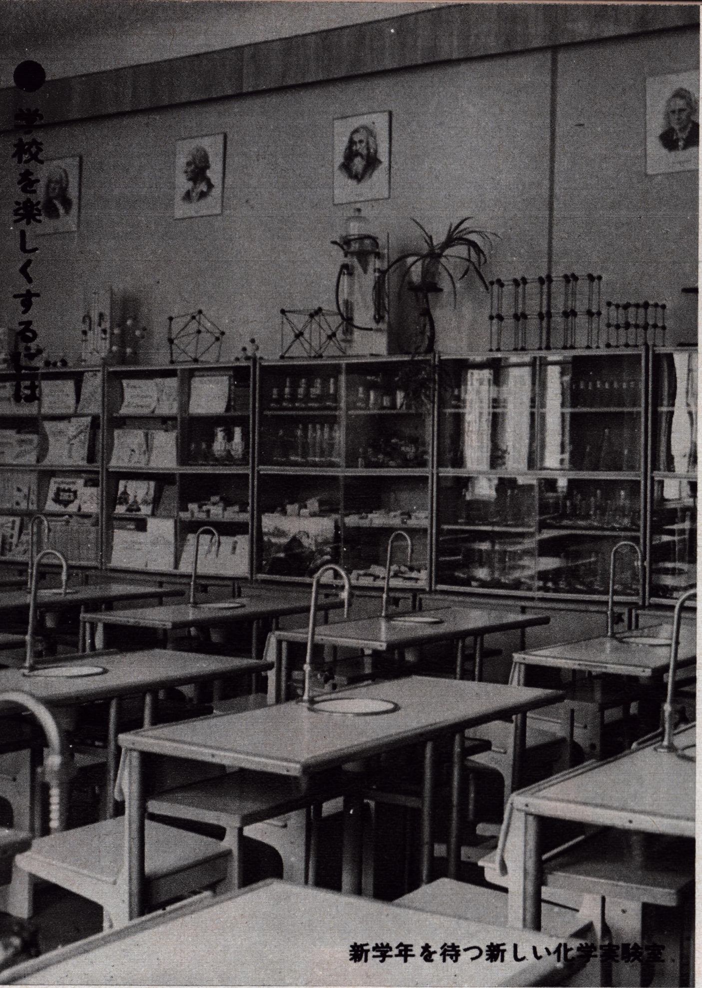
この学校で休み時間が動的休けいといわれているのは当然だ。カバンは廊下に出され、何も運動を拘束するものはない。

える。低学年はアルファベットと単語、高学年は少しこみ入った概念を学ぶ……しかし国語は正字法規則一本ヤリでは片付かない。まず第一に世界、なまなましい現実の世界にたいする関心を授業でうえつけ、読書や劇の感想をつづり、絵物語や童話を書き、見学のとき強く感じたことを、おかしく、あるいはまじめに伝えるすべを教えなければならない。ソ連の有名な教育学者ワシリー・スホムリンスキーは「子供の心の動きをつかむことが肝心である」と言ったが、どの授業でもこれがかなめである。先生が生徒の心をつかめば、先生と生徒の間にさまざまな世代の協



休み時間のつど、遊びが変わる。

●学校を楽しくするには…



新学年を待つ新しい化学実験室

力、協調、交流が生まれる。

楽しい学校

〝楽しい〟（ただたんに良いという意味）学校でとくにはっきりしていることがある。それは全部の生徒がりっぱな才能を持っているということだ。そういう才能も授業のわくに閉じこめておいては窮屈だから、時間割には各人好きな課業をする時間というのが設けてある。その時間は、音楽サークルや少年自然科学者サークル、演劇スタジオ、玩具、工作、体操、模型製作、絵画、趣味の数学、無線電子工学のスタジオ、映画クラブ、合唱隊で課業をする。

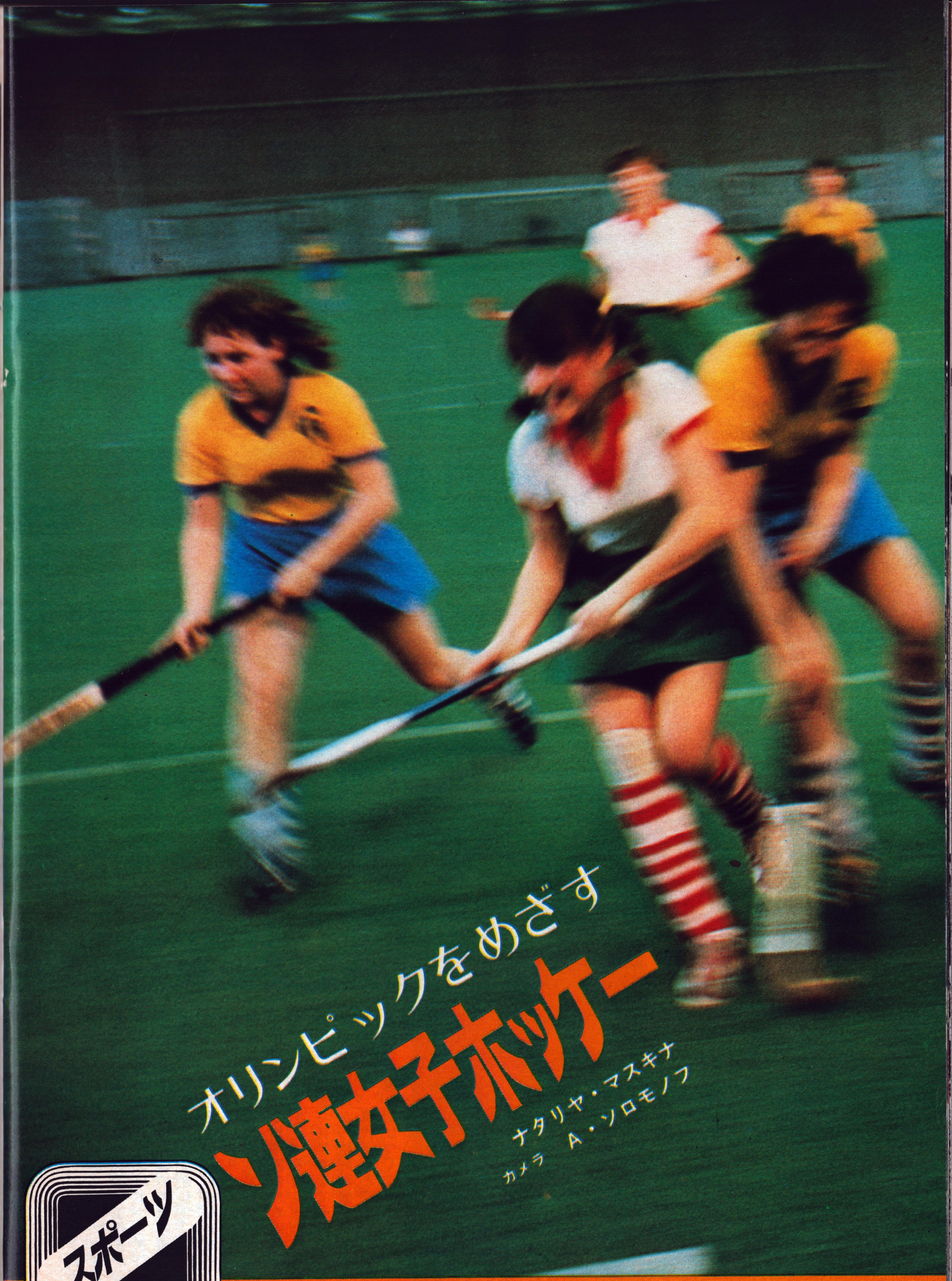
……〝つらい木曜日〟に、私は第七一〇学校で、上級生が演劇スタジオで『ロミオとジュリエット』を、下級生が『ドクトル・アイボリット』の練習をしているのを見た。隣の工作室からカンナ屑のにおいがただよってきた。子供たちは授業や必修の実習を通じて、労働の世界を知る機会をもつ。つまり自分で生産労働をやらねばならない。学校には工作場があり、子どもたちは両親とともども工作場にきて、自分の家や後援している幼稚園のために何かつくることができる。労働の時間そのものは1学年から10学年まで必修である。この時間もほかの時間同様、見学（大工場の見学、現代工業との本格的な接触）の印象と結びつくことが多い。

〝楽しい学校〟は、退屈な授業を排し、授業に真剣に取り組んでいる。こうしたところから、労働を必要とするが、〝つらくはない〟興味深い一日、興味深い授業が生まれてくる。その授業は将来の見通しを教えてくれ、視野の拡大を保障してくれる。

視野や見通しをなくしては、人間はだめになる。そういう信念でカリキュラムがつくられ、子供たちが学校で送る一日が組み立てられているのである。

だからこの学校では木曜日は一番つらい日ではないし、月曜日も全員がつらい日だと思っているわけではない。

率直な2年生のイーゴリ・バラバノフ君は学校のアンケートの質問にこう答えた。「ぼくはまた友だちに会えるし、いろんな楽しいことが絵にかけるので、月曜日が好きです」



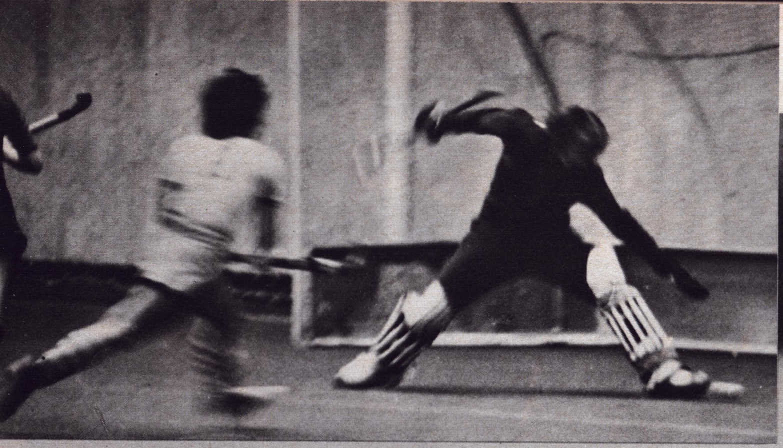
ゴール前の激しい攻防

オリンピックをめざす ソ連女子ホッケー

ナタリヤ・マスキナ
カメラ　A・ソロモノフ



あっと思う瞬間、ゴール！



キーパーの好守でゴール成らず

こんど女子ホッケーが初めてオリンピックの種目に入った。80年オリンピックの主催国ソ連のチームは、予選を経ずに競技に出場できる。

ソ連ではこの新しいスポーツ種目の人気は高まる一方である。だが新しいといっても、ほかのスポーツと比べてそういえるだけのことで、ホッケーの歴史はひじょうに古い。なるほど最近までは男子だけでもっぱら公式競技が行われてきた。

ソ連に女子ホッケーが登場したのはつい最近で、ウズベク共和国のアンジジャン市の女子チームがその草分け。『アンジジャンカ』チームのコーチ、ミロン・キムさんの話——「つい最近までここでホッケーを知っていたのはほんの数人でした。だがいまはもうこのまちでホッケーは最も人気のある競技です。アンジジャンでは男女チームのトーナ



ママはゴールキーパー

メントが行われており、青少年ホッケー学校が開設され、ホッケー専用の練習基地も建設中です。

私たちはまずアンジジャンに、当時目新しかったこのホッケーを普及させて見ようと思いました。それがこんにちのホッケー熱のそもそもの始まりです。ホッケーがさかんなインドやパキスタンの気候とソ連の中央アジアの共和国の気候がとてもよく似ていたから、きっとうまく行くとは思っていました」

しかしともかく一九七五年にはアンジジャンで市の選手権大会が開かれるまでになり、さらに一九七七年に市の『アンジジャンカ』チームは、モスクワの第1回全ソ競技大会に出場して優勝した。

いま女子ホッケーはモスクワ、ゴーリキー、ウリヤノフスク、シズラン（クイビシェフ州）、アナパ（クラスノダル地方）などの都市に広がっている。そしてことしの恒例の競技会ではアンジジャンの女子チームは苦戦をなめ、3位にとどまった。優勝をさらったのはモスクワ州のスパルタク・チーム。

この競技会で専門家たちの注目をひいたスパルタク・チームのフォワード、ナターシャ・ブズノワは女性独特の華麗さで、かろやかな攻撃を見せ、最多得点をかせいだ。

ナターシャは「オリンピックまであまり時間がないので、猛練習を続けています。ともかく外国のチームに追い付くことが先決です。いまはまだ経験豊富なイギリス、西ドイツ、チェコスロバキアのチームに技量でかなり劣っていますからね」と、オリンピックへの意欲を燃やしている。

ナターシャはソ連ナショナル・チームの候補選手の一人である。



惜しい試合に負けて、余計つかれたわ……

ゴーリキー市スパルタク・チームのゴールキーパー、ガリーナ・ザリコフキナ





試合は白熱……

科学技術

地震予知をめざして

――ソ連の専門家4人に聞く

地震は毎年人類から一万人以上の生命を奪っている。このほかに数十万人を負傷させ、多くの都市を破壊し、膨大な損害を与えている。

今日でも、この地球内部の暴力に歯止めをかけ、地下変動を防止しようなどという話は問題にならない。だが、悲劇を予見し、その規模を予報し、地震の被害を大幅に減らす措置を個々の場合に講ずることは可能だろうか？人命が失われるのは、建築物の崩壊のためだけではないからだ。

ソ連の専門家はこれについてどう考えているのか？

現実の問題になった地震予報

ゲンナジー・ソボレフ物理・数学博士

大地震が起こる時間、場所、その震度の予報は空想物語ではなくて、現実的な見通しである。われわれをこの結論に導いたのは、近年行われた広範な研究の成果である。

いうまでもなく、最も地震の前兆をとらえやすいのは、地震多発地帯である。ソ連科学アカデミー地球物理学研究所がタジク共和国のピョートル一世山脈付近で調査・研究活動を展開した理由はここにある。このガルム実験場はわが国だけでなく、諸外国にも知られている。

数年間われわれはここで多くの指数や前兆の変化を観察している。微小地震の数が年々どのように変わっているか、地表の隆起と沈降の速度、弾性波の伝搬速度（通常、強い地震の数カ月前に変化がある）がどのように変わっているかを綿密に観察している。定期的に岩石に電流を通し、岩石の抵抗を測定している。そしていままでは大きな地下変動が起こる数カ月前に抵抗が変わること、時にはかなり急激に変わることをわれわれは知っている。

これらの一連の前兆にもとづいて試験的な予報が行われたが、多くの場合、その予報は適中した。

地震の潜在的な前兆はかなり弱いものなので、気圧の急激な変化、豪雨、なだれ等によって引き起こされる〝雑音〟でかき消されてしまう。たとえば、カムチャツカで計器の混とんとした記録を率直に処理していたコンピュータの一つが、突然、やっと識別できるぐらいの局地的電場の変化を〝キャッチ〟し始めた。この変化は約3週間続き、地震の発生をもって終了した。

科学が明らかにした、大地震の前兆の範囲はゆっくりと、しかしコンスタントに拡大している。たとえば、あれこれの地区での地下水の〝挙動〟が、構造地質学的プロセスの性格についての前兆になることが珍しくない。この事情を考慮して、現在地球物理学者は疑わしい場所に深い孔を掘り、水位を精密に、常時測定している。水位の変動が構造ストレスの危険な増大を示す場合があるからだ。

高感度計器によって、地表傾斜角、岩石の磁気特性の変化、その他若干の地震前兆も発見された。

このように、自然そのものによって送られる、近づきつつある地震のシグナルはたくさんある。残念ながら、〝地下の言葉〟のわれわれの理解度は、せいぜい「ここで地震が起こる可能性がある」と言える程度のものにすぎない。いつ起こるか？を確信を持って答えることは、いまの所むずかしい。そのためにわれわれは十分に信頼できる**短期的**前兆の蓄積を持っていなければならない。しかしその蓄積はすでに始まっており、そのことがわれわれに希望を抱かせてくれるのである。

予知図の精度

ゲオルギー・レイスネル地質・鉱物学博士候補

地球上の地震帯は、いくつかの一定地帯に集中している。しかしこれらの地帯は盛んな地質学的プロセス、すなわち活発な火山活動、続いている造山過程、その他の現象を特色としている。

ここから結論は明らかである――地質学的プロセスと地震とは同じ原因によって生まれる。もしそうならば、地質学的条件の分析によって、地震の前兆を研究することができるだろう。そしてここから、予知問題の、一見きわめて簡単な解決方法が出てくる。すなわち大地震の発生場所をこれらの地域の何らかの地質学的特性によって描写し、地震がまだ起こっていない同様の場所を発見すればよい。これが予知のための基礎であるというのだ。

しかしこの単純さは見せかけである。われわれが記述しようとする地区はどこでも、たとえ小さな地区でさえ、非常に多くの地質学的徴候を持っているので、それらを数えあげるだけでかなりの時間を必要とするだろう。しかもそのうちのどの徴候を捨て、何を基礎にしたらいいのか？

地球のどの地区の媒体の特性も、けっして一度かぎり与えられたものではない。その特性は地質学的規模でだけでなく、歴史的な時間の規模でも、地球のさまざまな地区によって変わる。ある地区では媒体は硬く、その媒体に加えられた構造力の作用のもとでしか崩れないが、他の地区では媒体は割合柔軟で弾力があり、可塑(そ)的変化に耐えられる。地震予知（地質学的資料による）でこれらの特性を考慮に入れるためには、これらの特性を地域的に区分すること、すなわち特別な地図を作成することが必要である。

他方、すでに述べたように、起こっているプロセスの速度を研究する必要がある。わが国の学者が編集したカルパート・バルカン地区の地図には、三〇〇〇万年間、すなわち最新の地質時代の地表変形の速度が反映されている。ある色は急速な隆起を伴った地区を示し（隆起が速いほど色は濃い）、ある色は沈降速度を特徴づけている。

もし他の地区でこれらの徴候のそれぞれが、進行中のプロセスで別の〝重み〟を持ち、まったく別の比率で結合している場合には、どうするか？このような課題はすでにコンピュータを使用することによって解決されている。ソ連の学者はカルパート地方のためにさまざまな震度の地震発生の予知図を作成した。赤色は非常に危険な地区で、緑色、青色の順に危険度は少なくなる。

われわれが作成したもう一枚の予知図は北イタリア用のものである。ハッチング（けば）が濃密であればあるほど、その地方の地震発生の危険度は高くなる。こともあろうに（これを悲劇的な一致と呼ぶか、それともソ連の地球物理学者たちの成功と呼ぶかは自由だが）、予知図の完成後2週間経った一九七六年の5月、ハッチングの濃密な地帯で、イタリア人は恐るべき破局に見舞われた。数千人の死者と膨大な損害を出し、都市や村はがれきの山になったのである。地震の4日後にこの予知図を見たイタリアの学者たちはその精確さに驚いた。

地図作成による地震予知方法が有望性を示した現在、耐震建設問題を研究している人々には、この予知図を信じ、それを利用する有力な根拠が現れた。この予知図は、どこに重要な施設を建設し、どこで建設を控えるか、どこで建設物の強度を特別に高め、どこで耐震性を低めてよいか、等の問題解決に利用できるだろう。

予知の信頼度を高める実験

ビクトル・ミャチキン物理・数学博士

わずか15年前、多くの学者の間には地震予知は資金をむだ使いする試みであるとの意見があった。地震予知を口にすることさえ不謹慎と考えられていた。それにもかかわらず、わが国では一九六五年にミハイル・サドフスキー・アカデミー会員のイニシアチブにより決定的な一歩が踏み出された――広範な野外観測や大規模な室内実験をふくむ計画が作成されたのである。

現在、ソ連と米国では、き裂の発達によって地震のエネルギー蓄積過程を説明するモデルが採用された。事実、変動の予想される地殻の一部分に生じたき裂の数はある時期から急激に増える。この事情は、予知方法の一つを作成するための基礎になるかもしれない。

全体としてき裂の発達過程はかなり長く続く。だが、いったいいつ地震そのものが起こるのか？地震発生が近づいたという前兆になるのは何か？き裂形成の変化曲線を精密に分析すれば、曲線上にいくつかの飛躍を発見できる――その飛躍がまもなく地震が起こるという警報になるのである。

残念ながら、実際にはこの方法はそんなに簡単に使えるものではない。き裂が生ずる地帯の広さは、将来の地震の時に生じる破壊の広さとほぼ一致する。起こりうる地震の地域全体を観測網によってカバーすることは簡単だろうか？き裂が生ずることも、岩石の特性の相違により必ずしも音響学的に一様に探知できるわけではない。だから、このような予知方法はいつでも役に立つとはかぎらない。

その信頼性を高めるために、地球物理学研究所やその他の研究所では特別な実験が行われている。実験では各地の地震多発地帯から岩石の標本をとり、シリンダーに入れ、圧搾機にかける。シリンダーには大きな全面的圧力と一面的な圧力がかかる。実験の過程でこの標本のあらゆる音響パルス、弾性波の伝搬速度、その他の特性が記録される。それによって岩石の一定の組成の地区、つまりその岩石の標本をとった地区にとっての地震の前兆の特殊性を研究することができる。

他の実験では二つの大きな花崗岩のブロックを取り、その間の狭いすき間に石英砂を入れる（自然の条件に似せて）。圧力が増す、つまりストレスが増すとともに、ブロックの間に一面のき裂ができる。これらのき裂は主要な地すべり、大きな爆発的破壊に先行する。これは理論的モデルと震源地帯の実態との大きな相似性を示している。

予知だけでなく予防も可能

ミハイル・サドフスキー地球物理学研究所長・アカデミー会員

すでに認められているように、予想される地震のエネルギーが大きければ大きいほど、広い地域から情報を集めることが必要である。しかしたとえば中央アジアは全域が構造地質学上活発

な地方で、約一〇〇万平方kmにおよんでいる。このような面積から入ってくる情報の保管だけでも（情報処理については言うまでもない）、けっして簡単な問題ではない。単にあれこれのパラメータをどこかで測定することが必要であるだけでなく、選定した場所ごとに数日、数週間、数カ月、このパラメータを短い間隔で測定する必要があるからである。

自然はきわめて複雑で、その現れにおいて多種多様である。たとえば岩石の電気抵抗は、地殻におけるストレスのなんらの増大なしに大きく変わることもある。たとえば豪雨が過ぎ去ったあと、計器のすべての示度が狂い出したこともある。ボーリング孔内の水位やその他のテストでも同様である。深部のプロセスによって生じた変化と他の原因によって生じた多くの類似現象とを区別する方法を開発しなければならない。

予知……これは純科学的見地からとくにむずかしいだけでない。これはまた道徳的、物質的責任の重大さでもある。学者たちを信頼し、危険地帯からの住民の疎開が始まる。修理用資材が準備され、緊張が高まる。送電線はどうする——しゃ断すべきか？　ガスの供給はとめるべきか？　工場は操業を中止すべきか？　だがもし地震が起こるまでの期間が長かったら、あるいは全然地震が起こらなかったら、このような予防手段にどれほどの費用が浪費されるだろうか？

それでもすでにソ連の学者たちは大胆にも地震予報を公表したのである。ある狭い地域に中規模の地震が起こるという予報が一九七六年にタジク共和国で二度出された。現地当局は、老朽建物に住む人々を移転させ、修理用建設資材を準備するなどの措置を講じた。二回とも、地震学者が予報したように、ちょうどその場所で地震が起こった。繰り返して言うが、予報はきわめて局限された狭い地域について行われたのである。

もしわれわれが中央アジアの大地震を予報することを試みたとしても、率直に言って、今日ではその予知はできないだろう。

それでもわれわれは地震を予報する原則的な可能性を少しも疑っていない。地震分布図は年々ますます詳しく、正確なものになっている。なぜなら地球のさまざまな地域の地質構造にかんする知識はますます増えているからである（ついでに言うと、一九三〇年の初めに地震分布図を最初に作成したのはソ連の地球物理学者たちであった）。たえず観測している地震観測所からの情報量も増えている。研究方法、観測技術、実験所の設備も改善されている。最初は図に地震が発生する地方だけが記載され、次いでどんな強さの地震かが記載されるようになった。しかし現在の図には、予想される地震の頻度も示されている。なお、この地震の頻度はきわめて重要である。実際、クリミアとカムチャツカとを例にとってみると、震度では大体同じだが、カムチャツカでの地震の回数は数百倍多い。施設の設計・建設関係者はなによりもこの事情を考慮に入れなければならない。

観測網の整備

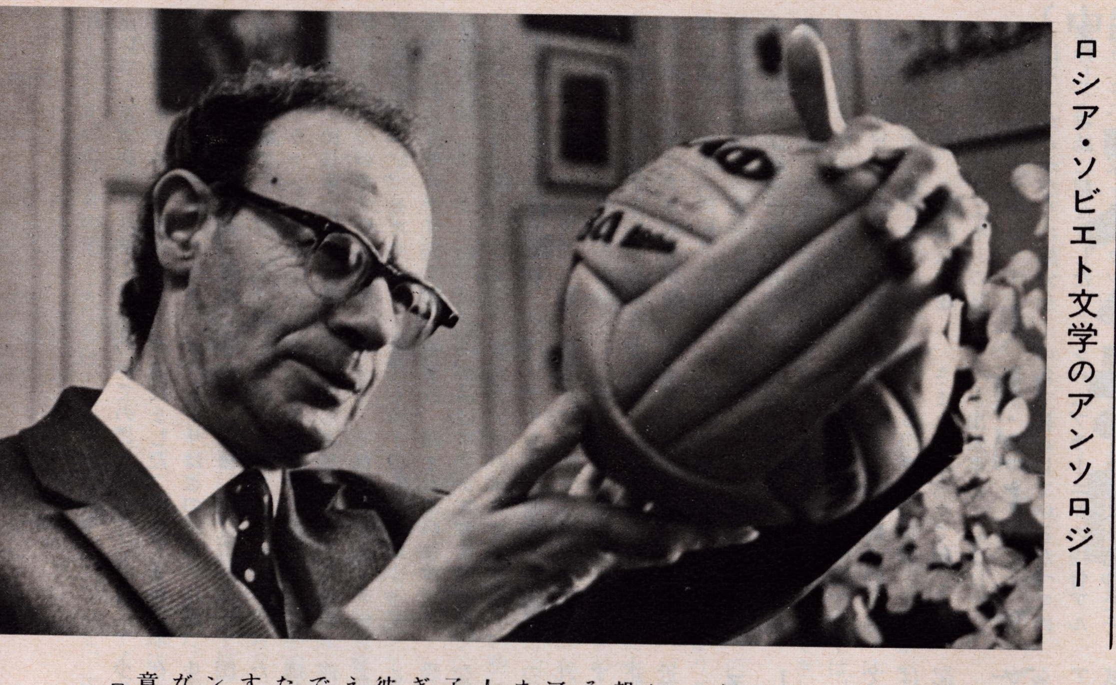
ガルム実験場以外に、現在カザフ共和国のアルマアタ近郊タルガルと、保養地ボロボエの近くの観測所で広範な研究と観測が行われている。ソ連の構造地質学上活発な地域に配置されている二一五カ所の地震観測所も情報を集めている。見通しについて言えば、今後数年間に、われわれはカフカズ、中央アジア、極東で、近づいている地震をかなり確実に予報できるような観測所網を持つだろう。ここで肝心なのは、数日内の精度をもって地震の発生を予知できる〝短期的前兆〟をこれらの観測所網によって明らかにできるという期待があることだ。

なぜわれわれは地震予知の仕事の成功をこのように確信しているのか？　理由は簡単だ。われわれは将来のことを思うと同時に、過去の経験も忘れないからだ。例を挙げよう。かつてソ連の地球物理学者は地震が起こる前に震源地帯での弾性波の伝搬速度に変化が生ずることを認めた。当時米国の地球物理学者はこの説にたいして懐疑的態度をとった。のちにかれらは米国の構造地質学上活発な場所でこの効果を探求することに決め、それを発見し、結局は最初の発見者に劣らぬほどこの前兆を確信するに至ったのである。私がこれを思い出したのは、地震予知学にたいし根強い疑問を持っている学者が現在でもまだ少なからずいるからである。もちろん、一〇〇%予知できるようになると断言することは軽率だが、しかしもしこの方向で何もしないならば、予知の可能性はゼロに近いのである。

ここからもう一つの問題が論理的に出てくる。すなわち、もしわれわれが予知の技術を手に入れたなら、迫りくる脅威と積極的にたたかうことができないか、ということである。もちろん、地下のストレスを取り除き、地震を防止するなどということを考えるのは単純すぎる。そうではなくて、予め選んだ時間に地震を起こすか、事前に犠牲を防止し、起こりうる損害を少なくするためにあらゆる措置を講じようと試みることなら、話は別である。将来このような構想が検討されるようになることは請け合える。たとえば深いボーリング孔を掘り、大きな圧力のもとで水を注入することによってストレス地帯に働きかけることができる。このようにストレスを危機的な状態にまで導き、地球内部で所定の時間内に変動を引き起こすことができるかもしれない。しかしこれはみな将来のことである。われわれの目標はいまのところ予知である。予知への道は険しい。しかし研究領域は日一日と拡大している。地震と文字通りたたかうことができると言える日がくると私は信じている。

レフ・カッシーリ

ロシア・ソビエト文学のアンソロジー



文芸批評家　エブゲニー・シードロフ

レフ・カッシーリ（一九〇五—一九七〇）の作品はすべて、少年少女のために書かれています。とはいえ、大人が読んでも、十分に楽しめるものです。子どものためのすぐれた作品は、そうあるべきなのでしょう。そのような作品は私たち大人に、私たちもまた子どもだったことを思い起こさせ、人生の充実感をよみがえらせてくれます。

ファシズムとの戦争の時代に、カッシーリは中編『わが親愛なちびっ子たち』を書き、その中で、遠い銃後のボルガ河畔に住む子どもたちを描きました。子どもたちは早く大人になったのに、相変わらず子どもで、空想や遊びやおとぎ話のことが忘れられません。彼らはみんな、自分たちが考え出した国シネゴリアの市民で、シネゴリアでは善と悪のたたかいが行われているのです。子どもたちは自分をコマンドスと呼び、虹と矢とアサガオの若芽を描いた独自の紋章を持っています。

『わが親愛なちびっ子たち』は、読者にたいする作者の意味深長な呼びかけで終わっています。それは次のようなものです。

「いまでもしばしば、仕事がうまくいかなかったり、心が晴れないときに、私は小さな、大切な鏡を取り出す。そのフタにはコマンドスたちの紋章——虹と矢とアサガオの若芽がついている。私は割れたガラスをのぞく。鏡は慰めになるようなものを何一つ映してはくれないが、私の肩ごしにはすでに、小さからぬ生命が私を見ている。私は、この世で暮らすのがそれほど悪くないことを知り、ふたたび、向かい風がどんなに頑固であろうと、雷雨がどんなに煮えくり返ろうと、勇気、信念、勤勉が必ず勝利することを確信する。ふたたび虹がかかり、世界を包む。そしてすべてがよくなり、すべてがしかるべきようになるだろう、わが親愛なちびっ子たち！」

カッシーリの作品の中ではつねに、ロマンチシズムがまじめな現実とからみ合っています。作者と同様、その幼い主人公たちも、創造的な空想力を持っています。主人公たちは通常、われわれみんなが目にし、知っているこの地上と、空想の国という二つの尺度の中で暮らしています。

カッシーリの作品の中のおとぎの国は、シバムブラーニヤ、シネゴリア、ジュンガホラ、未来の国など、さまざまな呼び名を持っています。カッシーリは自分が考え出した土地について、こう書いています。

「私がこの世にない国を〝発見〟したのは、私にとってこの世でそれ以上貴いものはない国——血をわけたわれわれのソビエトの地を、私の読者にもっと強く愛してほしいからである！

そしてこれらすべての国、旗、地図、紋章……は、諸君が参加する本物の生活のこだま——空想上の、しばしば腕白で嘲笑的な、ときには物思わしげなこだまにすぎない。私は、私やきみたちの夢が、見えない国という遊びが、生活の中でわれわれにいちばん大切なものをもっとよく理解し、感じる助けになってほしいと思っている」

レフ・カッシーリはボルガ河畔のエンゲルス市（かつてのポクロフスカヤ村）で生まれました。父親は医者、母親は音楽の教師でした。一九一七年まで、カッシーリは中学校で学び、10月革命後は労働学校で、つづいてサラトフの工芸大学で学び、モスクワへ移ってからはモスクワ大学物理数学科に入学しました。

作家カッシーリ誕生

一九二八年にこの若き数学専攻者は、有名な詩人ウラジーミル・マヤコフスキーが編集していた雑誌『新レフ』（新左翼戦線）へやって来ました。カッシーリは最初の自伝的中編『えんま帳』を持って来たのです。それは、帝政時代の中学校とソビエト時代の労働学校での勉学の歳月についての物語でした。この陽気で聡明な本はマヤコフスキーの気に入りました。マヤコフスキーはそこからかなりの部分を抜粋して雑誌に載せました。こうして、作家レフ・カッシーリが誕生したのです。ときにカッシーリは23歳でした。『えんま帳』につづいて第2の自伝的中編――幼年時代についての『シバムブラーニヤ』が現れました。一九三五年にカッシーリはこの二つの作品を一つにしました。恐らく『えんま帳とシバムブラーニヤ』は、カッシーリの作品の中でもっともポピュラーなものでしょう。それはソビエトの何世代もの子どもたちによって愛され、読まれています。この作品はフランス、アメリカ、ポーランド、ユーゴスラビア、ハンガリーその他多くの国で訳されています。

この本の扉に書かれている文句は、たちまち小さな読者を引きつけます。

「**『えんま帳とシバムブラーニヤ』**

正義を探しているうちに〝大きな歯〟大陸で**大シバムブラーニヤ国**を発見した二人の騎士の珍奇きわまる出来事の物語、さまよえる島々で起こる驚くべき出来事と、いまは**レフ・カッシーリ**の名で暮らしているかつてのシバムブラーニヤの提督アルデリャル・ケイスが語ったその他多くのことがら、

秘密文書、海図、国章、個人の旗もどっさり付いている」

〝二人の騎士〟――レーリカ少年とその弟オーシカは、実在の人物です。カッシーリは生涯、弟といっしょに考えた国の地図を大切にしていました。中学校の生徒たちは、教師や監督係が生徒たちの規律違反を書き込む学級日誌を、えんま帳と呼んでいました。えんま帳に名前が載るのは、恐ろしいことでした。屈辱的な罰が待っているからです。一九一七年の革命的な諸事件ののちすぐに、生徒たちは晴れてえんま帳を廃棄したのです。こうして革命は、偉大な正義の国シバムブラーニヤに近づきつつありました。

スポーツ記者としても活躍

レフ・カッシーリはスポーツが好きで、新聞や雑誌にしばしば、スポーツについての記事を書きました。

カッシーリはソ連のスポーツ選手たちといっしょに、多くの国をまわり、サッカーやアイスホッケーの国際選手権試合を取材したり、オリンピック大会についても語っています。カッシーリのスポーツ記録文学はいまでもなお、その手腕、輝く文体、話の運びにおいて、だれにも負けない手本となっています。スポーツを扱った中編『共和国のゴールキーパー』『白の女王の動き』『剣闘士の酒杯』の中で、作家はスポーツの精神的充実について思いをめぐらしています。カッシーリは、人間はその肉体的長所が道徳的完成や精神の豊かさと調和的に結合しているときこそ、すばらしいものであり、幸福である、と主張しています。

カッシーリはつねに、お説教することなく、少年少女に愛国主義、高潔さ、騎士道精神を見事に教えています。作家自身もまた、これらに従って生きようと努めました。

晩年にカッシーリは、興味深い中編『ご用意下さい、殿下！』を書きました。これは、クリミアのピオネール・キャンプで夏を過ごす実在しない国の王の後継者デリフヤル王子についての、こっけいな冒険物語です（〝用意せよ！〟はピオネールの合言葉）。架空の国ジュンガホラの小さなデリフヤル王子は、初めて、社会主義の世界の社会的、道徳的規範と出くわします。これは、こっけいだが、まじめな本です。ここでは、生活についての、祖国にたいする人間の責任についての、あらゆる暴虐や専横とたたかうことの重要性についての深い考えが随所に見られます。

あるアメリカの読者がカッシーリに手紙を送り、その中で、自分も息子も、シバムブラーニヤについての本を愛読している、と書いてきました。手紙には次のような注目すべき個所がありました。

「大西洋のこちら側の多くの人間がシバムブラーニヤとなじみ深ければ、われわれはもっとよく互いに理解し合えるだろうに」

ヒューマニスト作家のすべてのすぐれた作品は、本質的には、このような期待を抱かせます。それは、諸国民間の理解のかけ橋です。レフ・カッシーリの作品も、そうしたものの一つです。

みなさんがどんな年齢であれ、本号に紹介する中編『えんま帳とシバムブラーニヤ』の最初のいくつかの章を、ぜひお読みになることをお勧めします。

☆　☆　☆

〔中編抜粋〕

えんま帳とシバムブラーニヤ

火山によってできた国

レフ・カッシーリ
山田　はじめ　訳

発　見

一四九二年10月11日の夜、クリストファ・コロンブスは航海の68日目に、遠くに動く光を認めた。コロンブスは明かりに向かって進み、アメリカを発見した。

一九一四年2月8日の夜、ぼくと弟は罰のため、部屋の隅に座らされていた。弟は小さいからというので、12分目に許された。だが彼は、ぼくを置き去りにすることを拒み、ぼくの罰がすむまで、部屋の隅にとどまった。それから数分後、ぼくたちは思案深げに、しげしげと、鼻の奥を調べていた。3分後に鼻がすっかりきわめつくされたとき、ぼくたちはシバムブラーニヤを発見した。

消えた女王、あるいは貝がら洞くつの秘密

すべては、女王が消えたことから始まった。女王はまっ昼間に姿を消し、日も暮れかけた。身の毛もよだつほど恐ろしいのは、それがパパの女王だったということだ。パパはチェスに凝っていた。ところで女王は、知ってのように、チェス盤の上できわめて有力な駒だ。

消えた女王は、パパの特別注文でロクロ師がつくったばかりの、新しいセットのものだった。パパはその新しいセットを、ひじょうに大切にしていた。ぼくたちは、駒にさわることを厳しく禁じられていた。だが、がまんするのはこの上なく困難だった。みがきをかけられたニス塗りの駒は、きわめて多様な、魅力的な遊びに無限に利用できそうに思われた。

たとえば歩（ポーン）は、兵隊ごっこやナインピンズ（九柱戯）にはうってつけだった。駒は床みがきのように滑らかに歩いた。円形の底部にラシャ布が貼ってあったからだ。城（ルーク）の駒は脚つき杯に、王様はサモワールか将軍に見立てられた。士官（ビショップ）のカブトは電球に似ていた。白黒一組ずつの桂馬（ナイト）は、ボール紙の馬車につないで、辻馬車待合所や回転木馬を始めることもできた。ブロンドとブルネットの二人の女王は、特に便利だった。女王はそれぞれ、ヨールカや辻馬車、中国風の寺院の塔、台に乗った花びん、僧正の代わりをつとめることができた。いや、どうして駒にさわらずにいられただろう。

この歴史的な日に、辻馬車屋代わりの白の女王は、黒の桂馬で、僧正代わりの黒の女王を、将軍代わりの黒の王様のところへ運ぶ役をおおせつかった。彼らは出かけた。将軍代わりの黒の王様は、僧正代わりの女王をひじょうに手厚くもてなした。将軍はサモワール代わりの白の王様をテーブルに据えると、歩たちに寄木細工の床をみがくよう命令し、電気の士官たちに点灯した。彼らは城の駒の杯を二つずつ飲み干した。

サモワール代わりの王様が冷え、遊びも退屈になったので、ぼくたちは駒を集め、それをもとの場所にしまおうとした。すると、ああ恐ろしい！　黒の女王が消えてしまったことに気づいた。ぼくたちは膝小僧をすりむかんばかりにして床を這いまわり、いすや机や戸棚の下をのぞいた。すべてはむだだった。女王は跡かたもなく消えていた。

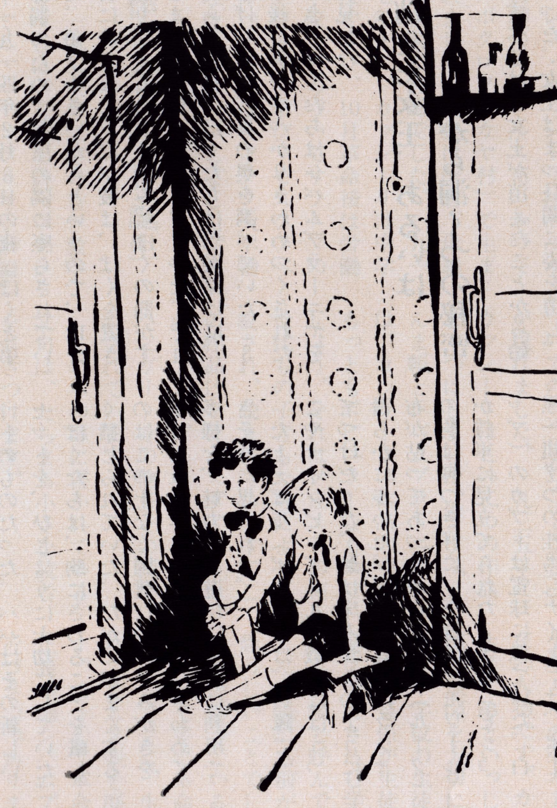
ママに知らせなければならなかった。ママは家中それこそくまなく探した。だが、みんなで探しても、何にもならなかった。ぼくたちの散髪した頭の上に、避けられない嵐が迫っていた。

パパが帰って来た。

もちろん、大荒れだった！　それも何という嵐！　旋風、暴風、サイクロン、砂嵐、竜巻、台風が、ぼくたちに襲いかかった！　パパは荒れ狂った。熊でさえ教えれば物の価値を知り、それを大切に扱うことを覚えるのに、と言った。ぼくたちには強盗のような破壊本能が備わっているとどなり、そのような本能と文化破壊主義にはがまんならないと叫んだ。

「2人とも、隅へ行け！　野蛮人どもめ！」とパパはあげくの果てに叫んだ。

ぼくたちは顔を見合わせて、仲よく泣き出した。



「ぼくのパパがこんな人だと知ってたら、ぜったいに生まれて来なかったのに！」とオーシカが泣き叫んだ。

ママもまた、さかんに目をしばたたかせ始めた。だが、涙もパパを静めることはできなかった。ぼくたちは〝薬局〟へ出かけた。

わが家ではなぜか、洗面所と台所のわきの、通り抜けできる薄暗い部屋が〝薬局〟と呼ばれていた。小さな窓があり、そこにびん類が立ち並んでいた。恐らくそれが、呼び名の起こりだったのだろう。〝薬局〟の一隅には〝被告席〟という名で知られる小さなベンチがあった。というのも、医者であるパパが子どもたちを隅っこに立たせておくのは非衛生的だと考えて、立たせずに、座らせたからだ。

ぼくたちは見せしめのベンチに座っていた。〝薬局〟では牢獄さながらの薄やみが青ずんできた。

オーシカが言った。

「パパがどなったのは、サーカスのことだよ……サーカスの熊なら、物を扱えるものね？」

「そうさ」

「野蛮人というのも、やっぱりサーカスのこと？」

「野蛮人っていうのは、強盗のことさ」とぼくは悲しげに説明した。

「ぼくもそう思ってたんだ」とオーシカは喜んだ。「かせをはめられた人たちだね」

闇が濃くなった。不幸な日は終わった。地球は太陽に背を向け、世界もまた、ぼくたちにその一番うらめしい面を向けた。地理で習ったところによれば、世界はとても大きかった。だが、子どものための場所は、そこには割り当てられていなかった。世界の五つの部分を全部、大人が占めていた。大人たちは歴史を切りまわし、馬で駆け、猟をし、船隊を指揮し、タバコを吸い、本物をつくり、戦い、愛し、人を救い、盗み、チェスをやっていた。なのに子どもたちは、隅っこに立っていたのだ。大人たちはきっと、自分が子どもだったころの遊びや、子どもだったころ読んだ本を忘れてしまったのだ。忘れてしまったにちがいない！　そうでなきゃ、ぼくたちが通りでみんなと遊んだり、屋根にのぼったり、水溜りでぴちゃぴちゃやったり、王様の駒をサモワールに見立てるのを許してくれただろう。

ぼくたち二人は隅っこに座って、そんなことを考えていた。

「逃げようよ！」とオーシカが言い出した。「一目散に！」

「逃げな、だれもおまえをとめないよ。でも、どこへ逃げるんだい？」ぼくはもっともらしく反論した。「どこへ行っても大人ばかり……ところが、おまえは子どもだ」

すると突然、目も覚めるような考えが頭に浮かんだ。それは〝薬局〟の暗がりを、稲妻のように貫いた。どこへも逃げる必要もなかった。約束の地はここに、ぼくたちの近くにあったのだ。それは、考え出しさえすればよかった。ぼくはすでにそれを、闇の中に見ていた。ほら、あそこの洗面所に通じるドアのところに……ヤシの木や船や宮殿が……山々が見える……

「オーシカ、陸地だ！」ぼくは息をはずませて叫んだ。「陸地だ！　生涯にわたる新しい遊びだよ」

オーシカはさっそく、自分のための将来を確保した。

「いいね、ぼくが汽笛を鳴らすよ……ぼくは機関手だ」とオーシカが言う。

「で、何ごっこをやる？」ぼくたちはこれから、毎日家で暮らすだけでなく、国でも暮らすんだ……ぼくたちの国で！　さあ、部署につけ！　国を発見するところだよ。とりかじ！　タラップを下ろすぞ」

「とりかじ！」とオーシカが答える。

「ドゥーウーウー！」

「静かに！」ぼくは命令する。「速度をゆるめろ。蒸気を抜け！」

「シュー、シュー、シュー」オーシカは速度をゆるめ、蒸気を抜きながら、音をまねて出した。

こうしてぼくたちは、ベンチから新しい国の岸へ降りた。

「この国を何と名づけようか？」

そのころぼくたちが愛読していたのは、シバブの『ギリシャ神話』だった。ぼくたちは自分たちの国を〝シバブラーニヤ〟と名づけることにした。しかしそれは、床を洗うモップ（ロシア語でシバブラ）を思い出させた。そこで、ぼくたちは〝ム〟を加え、ぼくたちの国は〝シバムブラーニヤ〟、ぼくたちはシバムラーニヤ人と呼ぶことになった。これらすべては、極秘にされておかなければならなかった。

まもなくママが、ぼくたちを軟禁から解放してくれた。ママは自分が大シバムブラーニヤ国の二人の国民を相手にしているなどとは、知るよしもなかった。

1週間後に女王が見つかった。ネコがそれを箱の下のすき間へ転がし込んでしまったのだ。そのときまでにはロクロ師が、パパのために新しい女王をつくっていた。したがって女王は、完全にぼくたちのものになった。ぼくたちはそれを、シバムブラーニヤの秘密の守護者にすることにした。

ママの寝室のテーブルにある鏡のうしろに、みんなに忘れられた、貝殻でできた美しい洞くつがあった。小さな銅製の格子扉が、快適な洞くつへの入口を閉ざしていた。それは空っぽだった。ぼくたちはそこへ、女王を幽閉することにした。

ぼくたちは紙に三つの文字――V・T・S（シバムブラーニヤの大秘密の頭文字）を書き抜いた。

女王の底のラシャ布をちょっとはがして、ぼくたちは、そこに紙を押し込み、女王を洞くつに納めて、扉を封ろうで軽く封印した。女王は永遠に幽閉されることになった。女王のその後の運命については、あとで話そう。

遅まきの序文

シバムブラーニヤは火山でできた国だった。灼熱した力が地球の内部であばれている。固まった地殻がそれを押さえつけている。しばしばそれは地殻をつき破り、そのとき深海から新しい陸地が顔を出すのだ。

シバムブラーニヤは火山でできた陸地だった。

灼熱した、熱した力が、ぼくたちの内部であばれていた。

古い家族とか社会の凝固した、硬化した制度がそれを押さえつけていた。ぼくたちはたくさんのことを知り、さらにたくさんのことをできるようになりたかった。だが、当局はぼくたちに、中学校の教科書やくだらない伝説の中にあるものしか知ることを許さず、ぼくたちにはまったく何もできることはなかった。

それをぼくたちはまだ教えられていなかった。

ぼくたちは、大人たちと同等に生活に参加したかった。ぼくたちには、兵隊ごっこでもするように、と言われた。

そうでなければ、親や教師や巡査が干渉した。

大勢の人間がロシアに住み、通りを歩き、おもてにひしめいていた。

だが、ぼくたちがつき合うことができたのは、支配者や教育者の気に入った者だけだった。

ぼくたちは世界の大きさに魅せられていた。

世界は大きくて広かった。すき間風が極から極へと吹き抜けていた。

快適な家があるのなら、家にいて、口出しするんじゃない、きみたちは理想を達成したんだ、とぼくたちは教えられた。

こうしたことすべてが、よい子の教育と呼ばれていた。

ぼくたちの中で熟していた力は、教育の殻をただちに破ることはできず、本物の噴火をただちに起こすことはできなかった。当時、ぼくたちにはまだ、出口が分からなかった。ぼくたちは、やみくもに突き進み、小規模な室内地震を起こしていた。こうして、火山によってできた国シバムブラーニヤが大きくなっていった。

だが、本物の歴史上の噴火口はもちろん、この遊びの国にはなかった。

ぼくと弟は何年かにわたって、シバムブラーニヤで遊んだ。

ぼくたちはそれに、第2の祖国のようになじんでいた。それは強大な国だった。

厳しい乳母であり、すばらしい教育家、すぐれた教師である革命だけが、ぼくたちが古い愛着を粉々に打ち砕くのを助けてくれた。こうしてぼくたちは、シバムブラーニヤの虚妄の故郷をすてた。

ぼくは〝シバムブラーニヤ文書〟やシバムブラーニヤ軍事計画地図、国旗や国章の図を保存していた。

これらの資料や記憶をもとに、小説さえ書かれた。ついでながら、そこではシバムブラーニヤの歴史が語られており、シバムブラーニヤ人の旅行や、この国でのぼくたちの冒険その他多くのことが書かれている。

だが、物語の本質は、決してそんなところにあるのではない。

遊びは、戦争、いつわりの英雄主義、小市民的な理想、奇形的な教育、革命、社会性への渇望、起こっていることを解明しようという試み、新しい学校の誕生、混乱の歳月、古い家庭の崩壊など、現実の中でおこったことのすべて、当時ぼくたちの子どもっぽい頭の中を満たしていたもののすべてにわたっていた。

したがって、実際にはなかったシバムブラーニヤについてのこの物語は、何よりもまず真実な、いくらか腕白な、だが虚構ではない、実際に起こった革命についての、まったく真実な物語なのである。

地理

大地がかしいでいることが納得できるだろう、自分の

尻に乗って、駆ければ。
マヤコフスキー

あらゆる国と同じく、シバムブラーニヤも、地理、気候、植物相、動物相、住民を持っていなければならなかった。シバムブラーニヤの最初の地図を書いたのは、オーシカだった。彼はある歯医者の広告から、3本の根のついた大きな歯を模写した。その歯は、チューリップかニーベルンゲンの王冠、あるいはシバムブラーニヤの頭文字〝Ш（シャー）〟の字に似ていた。この一種のシンボルを見ているのは、誘惑的だった。だから、ぼくたちは見入っていた。それはシバムブラーニヤの英知の歯だった。シバムブラーニヤは、歯の形をしていた。大洋には島やしみがちらばっていた。しみの近くには、「島は無数にある、このしみはうっかりつけたもの」という正直なことわり書きがあった。歯のまわりには大洋が広がっていた。オーシカは大洋の上に荒々しいジグザグを書いて、それは〝波〟であると証言した。それから、地図には〝海〟が描かれ、海の上では1本の矢印が〝潮流〟の方向を示し、もう1本の矢印が〝逆流〟を表わしていた。さらに〝なぎさ〟や弦のように伸びたハリマ川、首都シバムブラーナ、アルゴンスク市とドランゾンスク市、入江、〝外国〟、〝向こう岸〟、埠頭、山、そして最後に〝地球が丸くなる場所〟があった。

足もとの地球の湾曲が、オーシカを大いに手こずらせた。彼はみずから、地球が丸いことを無条件に納得しようと努めた。

さらによかったのは、当時ぼくたちがマヤコフスキーを知らなかったことだ。そうでなければ、オーシカのズボンはだめになっていたことだろう。なぜなら、彼は地球が傾いていることを自分のお尻で試しただろうからだ。だがオーシカは、別の証明手段を見つけ出した。シバムブラーニヤの地図を仕上げるまえに、彼は意味ありげな顔をして、わが家の門の外へぼくを連れて行った。納屋のそばに、何かを丸く積んだものの跡が、地面からかすかに盛り上がっているのが見えた。それは、小礼拝堂のための土台でもなければ、花壇でもなかった。ときが、この土の盛り上がりをほとんど平らにしていた。オーシカは顔を輝かせながら、ぼくをそこへ連れて行き、もったいらしく指で示した。

「ほら」とオーシカは言った。「地球が丸くなる場所だよ」

ぼくはあえて反論しなかった。地球が、まさにここで丸くなっているかもしれないからだ。だが、弟に負けないために、ぼくは言った。

「これが何だい！　ぼくなんかサラトフでも1個所見たぞ。あそこじゃ、これほど丸くはなっていなかったけど」

ぼくたちのシバムブラーニヤは、地図の上で驚くほど左右対称だった。どんな装飾図案も、シバムブラーニヤの厳密な輪郭にはかなわなかっただろう。東側にも、山と都市と海があった。西側には、山と都市と海があった。左手に入江があれば、右手にも入江があった。このシンメトリーは、シバムブラーニヤ国がその上に打ち建てられた、そしてぼくたちの遊びの基盤となっていた、あの高まいな正義を実現していた。最後の方の章でようやく善が勝利し、悪が踏みにじられる書物とちがって、シバムブラーニヤではそもそもの初めから、英雄は報われ、悪人は亡ぼされた。シバムブラーニヤはこの上なく具合のいい、ぜいたくなまでに完ぺきな国だった。その地理には、なめらかな線しかなかった。

左右対称は線の釣り合いであり、線の公平さである。シバムブラーニヤは高度に公平な国だった。すべての富が、地理的な条件さえもが、釣り合いよく配置されていた。左に入江があれば、右にも入江があった。西にドランゾンスク市があれば、東にアルゴンスク市があった。きみに1ルーブルあれば、ぼくにも1ルーブルある。公平。

歴史

いまや本物の国家にふさわしく、シバムブラーニヤは歴史を持つ必要があった。遊びの半年は、シバムブラーニヤの歴史の数世紀に相当した。

すべてのちゃんとした国の歴史は、教科書が教えていたところによれば、主として戦争から成っていた。シバムブラーニヤは急いで戦いに取りかかった。だが、そもそも、戦うべき相手がいなかった。そこで〝大きな歯〟大陸の下部に、二つの半円を切り取らなければならなかった。その周囲に〝柵〟が書かれた。仕切られたところには二つの敵対する国家——カリドニヤとバリボニヤが生まれた。カリドニヤの名はカルドゥーン（魔法使い）とカレドニヤの語から、バリボニヤの名はバルバン（でくの坊）とボリビヤの語からとった。バリボニヤとカリドニヤのあいだには、平らな場所があった。それは戦闘のために特にしつらえられたものだ。こうして、地図にも「戦争」と記入された。〝戦争〟というこの陰気で脂っこい言葉を、間もなくぼくたちは新聞で見た。

ぼくたちの頭の中では、戦争は特にしっかり突き固められた、練兵場のようにきれいに掃き清められた広場で行われた。地球はそこでは曲がっていなかった。平らで、なめらかな場所だった。

「戦争全体が歩道でおおわれているんだ」とぼくは弟に言いきかせた。

「戦争にはボルガはあるの？」とオーシカが興味を持った。

彼にとって〝ボルガ〟は、すべての川を意味していた。戦争の両側には捕虜がいた。負けた兵隊たちが、そこに集められるのだ。地図の上にはまたしても「捕虜」という三つ目のことわり書きが記入された。

シバムブラーニヤでは、戦争は次のようにして始まった。郵便配達人が、シバムブラーニヤの皇帝が住んでいる宮殿の正面入口で呼びりんを鳴らす。

「皇帝陛下、サインをお願いします。書留です」

「どこからだ？」

エンピツの芯をなめながら、皇帝が驚いてたずねる。（配達人はオーシカで、ぼくが皇帝）

「筆跡は見覚えがあるようです。多分、バリボニヤからです。あちらの皇帝からでしょう」と配達人。

「カリドニヤからは手紙は来なかったか？」と皇帝がきく。

「来ています」と配達人が、ぼくたちのところの配達人ネボーガをそっくり真似て（うちに手紙は来ていないかときかれると、彼はいつも〝来ています〟と言う）、確信を持って答える。

「妃、ヘアピンを貸せ！」と皇帝がどなる。

ヘアピンで封筒を開けると、シバムブラーニヤの皇帝は読み上げる。

「親愛なるシバムブラーニヤの皇帝どの。

いかがお暮らしかな？　こちらはおかげで、つつがなくやっている。きのう、当方では強い地震が発生、火山も三つ噴火した。そのあとさらに、宮殿でひどい火事があり、ひどい洪水もあった。先週には、カリドニヤとの戦争が起こった。しかし、余は敵をことごとくやっつけて、全員を捕虜にした。なぜなら、バリボニヤ人はみんな勇敢で、英雄だからだ。だが、シバムブラーニヤ人はみんな馬鹿で、ろくでなしで、非文化的である。だから余は、おまえたちと戦いたい。余は神の慈悲によって、新聞でおまえたちに宣戦を布告する。出て来て戦え。余はおまえたちを打ち破って、捕虜にする。戦いに出て来なければ、おまえたちは娘っ子のように腰抜けだ。そしたら余は、おまえたちを軽べつする。おまえたちは馬鹿だ。

皇后と若い跡つぎによろしく。

余みずからの片足で、かかとの押印をする——バリボニヤの皇帝」

これが、ぼくたちの外交言葉だった。ぼくたちはそれを、歴史小説や新聞や召使いたちの会話から集めた。

手紙を読んで、皇帝は怒る。彼は壁から剣を取り、砥ぎ師を呼ぶ。それから彼は、バリボニヤの無礼者に、至急の、仕返しの返電を送る。電報にはこう書かれている——

「あなたを攻める」

ロシア史の教科書では、古代ロシアのヤロスラフ公もスビャトスラフ公も、このような予告は送らなかった。だがバリボニヤの皇帝のようなあつかましい奴を〝あなた〟呼ばわりする必要はなかった。だからシバムブラーニヤの皇帝は腹の中で「あなたを攻める」というのを打ち消して、「おまえを攻める」と書いた。

それから皇帝は、宮廷侍医長のドクトルの往診を求める。

「さて、ごきげんいかがですかな？　おなかはどうですか？」と侍医長が言う。

そのあと皇帝は、御者に言いつける。

「それ！　首尾よくやれ。全速力だ」



こうして戦争に出かける。全員「ウラー」を叫び、敬礼する。皇后は窓から白いハンカチをふる。

言うまでもなく、シバムブラーニヤは百戦百勝だ。バリボニヤは打ち破られ、シバムブラーニヤに併合された。

〝戦場〟を掃除して、〝捕虜〟を調べる間もなく、カリドニヤがシバムブラーニヤに侵入した。カリドニヤもまた征服された。

城壁に小門が設けられ、シバムブラーニヤ人は、日曜日以外いつでも、通行証を持たずにカリドニヤへ行くことができるようになった。

〝向こう岸〟には、地図の上に外国のための場所が割り当てられた。そこには、氷の国の旅人である大胆不敵なピリグギン人——ピリグリム（巡礼）とペンギンの中間的な存在——が住んでいた。シバムブラーニヤ人はピリグギン人と数度にわたって、戦場で出くわした。ここでも、つねにシバムブラーニヤ人が勝利した。だが、ぼくたちはピリグギン人をシバムブラーニヤ帝国には併合しなかった。でなければ、戦う相手がなくなってしまうからだ。ピリグギン人の国は種族保存用として歴史を面白くするために残された。

（さし絵　V・ガリジャエフ）

キエフのレビュー劇場



キエフ・ミュージックホールの座員たち▶



▲ミュージカル〝アラビア数字〟の一場面

「われわれの舞台が観客の好評を呼んでいるのは、フォークダンスや民謡のメロディーを大いに利用しているためだと思う」——こう語るのはウクライナ共和国の首都キエフにあるレビュー劇場〝ミュージックホール〟の舞台監督レフ・シラエフ。

「ミュージックホールの伝統的な形式は土台として受け継いだが、われわれは多くの出し物を陳腐なものにしている常識的な形式は捨てた。第一に、われわれの出し物は一本の脚本で統一されているので個々の番組を自然に、スムーズに組み立てられる。同時に、音楽的な、流れるような叙情から、激しい情熱的な舞台への転換といったように、出し物の性格をひんぱんと急激に換えて、舞台の動きをダイナミックなものにしている。第二に、われわれの群舞では女性ダンサーたちと一緒に男性ダンサーも踊っていること。これによって踊りの場面をいっそうバラエティに富んだものにできる」

古典的なミュージックホールのレパートリーと同じように、ここの出し物も踊りが多い。たとえば、動きを数学的な正確さで見せる『アラビア数字』、洗練された『コンダクター』、そして伝統的な『タンゴ』。老宝石細工師が自分のつくった宝石の胸飾りの上にかがみ込む、と突然それらの宝石がきらきら輝く古代の衣装をまとった娘たちに早変わりする——これは『金の胸飾り』

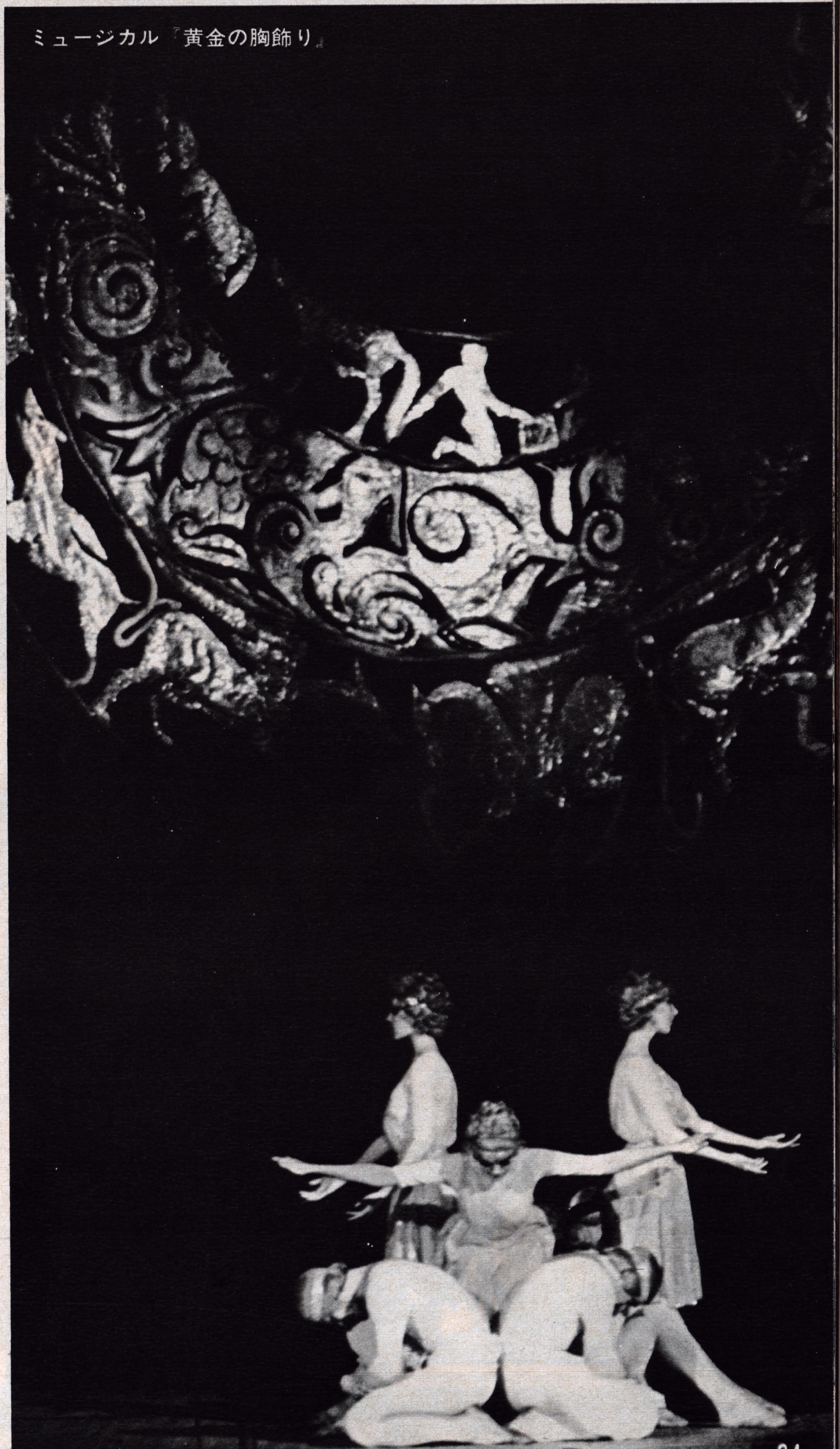
キエフのレビュー



ミュージカル『タンゴ』

キエフのレビュー





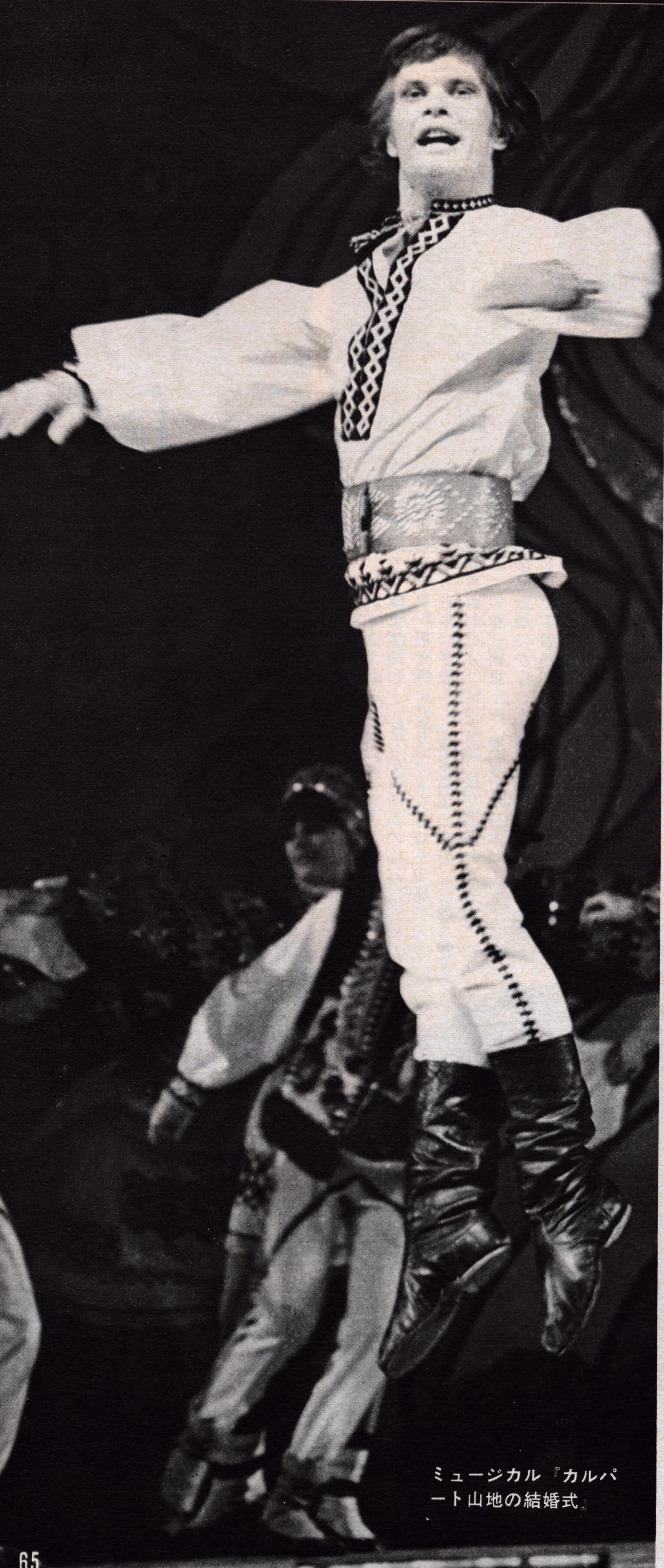
ミュージカル『黄金の胸飾り』



ミュージカル『コンダクター』から

の導入部だ。
　ウクライナのメロディーが流れてきた。舞台は楽しい結婚式の場面。娘たちの周囲を刺しゅうの入った衣装で盛装した若者たちが踊りながら旋回している。輪の中心で新郎新婦が踊っている。『カルパート山地の結婚式』だ。
　この踊りは、婚礼で踊ったり、歌ったりする民謡を素材にして振り付けられたもの。
　キエフ・ミュージックホールのプログラムにはこのほか、ボーカル・アンサンブル、パントマイム、現代ウクライナ作曲家の歌曲の演奏、それに道化芝居なども登場する。
　このミュージックホールは、芸能界でゆるぎない位置を占めるようになった。その舞台はいつも満員で、ソ連国内のいろいろな都市でも公演して大成功を収めている。

カメラ　I・コスチン



ミュージカル『カルパート山地の結婚式』

日本の伝統工芸展
――花と鳥をテーマにモスクワで

マリーナ・ルイクリナ
カメラ　S・ソロビヨフ



日本コーナーに展示された掛け軸

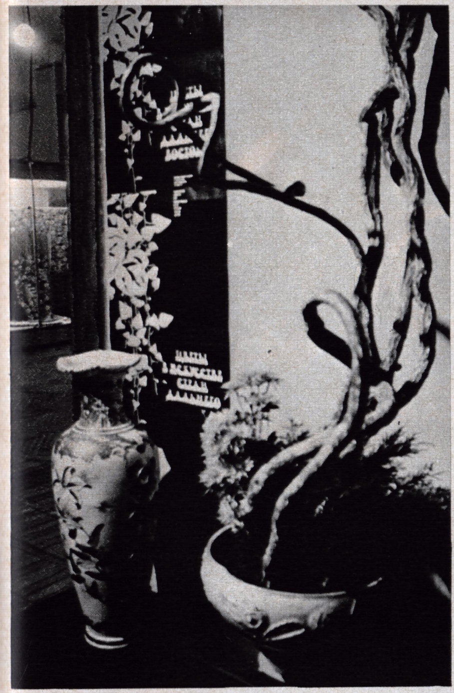
戦後初の日本工芸展がソ連で開催されたのは一九五六年。それ以来ほとんど毎年のように、ソ連のさまざまな都市で、日本の名人たちの芸術作品が展示されている。ソ連の芸術愛好家たちはすでにこれまでに、日本の漆絵、金属細工、竹細工、象牙細工、ガラス工芸品、各種織物、民族玩具、さらには日本の風俗芸術などにも接する機会にめぐまれた。ことしはモスクワの東方諸民族芸術博物館で「極東諸国の芸術における花と鳥」展が開催され、ここでも日本の多数の工芸品が披露された。

モスクワではこの春、極東諸国文化の象徴的表現にかんする、ソビエト東洋学者の学術会議が開かれた。この会議では、さまざまな問題と並んで、文学や美術に反映された花や鳥の諸相という問題が詳しく検討され、会議の終了にさいして、極東諸国の芸術家たちが花や鳥の描写に込めたさまざまな意味を実物で示す「極東諸国の芸術における花と鳥」展が開かれたのだった。

展覧会の日本コーナーには、同博物館の所蔵品のなかから三〇〇点以上が陳列され、そのなかには、ふだんは展示されないものも含まれていた。そのほか、在ソ日本大使館員の協賛出品も行われ、花器、マツやサクラや金色の雲などをあしらった歌舞伎衣装、山口玲熙のケシの絵などが展示された。また竹や石などで構成された〝盆景〟も出品された。

日本コーナーに展示された作品は、すべて19－20世紀のもので、ここには、微細な模様の描かれたいろいろな花器があり、そのおのおのに、たとえば『藪（やぶ）』とか『鶴』などといった象徴的な名前がつけられている。また多種多様な皿、花びん、手箱なども出品され、これらには『秋の草花』とか『夏の花』といった名がついている。今井盛太郎のツバキの花をあしらった漆器、同じく河合秀甫のランの花を描いた漆器なども展示された。渡辺崋山、吉岡堅二、徳岡神泉などといった画家の作品にも広いスペースが割かれた。日本伝統工芸の粋――絹の刺しゅうも出品された。

日本コーナーに出品されたこれらすべての作品は、この国の工芸の大家たちの技術や手法を目のあたりに見せてくれただけでなく、故国の自然にたいするこれら大家の態度をも伝えており、さらには、日本国民の精神世界、その審美観と伝統をも反映していた。ソ連の芸術愛好家たちがこの展示会に示した最大の関心は、ほかならぬこの点に向けられていた。



「極東諸国の芸術における花と鳥」展の入口で



▶花や鳥は日本の工芸品に伝統的な意匠



◀豪華なキモノにモスクワっ子も思わず足をとめる



在ソ日本大使館員が出品した山口玲熙の絵と盆景



日本の伝統美を示す陶器や漆器

友好諸団体機関紙の国際懇談会に出席して

日ソ協会機関紙『日本とソビエト』編集部長代理　長塚英雄

〝我々の新聞、雑誌は、おもしろいものでなければならない。ほんとうのことをいうことだ〟——モスクワの友好会館で、ソ連対文連主催の対ソ友好諸団体機関紙編集者国際懇談会が六月二十日から二十三日まで開かれましたが、参加した各国の編集者の一致するところはこの言葉であったと私は考えています。



仏ソ協会の代表と筆者

とくに、このことは今日の複雑な国際情勢のもとで日ソ友好運動とその機関紙活動を発展させるために非常に大切なことだといえます。現在、日本のマスコミ・ジャーナリズムの論調は国民の対ソ意識の形成に少なからぬ影響を与えており、ジャーナリズムの一部は、はげしい反共・反社会主義宣伝と結びつけて報道しているものがあります。

従って、日ソ協会など対ソ友好団体の機関紙は、今までより一層ソ連の情報をよく分析し、読者の満足するきめこまかな編集をすることが大きなポイントとなってきているといえます。こうしたことは、日本に限らず各国の共通の問題でもあると思います。

こうしたなかで開かれたこの国際懇談会には二十七ヵ国から三十七人が参加、アジアからは日本（日ソ協会の私一人）、インド、イラン、バングラデシュ、スリランカ、ヨルダンの六ヵ国。イタリア、フランス、ポルトガルなどヨーロッパ諸国からは最も多い二十七名の参加がありました。

懇談会での各国代表の発言をいくつか紹介しておきましょう。

ジニシ・ポルトガル・ソ連協会編集長は次のようにのべました。

「一九七四年四月革命のあと、六月にポソ協会が設立され、現在会員は一万五千人。『平和と友好』紙を発行している。編集部員は編集の他にどこかで働いており、経済危機ではあるがこの機関紙を発展させたいと考えている。政府や反動勢力のニセの情報を打破し、ソ連についての正しい報道をしていくことがもっとも大事なことである」

アラブ諸国で唯一の機関誌を発行しているヨルダン・ソ連協会のグスス編集長は、「私たちは友好会館をもち、その活動はヨルダンの政治に影響を与えている。雑誌『友好』の編集メンバーは二～三人ですが、仕事のあと編集にたずさわっている。雑誌は自分のお金でつくり、ページ数は八〇ページ。重要な話題は発行部数をふやすことである」とのべました。

仏ソ協会は定期月刊雑誌『フランスとソ連』を発行しています。私がモスクワでいただいた四月号はＡ４サイズのカラー表紙、五十八ページの体裁のもので、全体としてソ連紹介のグラビア誌といえるものです。四月号は「ソ連の職場スポーツ」の特集を組み、宇宙、経済、文学、教育、演劇、映画、音楽などが分野ごとに網羅され、フランス国内各地での仏ソ協会の活動——ソビエト映画の夕べ、写真展、展示即売会、ロシア料理の会など——も紹介されています。

ほとんどの機関紙誌はその国の協会が独自に発行しているものですが、フィンランドではフィンランド・ソ連協会とノーボスチ通信社が共同編集という形をとっています。この雑誌『我々と世界』はモスクワとヘルシンキの両方に編集部を確立し、発行部数は三万五千部。編集部は十四名という資本主義国では最大の規模で、両国で販売されています。

私は最終日の最後に発言し、日ソ協会機関紙『日本とソビエト』はその前身である『ソヴェトニュース』（一九四八年）以来三十年間、日本で唯一の定期発行をつづけ、日ソ両国民の真の友好親善に大きく貢献してきた新聞であることを強調しました。

さらに、日ソ協会では、機関紙を日本国民の実情に合致した自主的で国民的な日ソ友好新聞として広範な人々に読んでもらえるように積極的に、編集の改善と普及につとめるとの立場から、現在紙面刷新と普及の運動にとりくんでいることを報告しました。

会議参加者は、今後の活動を発展させるために、ノーボスチ通信社・タス通信幹部との懇談会をもち、写真提供などの問題について話しあいました。

各国の対ソ友好運動を大きく発展させ、現代ソ連の実情を正しく広範な国民に紹介していくうえで、友好団体の機関紙誌の果たす役割は一層重要な意義をもってきているといえます。今回の機関紙編集者国際懇談会ははじめての開催でしたが、それぞれの立場の尊重のうえに立った経験の交流は今後の大きな力に転化するものと確信します。

ソ連の海洋養殖場

ソ連漁業省科学技術評議会副議長、教授　ビケンチー・ザイツェフ

つい最近まで世界の海洋問題にかんする魚類学者の研究といえば、微生物学的研究に限られていたものだが、いまは経済問題も討議している。経済問題とは、海洋は人類に何を与えることができるか、われわれや孫の代にも海産物をたっぷり確保するには、海洋に何を与えなければならないか、という問題である。

ここ数年間にソ連は、海洋農場、海洋養殖場をつくる貴重な経験を積んできた。こうした養殖場で養殖、飼育されているのは、たくさんの種類の魚（たとえば、カレイ類、ブリ、スズキなど）をはじめ、カキ、ホタテ貝、タコ、エビ、カニ、海藻などである。海洋養殖場の生産性は、世界の最もゆたかな漁場の生産性よりもつねに著しく高い。たとえば海洋の魚の養殖場1ha当たりの魚の生産量は70―80t、イガイ養殖場の1平方m当たりの水揚げ量は5―6kg、コンブ養殖場一ha当たりの水揚げ量は60―70tである。

いま海洋養殖場はソ連の沿岸をとりまく全海洋にあり、たとえばバルト海沿岸水域では、フォレリ（ニジマスの類）とベステル（ベルーガという種類のチョウザメとステルリャジという種類のチョウザメとの雑種）の養殖技術が開発改良された。海洋養殖場の生産性は1平方m当たり10―20kgで、そこではかん詰め用フォレリ（重量一五〇―二〇〇g）、市場向けフォレリ（三〇〇―五〇〇g）、大フォレリ（1・5kg以上）が養殖されている。

アゾフ海・黒海水域のタガンログ湾のコルホーズは、ベステルを養殖している。この「赤い星」コルホーズは一九七五年に入江に設けたいけすで4t余りのベステルを養殖した。ベステルは子を生まないので、再生産のためにベルーガを養殖している。同じ一九七五年にアゾフ海にベルーガの生きのよい稚魚が放流された。アゾフ海沿岸の漁業コルホーズは一九八〇年までに海のいけすで一三一〇tのベステルを養殖し、一七〇万尾のベルーガの稚魚をアゾフ海に放流する計画をたてた。

マガダンの魚類学者はオホーツク沿岸水域にニシンの人工産卵場をつくることを提案した。ニシンは海中に立てた網の糸に、海藻にうみつけると同じくらいたっぷり卵をうみつけた。

沿海地方のポシエト湾にホタテ貝とカキを養殖する海洋実験基地が設けられてもう数年になる。一九七六年にこの基地では約一二〇〇万個のホタテの稚貝が養殖されたが、いけす養殖の場合のへい死稚貝は天然の条件に比べて半分、ないしは1/3であった。これはホタテ貝の養殖の場合とても大事なことである。なぜならホタテ貝の産卵率はひじょうに高く、（雌1個の抱卵数は二五〇〇万個―一億七〇〇〇万個の卵）、へい死が減ることはそれだけおいしいタン白質食品がふえることになるからだ。

カキ養殖基地でも同じような有望な成果があがった。1年半のサイクルの終わりに、カキ養殖場1平方m当たり約〇・5kgのカキが生産された。

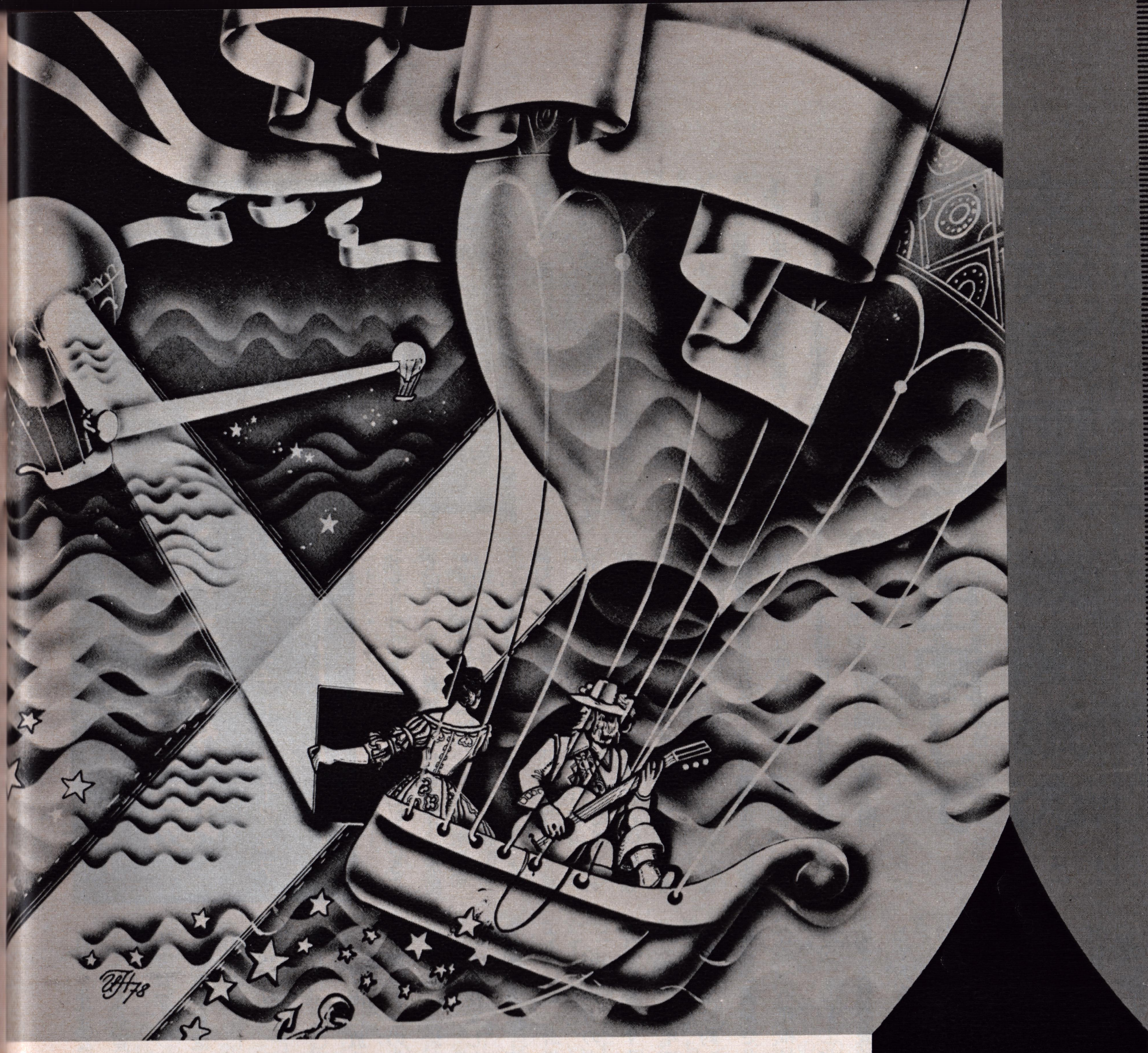
一九七七年からコラ湾の西ゼレネツ入江でイガイの養殖実験が行われている。天然の場合だと、イガイの洲（す）一haから年平均約一五〇kgの貝肉が供給される。あまり年数はかからないが、けっして最高の効果的方法とはいえない採苗施設での人工養殖の場合の貝肉の歩留まりは1ha当たり15―25t。特別なイカダを使った養殖の場合、1ha当たりの生産性は一二〇tにまであがっている。さらにケルチ海峡や黒海の若干の水域の場合、1年半に1ha当たり三〇〇tのイガイ肉を生産することができた。そのうえイガイには人工のエサも、高くつく複雑な設備もいらず、ただイガイの成長度に影響を及ぼす水の常時交換に、気をつけるだけでよい。

極東にはコンブやテングサの養殖場がつくられた。コンブはすでに住民の食卓にのぼっている。

こうして、多数の海洋養殖場の設置や海洋の生産性を向上する他の措置の実施によって、ソ連の食料資源は著しくふえよう。海洋養殖場の生産性は実に普通の海の漁場の五〇〇〇倍なのだ。

レーザーで空を飛ぶ

アレクサンドル・クリヤチコ



レーザーについてここでくどくど紹介するまでもなかろうが、もしここでレーザーの〝職業〟を列挙するとしたら、それだけで紙面の半ページはたっぷりとるだろう。

ソ連の学者たちの研究からおすと、レーザーにはロケット・エンジンまたはラムジェット・エンジンの基礎になるというもう一つ新しい〝職業〟が加わる見込みだ。今宇宙飛行では化学燃料を使った動力装置が絶対独占の形だが、こうしたエンジンが現れれば、その独占は打ち崩されよう。

宇宙飛行へのレーザーの応用

ロケットの光子エンジンの構想が現れたのは、半世紀あまりも前のことで、例によってまずSFに登場した。そのエンジンに普通の光線、ついでレーザー光線を使うまじめな案も現れた。しかしこの種のエンジンを早急に開発する期待はたちまちにして消え失せた。こうしたエンジンで乗用車ほどの大きさのロケットを打ち上げるには、既知の放射線源の数十億倍も強力な放射線源が必要だからである。

それでもやはりレーザーは、宇宙船の新しいエンジンの開発と取り組んでいる学者たちの注目を引いている。その理由の一つはレーザーの周知の性質にある。その性質とは、レーザーの焦点のエネルギー密度が1立方cm当たり数十億KWに達することだ。エネルギー密度がたとえその数万分の一でも、どんな物質も一瞬にして蒸発してしまう。

一九六二年にソ連科学アカデミー・P・N・レベジェフ物理学研究所は、この現象をなんとか実地に応用しようと考えた。強力なレーザー光線を標的に照射すると、標的は蒸発し、蒸気はジェット・エンジンのノズルから出るように、標的の表面から勢いよく噴出する。その蒸気の圧力は光圧の数万倍、数十万倍にもなりうる。

一九六六年にこの研究所は次のような実験を行った——数十分の一mmの大きさの物質の粒子をルビー・レーザーの焦点におき、照射すると、チリの一部はたちどころに蒸発し、残りの部分は秒速最高30kmで飛び散った。秒速30kmというと、人工衛星を地球の軌道に乗せたロケットの速度の3倍余りである。だがこのチリの質量は数分の一mgだった。

こんな方法で宇宙船（有効積載量が数t、あるいはもっと少なく数十kgでも）を必要な速度に加速できるだろうか。地球上の全部のレーザーのエネルギーを使っても、まず無理であろう。しかしこの面の技術は急速に発達しており、すでに宇宙飛行にレーザー技術を使う新しい計画もある。

フォードル・ブンキン・ソ連科学アカデミー準会員、ノーベル賞を受賞したアレクサンドル・プロホロフ・アカデミー会員の指導により、いまレーザー光線で熱せられる空気が作業物質となるラムジェット・エンジンを開発中である。しかしここでも、十分な推力をうるには、いまの尺度から見て巨大な出力のレーザーが必要である。

風船飛行にレーザーを

これらの計画がはたして実現するかどうかは将来の問題だが、レーザーを風船飛行に使うことは、現在すでに可能だ。気象観測や成層圏用気球は、気象学や宇宙線、大気圏、成層圏の調査研究に広く使われている。飛行船への関心も復活しており、飛行船のパラメータが抜本的に改善されれば、これまでの航空機を若干圧迫できよう。

初期の風船であるモンゴルフィエの熱風船には熱い空気がつめられた。熱気は冷たい空気よりも軽い。熱気を送り込まれた風船は揚力をもつ。現在の風船にはヘリウムまたは水素がつめられていて、ガスを熱すると、ガスは膨張し、風船の揚力を増し、風船は上昇する。

この方法は昔からよくわかっていたことだが、加熱装置とエネルギー源の重量が、揚力のプラス分を消費してしまうのが難点だった。ところがレーザーなら、ゴンドラ内ではなく、地上に配置できる。

数個のガスのうを作りそれにヘリウムをつめ、貨物で平衡をとり、パルス・レーザー光線の進路に置く。点火すると、風船は上昇し、しばらく最高上昇高度のところを飛んでから、ゆっくり下降した。だが、ガスのうが割れるという事故があった……

では風船につめるガスは何が一番良いか？ ガスのうの材料はどんなものがよいか？ 風船のガスを熱するのに、いろいろなやり方があることがわかった。第1はガスのうの材料に赤外線を通すものを使い、ガスを直接光線で熱する方法である。第2はレーザー光線を通さないガスのうそのものを熱して、ガスに熱を伝えるやり方だ。このようなガスのうを使うと、風船を操縦できる見通しが出てくる。ガスのうのある部分が熱せられると、そのまわりの空気も熱くなり、まるでガスのうから飛びのき、ガスのうをぐっと引き離すかのようになり、風船に反動力と同じ性質のかなり大きな力が作用する。蛇足だがこの力はかつてレベジェフの光圧測定実験をひどく複雑にしたいわくづきのもので、光圧の数千倍、数万倍にのぼる。ガスのうの一定の個所をレーザー光線で熱すると、風船を思った方向へ動かすことができる。こうなると操縦できる風船となり、飛行船と同じことになる！

ガスを熱し、風船の運動を操作する別の方法もある。レーザー・トーチがその一例。これはある起爆剤にレーザー光線を集中させると、一定条件のもとで点火する放電である。

研究はまだ終わっていない。物理的問題のほかに、風船の追跡、光線の照準、気のう（球皮）の強度の向上などと関連のある純技術的問題もこんご出てくるだろう……

しかしこれらの問題も完全に解決できると学者たちは見ている。

（カット　I・ネチャエフ）

国内問題

ソ連の学校教育の課題

『今日のソ連邦』評論員
ミハイル・エフィーモフ



9月1日は新学年

もしわが尊敬する読者がソ連を訪れて、朝早くまちや村の通りを片手を親にひかれ、もう一方の手に秋の花々の束をにぎった晴れ姿の少年少女が急ぎ足で歩いて行くのを見かけたら、カレンダーを見なくても、きょうは9月1日で、新学年の始まる日だと気がつくに違いない。

4階建てのれんが造りの建物のまわりはちょっとしたお祭り騒ぎ。晴れ着の子供たちや上気したママ、パパ、おじいさん、おばあさんの群、花々、ほほえみ、音楽…… この肝心の建物が何かを知りたい人は、わざわざ表にまわって表示板を見るまでもなかろう。それは十中八九、始鈴の鳴る前の学校なのだ。

9月1日が普通のウイークデーで、カレンダーが祭日を示す赤字になっていなくても、子供のあるソ連の家庭ではどこもみな、しきたりどおり祭日気分がみなぎる。パパ、ママ、おばあさん、おじいさんはもちろん、小学生自身も新学年を祝う。

これは外国の読者にはちょっとわかりかねることかもしれないが、ソ連ではこの日を祝うだけのちゃんとした理由があるのだ。

なぜ新学年を祝うか

ほんの60年前、自分の名前がきちんと書けるとか、かんたんな広告が読めるような労働者や農民は、12月に狂い咲きするサクラの花よりもまれだった。

レーニンとその党は、国民が読み書きでき、教養をもってこそはじめて、社会主義が建設できることをよくわきまえていた。こうして革命初期以来、多数の敵から社会主義を守るのに必要な銃剣や小銃と並んで、新体制の主要な武器となったのが、左官ごて、シャベル、カマ、そして……教科書である。

発達した社会主義社会があげた主な成功のうちで、私はとくに普通10年制義務教育をあげたい。60年間、つまり一世代の生涯の間に、ソビエト政権は義務教育の〝上限〟を文盲一掃講習から10年制学校にまで引き上げることができたのだ！ 日本の読者にはこの成果が、あまりたいしたものには見えないかも知れないが、われわれにとってはこれは、選ばれた者しか教育を受けられなかった反民主的教育制度（ツァーリズムの最も反動的、保守的な産物）の根本的変革を意味している。ソビエト政権は、ごく短い期間になん千万！という子供や成人に読み書きを教え、生徒にあらゆる必要なもの（りっぱな資格の教師、教科書、給食など）を無料で確保する近代的な学校をつくることができた。

ソ連の中等教育の規模はひじょうに大きく、普通教育学校の生徒数は四五〇〇万人余りである。

全ソ教員大会

われわれは、二つの理由で学校教育の問題を本号で取り上げることにした。理由の一つは、新学年の始まりを祝うというさきに述べたしきたりをある程度重んじたからであり、第2の理由はこの夏全ソ教員大会が開かれたからだ。

このような大がかりな、権威の高い大会が開かれたこと自体、ソ連の生活のありきたりの行事ではけっしてない。何分前の大会が開かれたのは10年前のことなのだ。それだけでこんどの大会がありふれたものでないことはよくわかろう。クレムリン大会宮殿で開かれたこんどの大会には四〇〇〇人の代議員が参加し、L・I・ブレジネフや他のソビエト国家の指導者たちも来賓として出席した。ミハイル・プロコフィエフ・ソ連教育相が長時間にわたる報告を行ったが、ちなみに教育相はソ連最高会議代議員として社会活動にもつくしており、ソ連議会グループのソ日部の会長でもある。教員大会で討議された諸問題は、ソビエト教育制度の実践そのものと教育制度の発展傾向から出てきたものである。

前の大会からこんどの大会までの10年間に学校生活には、ひじょうに重大な出来事がたくさん起こった。ソビエト教育史上初めてソ連最高会議は、ソ連、連邦構成諸共和国の国民教育基本法を承認した（一九七三年）。その後「農村普通教育学校の活動条件をいっそう改善する措置にかんする」決定が採択され、さらに昨年末には「普通教育学校の生徒の教育と訓育、生徒の労働にたいする準備教育のいっそうの改善について」というひじょうに重要な政府決定（本誌第6号参照）が採択された。

教育の課題

これらすべての基本的な法令や党・政府の決定のねらいは、教育の課題を現代の必要にできるだけ近づけ、学校卒業者の自主的労働への準備を最良のものにすることであった。

これと関連してレーニンの言葉を一つあげておきたい。「共産主義の研究ということが、共産主義の著作や本や小冊子に述べてあることを習いおぼえることにすぎないとすれば、共産主義的な経文読みやほら吹きが容易すぎるほどできあがる恐れがあるが、そういうことはわれわれにたえず害毒と損害をもたらすだろう。なぜなら、この連中は、共産主義の本や小冊子に述べてあることを習いおぼえ、読みとばしはしても、これらの知識全体を結合する能力がなく、共産主義が真に要求するようなやり方で行動することができないだろうからである」（レーニン全集、日本語版、二八一ページ）

しかし「そのようなやり方で行動する」には、新社会の未来の建設者は、しっかりした知識、かなり幅広い教養をもち、マルクス主義科学のABCを知り、愛国者、国際主義者でなければならない。そしてソ連の学校は家庭といっしょに、ほかならぬこうした人間を教育するという重要な課題と取り組んでいるのである。これがひじょうに名誉のある重要な仕事であり、またひじょうにむずかしい厄介な仕事であるのは当然だ。

ソ連では単一の国民教育制度がつくられ、効力をもっている。つまり事実上モスクワでも、ごくへんぴな農村でも、子供は同じ教科書、同じカリキュラムで学んでいるわけだ。従って、職業を選ぶ可能性も、大学に入るチャンスも同じである。これはわれわれの大きな社会的獲得物といえよう。しかしこの制度からかなり深刻な問題も出ている。

普通教育学校の卒業生は、ピタゴラスの定理も、明治維新も、ドストエフスキーの小説も、共産党と政府の主な決定も必ず知っていなければならない。また旋盤の扱い方またはタイプの打ち方を知っていなければならない。しかしある者は卒業すると工場で働き、またある者は微生物学者あるいはロシア語教師になりたいと思っている。結局、学校で一生けんめいに身につけた多くのものが「無駄な荷物」になるのではなかろうか？

原則的にはそうはならない。いまソビエト教育学は、教える知識の量を縮小しないどころか、「パンクしそうな情報量」にできるだけ適応するため、知識量をけんめいに増やそうとつとめている。いまの課題はもう知識の総和を与えることではなくて、これらの知識を「取捨選択する」すべを教えることである。ここで決定的な役割を果たすのは、教授＝学習の方法、学校設備、生産基地であり、これらは授業時間を増やさずに各授業時間の効率を最大限に高めるのに役立たねばならない。社会と自然の発展の根本法則の解明に重点が置かれるが、その場合教師の職業技能、技能資格、個性そのものの役割が高まるのは当然だ。なおソ連の教師の数は四五〇万人近い。

ソ連ではこの知識人の大部隊は特別の尊敬をうけている。それは、二八万人以上の教師がそのけだかい労働にたいして、さまざまの勲章や記章をうけていることで十分わかろう。78人の教育者がソ連最高会議および連邦構成諸共和国最高会議の代議員である。

青少年を労働に親しませる

学校の大きな緊要の課題は、青少年を労働に親しませることである。わが社会はつねに労働力を必要としている。これは「各人はその能力に応じて、各人にはその労働に応じて」という社会主義の基本原則にも合致している。われわれは、社会的に有用な労働はすべて尊敬に値するし、ソビエト社会における人々のすべての業績は労働でのみ計られる、という立場をとっている。ざっくばらんにいえば、かつてソ連では大学に進学せず、すぐ就職する卒業生を多分に〝失敗者〟と見たことがあった。いま学童と両親の心理に見られたこの歪みは取り除かれつつある。すでに普通教育学校の卒業生の75％余りが、毎年すぐ工場に就職していることをあげておけば、よくわかってもらえよう。

労働教育の形態は実にさまざまである。たとえばことしの夏約一千万人の上級生が夏休みに工場やコルホーズで力相応の労働をした。

しかしわれわれに必要なのは、現代的な知識がつめ込まれた明せきな頭脳や労働好きな働く手だけではない。われわれが望んでいるのは、まじめに献身的に働く用意のある若い男女や共産主義建設をめざす自覚に燃えた思想的闘士を養成することだ。われわれには真の愛国者と国際主義者が必要なのである。

教員大会では、知識をつかって道徳に磨きをかけ、知識をつかってよく調和のとれた人間をつくるという課題は、ソ連の学校の困難ではあるが、主要な課題の一つであると述べられた。

レーニンの生涯と闘争、共産党史、革命の嵐の日々、さきの対ファシズム戦の英雄たち、いまソ連がやっている平和をめざすたたかいを物語る授業は、これらの目的に役立っているし、七万の学校博物館と六万の戦争・労働の英雄の記念碑やオベリスク（生徒たちが製作）も、この目的に役立っている。

……9月1日は例年のように四五〇〇万人以上の生徒が、クラスに入ってきた先生を歓迎する。そして先生はしきたりどおり次のようにいう。

「こんにちは！ きょうの授業のテーマは……」

こうして新学年が始まり、いつもの学校の一日が始まる。しかしこの日新入学した者は次の21世紀へ、自分たちの先輩が達成し、かちとったすべてのすぐれたものを伝えることになるはずだ……

Olympics-80

オリンピック憲章とソ連のスポーツ

――パブロフ議長に聞く



本誌記者はセルゲイ・パブロフ・ソ連オリンピック委員会・ソ連体育スポーツ委員会議長と、オリンピック憲章（規約）とソ連のスポーツの関係について、次のような一問一答を行った。

記者 80年オリンピックまであと2年に迫ったいま、日本のスポーツ界は、オリンピック開催地ソ連のスポーツとその組織的・道義的原則に強い関心を示している。またこれらの原則がオリンピックの理想にどれほど合致しているかにも興味をもっている。周知のようにオリンピック憲章は、国際オリンピック運動の四つの基本目的をあげており、その第1に「スポーツの基調をなすりっぱな肉体的、精神的資質の発達を推進すること」と定めている。ソ連の体育・スポーツ運動の課題はこの原則に合致しているか？

パブロフ議長 合致している。ソ連のスポーツ運動の主要目的は、ゆたかな心、道徳的純潔、りっぱな肉体の三つが調和し合っている新しい人間を育成することにある。ソ連の国家機関と社会団体、スポーツ団体は、スポーツとツーリズムの発達を保障している憲法にもとづいて、この課題を実現している。

革命前のロシアのスポーツ人口は五万人だったが、いまは五五〇〇万人に達しており、国が体育とスポーツの発達に力を入れている。一九七八年度だけでも国家予算の保健・体育費は一二六億ルーブルにのぼっており、各人がサークルや部、団体内でスポーツをやる費用は一切国庫負担である。ソ連の人々は三〇〇〇余りの競技場、約六万六〇〇〇の体育館、一四〇〇のプール、六〇万余りの運動場を無料で使用できる。住宅地区では人口三万―五万人ごとに必ず競技場、体育館、プールを設置することが法律で義務づけられている。

このように、ソ連の人々は身体を鍛える機会に十分恵まれている。また三〇万人のりっぱな専門家がスポーツの指導に当たっている。24の大学と24の体育中等専門学校、89の大学体育学部、77の師範学校が体育・スポーツの専門家を養成している。

スポーツの教師は単なる専門家＝トレーナーではなく、まず生徒のスポーツ技能の向上につとめ、強い精神力の育成と個性づくりに心をくばる教育者である。スポーツマンの心をゆたかな

ものにするための教師の配慮を物語る例を一つ挙げておこう。青少年スポーツ学校（ソ連には五七〇〇あって、次の代のチャンピオンを養成する課外施設）では普通教育学校の成績の悪い生徒をいれないし、落第点をとった小中学生も成績がよくなるまでトレーニングから除外される。

記者 オリンピック憲章には「スポーツを通じて国際的敬意と友好をつくり出して、よりよく、いっそう平和な世界の建設に助力する」とあるが、これについてコメントしてもらいたい。

議長 ソ連のスポーツ団体は、諸国民間の相互理解、平和、友好の強化を推進することを、スポーツの使命と見ている。「スポーツは平和の大使」という簡潔なモットーは、いま広く唱えられている。だからわれわれはスポーツの国際交流を極力拡大し、強化している。

一九七七年だけでソ連の一〇六五のスポーツ代表団が97カ国の二八五〇のさまざまなスポーツ行事に参加した。ソ連側も外国から九九二のスポーツ代表団を招いた。こうして合計約三万五〇〇〇人がこの交流に参加した。

ソ連や他の社会主義諸国主催のいくつかのスポーツ競技は、名称そのもの（たとえば「友好」トーナメント、平和の自転車競技）が、スポーツ競技の主要目的を示している。

ソ連は世界のどの国よりも幅広くスポーツの国際交流をやっているといい切れる。ソ連のスポーツ委員会は世界48カ国と長期のスポーツ協力協定を結んでおり、一九七七年にはアルジェリア、ヨルダン、シリア、エチオピア、イラン、アフガニスタン、メキシコとこの種の長期協定を結んだ。

現在ソ連は5大陸の一〇〇カ国以上とさまざまの形のスポーツ交流を続けている。

これまでのスポーツ交流を拡大するとともに、新しく交流を始めることは、平和と国際緊張の緩和に役立つ。

記者 オリンピック運動のいま一つの目的は「諸国民間に善意をつくるためにオリンピックの諸原則を全世界に広める」ことだが、これについてのあなたの意見は？

議長 レオニード・ブレジネフ・ソ連最高会議幹部会議長・ソ連共産党中央委員会書記長は、国際オリンピック委員会（IOC）、第21回夏期オリンピックの組織委員会とこの大会参加者あてにメッセージを送り、「ソ連は現代オリンピック運動を支持してきたし、こんごも支持する」と強調した。この支持は、ソ連のスポーツ団体によっていろいろな形で実行されている。ソ連代表がIOCを含む国際スポーツ団体の活動に積極的に参加しているのもその支持の一例である。ソ連代表はそういう場で一貫してオリンピックの諸原則の純潔を守り、つねにオリンピック運動の民主化を支持し、この運動へのいかなる差別待遇の持ち込みにも反対している。また「オリンピック連帯」計画のわく内外の体育分野における発展途上諸国への援助も、さきの支持の現れだし、諸外国でソ連のスポーツ専門家やコーチが、オリンピック・チャンピオンを含むハイクラスの選手の養成を助けているのも、その支持の現れといえよう。一九七八年6月1日現在、一二七人のソ連のスポーツ専門家が世界の25カ国で長期契約に基づいて活動している。

ソ連のスポーツ団体の国際活動全体は、ソ連のスポーツ・体育運動の性格に合致しているオリンピックの諸原則を世界中に広め、宣伝することにつきるといってもよかろう。

記者 現代オリンピックの第4の目的は、オリンピック憲章によると「4年に1回、すべての国のアマチュア・スポーツマンをスポーツの大祭典に参集させること」にある。ではこの目的に、ソ連のスポーツ団体はどんな態度をとっているか？

議長 一九五一年に国際オリンピック委員会で承認されたソ連オリンピック委員会は、はやくもその翌年の第15回夏季オリンピック大会（ヘルシンキ）に選手団を派遣した。それ以来ソ連選手は夏冬のオリンピックに常時出場して、高度の技を披露し、これまでに総計八〇一個のメダルを獲得した。うち三〇九個が金メダルである。

ソ連の首都モスクワは、オリンピックの理想と伝統を忠実に守ると同時に、オリンピック開催地に選ばれるよう努め、ひとたび開催地に選ばれるとただちに、大会の準備、組織活動を大々的にくりひろげ、80年オリンピックが高いレベルで実施され、友好と平和のけだかい目的に役立つよう力をそそいでいる。

憲章にうたわれている現代オリンピック運動の主要な目的は、ソ連のスポーツマンにとって身近で、しごく当然のものである。だから彼らはこの目的にとても生き生きとした反応を示している。

読者の質問に答える

ソ連のサッカー界

会津若松市の星　徹さんから寄せられたソ連のサッカーの競技システムについての質問にお答えします。

サッカーは、ソ連で最も人気のあるスポーツです。サッカーの競技人口は約四〇〇〇万人。これほど多くの人がサッカーをやっている国はほかにありません。ソ連のサッカーはアマチュア・スポーツです。ソ連にはプロのチームはありません。

毎年多数のチームがソ連選手権大会（リーグ戦）に参加しています。今シーズンは一七五のチームが三つのリーグ——最高リーグ、1部リーグ、2部リーグに分かれて覇を競っています。

いちばん強いのは最高リーグです。今年は16のチームが最高リーグに名を連ねていて、このうち5チームがモスクワのチーム、他はレニングラード、キエフ、トビリシ、タシケント、バクー、その他の都市のチームです。シーズンが終わると、最下位になったチームが1部リーグへ落ちます。その代わりに1部リーグの上位3チームが最高リーグに進出します。こうして来シーズンは、18チームが最高リーグに顔をそろえます。ソ連サッカー連盟は、最強チーム同士の試合数をふやすために、そうすることに踏み切ったのです。

今シーズン（4月—11月）、最高リーグの各チームは2回総あたり戦を行っています。つまり各チームは全部で30試合——ホームグラウンドで15試合、他チームの根拠地へ15回の遠征を行います。このようなリーグ戦は、20チームで構成される1部リーグでも同様に行われます。1部リーグの約半数のチームは、かつて最高リーグで試合をした経験をもっています。このことは1部リーグの強さと、最高リーグ進出をめぐる競争のはげしさを物語っています。

2部リーグは、実際上ソ連全土をカバーしており、一三九チームが2部リーグで競い合っています。

2部リーグは、有能な青少年を中心としたリーグです。このリーグの各チームは、23歳以上の選手を4人以上出場させてはならない決まりになっています。この年齢制限が才能ある青少年に力を発揮するチャンスを与えているので、2部リーグはいわば上位2リーグの予備軍といえるでしょう。

最高リーグの優勝チームがソ連チャンピオンとなります。一九七七年のチャンピオンは有名なディナモ・キエフでした。ディナモ・キエフは、ソ連ナショナルチームに最も大勢の選手を送り込んでいます。オレグ・ブロヒンを筆頭にアナトリー・コニコフ、ビクトル・コロトフ、レオニード・ブリャクなどの選手はヨーロッパでも名声を博しています。ディナモ・キエフは一九七五年に、ヨーロッパでもっとも重要な試合の一つ——欧州クラブ・カップ戦で優勝し、同シーズンの欧州チャンピオン・カップ戦で優勝したミュンヘン・ババリアをおさえて欧州スーパー・カップも獲得しました。オレグ・ブロヒンがババリアのゴールにたたき込んだ神技的な二つの得点（1回目はミュンヘンで、2回目はキエフで）は、彼を一躍有名にしました。この26歳のフォワードは、いまでもすばらしいプレーを見せています。

ソ連の有力チームは、ソ連選手権のほかにもたくさんの試合に参加しています。たとえばソ連カップは選手権と並ぶソ連の2大タイトルですが、一九七七年ソ連カップの優勝チームはディナモ・モスクワでした。今シーズンのソ連カップ戦は64チームが参加して開始されました。試合はトーナメント方式で、決勝戦は8月13日の全ソ体育デーに行われました。

ソ連のチームは、いうまでもなく、日本のチームをはじめ、世界各国のチームとたびたび試合をやっています。今年の2月には、ブラゴベシチエンスク市のチーム〝アムール〟（2部リーグ）が日本に遠征、4試合を行いました。

いまソ連サッカー界の最大の課題の一つは、80年オリンピックへの準備です。一九五六年のメルボルン・オリンピックで一度だけ優勝したことのあるソ連のサッカー選手たちは、モスクワで勝利をものにしてファンたちを喜ばせようと意気に燃えています。

МЯЧИ, КЛЮШКИ . . . МИНИ-ЮБКИ

Наталья МАСКИНА

Же́нский хокке́й на траве́ впервы́е включён в програ́мму Олимпи́йских игр. Сове́тская кома́нда, как хозя́йка Олимпиа́ды-80, получи́ла пра́во уча́ствовать в турни́ре без предвари́тельных соревнова́ний.

Этот но́вый вид спо́рта в СССР завоёвывает всё бо́льшую популя́рность в стране́. Впро́чем, но́вым его́ мо́жно назва́ть то́лько относи́тельно. Хокке́й на траве́—старе́йшая спорти́вная игра́. Пра́вда, до после́днего вре́мени в неё игра́ли то́лько мужчи́ны, выступа́я на официа́льных чемпиона́тах и Олимпи́йских и́грах.

В СССР же́нский хокке́й на траве́ появи́лся совсе́м неда́вно. И впервы́е в него́ ста́ли игра́ть де́вушки из узбе́кского го́рода Андижа́на. Миро́н Ким, тре́нер кома́нды “Андижа́нка”, расска́зывает:

—Ещё совсе́м неда́вно о хокке́е на траве́ у нас зна́ли едини́цы. А сего́дня в Андижа́не—э́то са́мая популя́рная игра́. В на́шем го́роде прово́дятся турни́ры мужски́х и же́нских кома́нд, откры́та де́тско-ю́ношеская хокке́йная шко́ла, стро́ится специализи́рованная ба́за для заня́тий ю́ных и взро́слых спортсме́нов.

А всё начина́лось с того́, что мы реши́ли провести́ экспериме́нт: попро́бовать приви́ть но́вую тогда́ игру́ в на́шем го́роде. Ведь климати́ческие усло́вия в среднеазиа́тских респу́бликах и в Индии и Пакиста́не, где хокке́й на траве́ дости́г больши́х успе́хов, о́чень похо́жи.

Начина́ть нам бы́ло тру́дно, приходи́лось самостоя́тельно постига́ть техни́ческие и такти́ческие прему́дрости но́вой игры́. Мне, тре́неру по гандбо́лу, ну́жно бы́ло учи́ться за́ново”.

Но так и́ли ина́че, в 1975 году́ в Андижа́не прошло́ пе́рвенство го́рода. В 1977 году́ лу́чшая кома́нда го́рода “Андижа́нка” успе́шно вы́ступила в Москве́ на пе́рвом всесою́зном турни́ре и заняла́ пе́рвое ме́сто.

Сего́дня геогра́фия ле́тнего же́нского хокке́я расши́рилась. В э́ту игру́ игра́ют де́вушки Москвы́, Го́рького, Улья́новска, Сы́зрани, Ана́пы и други́х городо́в. И на традицио́нном турни́ре ны́нешнего го́да спортсме́нкам Андижа́на пришло́сь потесни́ться. Они́ бы́ли лишь тре́тьими. А победи́телями ста́ли спарта́ковки из Подмоско́вья.

Внима́ние специали́стов привлекла́ тогда́ напада́ющая э́той кома́нцы Ната́ша Бузу́нова. Де́вушка легко́, с прису́щим прекра́сному по́лу изя́ществом атакова́ла, заби́ла бо́льше всех го́лов.

Ната́ша счита́ет, что же́нский хокке́й—одна́ из са́мых краси́вых игр:

—Ра́ньше я занима́лась скоростны́м бе́гом на конька́х. Но одна́жды уви́дела дико́винную игру́—де́вушки игра́ли в хокке́й. Зре́лище бы́ло я́рким и необы́чным. На зелёном по́ле в пёстрых ма́йках и коро́тких элега́нтных ю́бочках бе́гали спортсме́нки. Игра́ была́ эмоциона́льной и динами́чной. И мне о́чень захоте́лось заня́ться э́тим ви́дом спо́рта.

Мы продолжа́ем напряжённо тренирова́ться—до Олимпиа́ды оста́лось совсе́м немно́го вре́мени, а нам ну́жно ещё догна́ть свои́х колле́г по спо́рту за рубежо́м. Ведь пока́ мы заме́тно уступа́ем по мастерству́ спортсме́нкам из Англии, ФРГ, Чехослова́кии, у кото́рых бо́лее соли́дный о́пыт игры́ в хокке́й на траве́”.

Ната́ша Бузу́нова вме́сте с лу́чшими игрока́ми клу́бных кома́нд вошла́ в число́ кандида́тов в соста́в сбо́рной Сове́тского Сою́за. Неда́вно, выступа́я на междунаро́дном турни́ре Ле́йпциге (ГДР), сове́тская кома́нда заняла́ тре́тье ме́сто. Есть основа́ния полага́ть, что при насто́йчивых трениро́вках сове́тские де́вушки мо́гут стать досто́йными сопе́рницами на́ших госте́й на Олимпиа́де-80.

本号のテキストは48ページ掲載の記事「オリンピックをめざすソ連女子ホッケー」の原文(全文) です。なお，48ページの記事は，スペースの都合で一部省略してあります。

北方の民族芸術
チュクチの骨細工



骨細工師イワン・ネルノフ

そのむかし、チュクチ人(2ページの関連記事参照)の猟師は猟に出かけるにあたって、そのつど自分の服にお守りいつけた。お守りは、セイウチの牙(きば)を彫って作った。

骨細工は、チュクチ人のもっとも古い、もっとも一般的な芸術だった。ソ連の考古学者がベーリング海峡にのぞむウエレン町の古墳を発掘したさい、骨で彫ったクマ、クジラ、セイウチ、オットセイの像、それにセイウチの牙で彫ったさまざまな像が発見された。それらのいくつかは、芸術的にきわめて高度なものだった。もちろんこれらが、今日のチュクチ骨細工芸術の原型だと考えられる。

一九三一年にウエレン町に工房が組織され、現在そこで男女合わせて60人の骨細工師が仕事をしている。現代の細工師は、のこ盤、ボール盤、研磨盤その他の機械を使う。工房の芸術指導者セイグテギンの話によれば、ここではむかしの芸術と現代的な生産技術の結合をめざしている。

細工師たちは骨製のけものの像や、自分たち自身がしばしば目撃する動物たちの格闘の場面を彫っている。うっとりと日なたぼっこをしている3匹の不格好なセイウチ、アザラシの子とたわむれる白クマの子、格闘するオオカミとトナカイ等々、テーマはチュクチ人をとりまく自然が与えてくれる。

細工師の手の中で、爪のような小さなカッターがきしり音を立て、微細な線の謎めいた組合せを残していく。遠くから見ると、模様は透かし図案と見まがうほどだ。だが、描かれた輪郭を黒あるいはその他の色の石墨の粉でみがくと、牙にはそれまで見えなかった細い線の複雑な組合せが浮かび出る。シルエットは次から次へと具体的な姿を帯び、走るトナカイぞり、防寒服に身を固めて家から出て来た人間などが現れる。カッターが触れなかった空間さえもが生気を帯び、雪におおわれた大地、沿岸の氷、海に変わる。

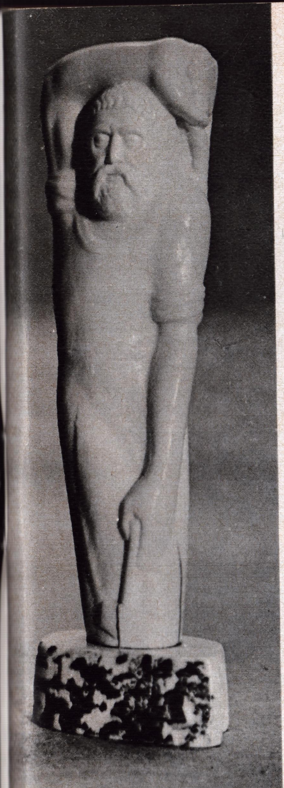
骨に彫られる絵もひじょうに興味深い。その一つ一つが、チュコトカの住民についての独特な絵物語である。そこでは現実が、しばしば空想とからみ合っている。『町なかのクマ』『クジラ漁』『娘の掠奪』『太陽の妻』など、日常生活のエ



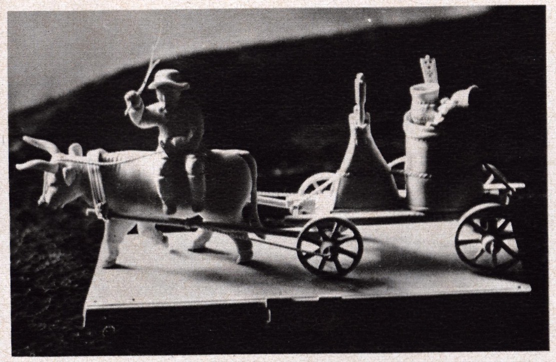
『ツンドラのスポーツ祭』
(G・ハゾフ作)



骨細工には必ずツンドラの生活と海の生活が描かれる。



S・エバングロフ作
『鍛冶屋』



『市に向かう農民』(ウクライナの情景)



▶骨細工師ゲマウゲ。この帆船もセイウチの牙で作ったもの。

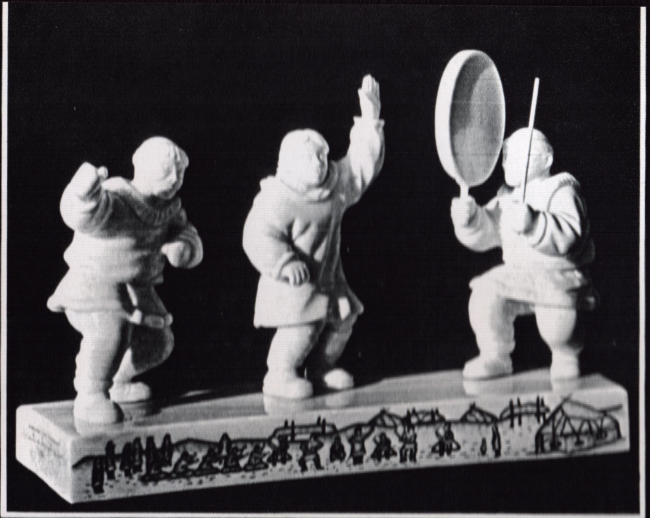
ピソードが題材になる。だが、絵の内容がどんなにちがっていても、細工師たちはつねに確固不動のルールを守っている。すなわち、牙の片側には海の生活を、反対側にはツンドラの生活を描くのである。

経験豊かな細工師は、下書きなしに、失敗もせず、やすやすと絵を彫る。まるで、相手にしているのが硬い骨ではなく、失敗したら線を消せばいい紙ででもあるかのように。つねにいくつもの情景から成り立っている複雑な構図が、小さな空間に巧妙に配置されている。牙の特殊な形のおかげで、絵にはひとりでに遠近感や深みや量感が生まれるかのようである。

ウエレン町の骨細工師たちの仕事は、国際的な博覧会や見本市で高く評価されている。そのうちのいくつかは個人のコレクションになっているが、多くは、独特な民族芸術の真の傑作として、博物館の陳列棚におさまっている。工房にも小さな展示コーナーがあるが、そこにはチュクチ骨細工の古典作家とも言うべき古い

A・フョードロフ作
『ワシリー・マンチャルイ』(民族英雄)





『チュクチ人の踊り』
(トゥッカイ作)



ヤクート民族叙事詩の英雄ニユルグン・ボートゥル(S・エゴロフ作)



『ネネツ(北方少数民族)の母』

名人たちのすぐれた作品が集められている。ウエレンの現世代の細工師たちの作品も展示されている。一九七六年に4人のすぐれた名人——セイグテギン、エムリコイン、トウイナトバリ、エムクリにソ連の芸術家たちにとってもっとも名誉ある賞——イリヤ・レーピン記念ロシア連邦共和国賞が授与されたが、壁にかかっているその賞状は、ここの骨細工師たちの才能と職業的技能の高さを物語っている。

今日のソ連邦
一九七八年9月1日号
編集・発行 ソ連大使館広報部（東京都品川区東五反田3—9—13、郵便番号141、電話03・447・3536）
印刷 大日本印刷株式会社



北カフカズ山中の観光地ドンバイ